佐賀県文化財調査報告書第90集

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 6

１９８８年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書　6

１９８８年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

はじめに

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先立ち、埋蔵文化財の確認調査を実施した結果をまとめたものです。

本県には先史時代以降の遺跡が多数存在しており、その密度の高さと重要性は全国的にも注目されています。

県教育委員会では、これらの貴重な文化財の保護と農業を営む方々の生活基盤を整備する事業との調和を図るため、文化財の確認調査と記録の保存を進めております。

今回も、昭和62年度農業基盤整備事業施行予定地区について文化財確認調査を行った結果、旧石器時代から江戸時代にわたる各時代の遺跡が確認されました。

また、古代以来の農業と土地利用の歴史を明らかにするため、4年次目の埋没条里（古地割り）の調査も行いました。

調査の成果は本書に詳しいところですが、その内容が学術資料として、また県民の皆様が郷土の歴史と文化財を愛し、守っていくための資料として広く活用していただければ幸いです。

調査にあたって、文化庁、県農林部、各市町村教育委員会・土地改良担当課、並びに地元の皆様から賜った深い御理解と御協力に対し、心からお礼を申し上げます。

昭和63年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長　志岐常文

例　　言

1．本書は昭和61年度に国庫補助を受けて実施した、佐賀県農業基盤整備事業に伴う文化財調査の報告書である。

2．調査は関係各市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が行った。

3．遺構の実測・写真撮影は調査員が行った。

4．遺物の実測・製図・報告書作成作業は、佐賀県文化課で行った。

◦遺物整理……中島美須美・田中ハルミ

◦遺物実測……古賀安子・梅野角子・上瀧光子・神田浩子

◦製図……三好文子・鳥谷智子・樋渡瑞枝・門司弘美

5．本書の執筆は下記の分担で行った。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－1～5、Ⅴ－26・27、Ⅵ……徳永貞紹

Ⅲ－6、Ⅴ－22・23・28～30……東中川忠美　　Ⅳ……徳富則久

Ⅴ－1……山田正　　Ⅴ－2～4・24……田平徳栄　　Ⅴ－5……鶴田浩二

Ⅴ－6……久保伸洋　　Ⅴ－7・9……八尋実　　Ⅴ－8・10……緒方祐次郎

Ⅴ－11・12……堤安信　　Ⅴ－13……福田義彦　　Ⅴ－14・15……種浦修

Ⅴ－16……川崎吉剛　　Ⅴ－17・21……原田保則　　Ⅴ－18～20……坂井義哉

Ⅴ－25……盛峰雄

6．本書の編集は徳永貞紹が担当した。

7．遺構番号に用いた分類記号は、ＳＴ：古墳、ＳＢ：住居跡・建物跡、ＳＨ：竪穴住居跡、ＳＥ：井戸、ＳＤ：溝・濠、ＳＪ：土器棺墓、ＳＣ：石棺墓、ＳＰ：土坑墓、ＳＡ：柵列、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱穴・小穴、ＳＸ：その他の遺構・不明遺構、である。

8．方位は、位置図・地形図が座標北、遺構図が磁北である。

9．挿図中の、■は遺構・遺物が検出された試掘坑、□は遺構・遺物が検出されなかった試掘坑、－－－は想定される遺跡の広がりを示す。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

1．昭和62年度農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査 …… 1

(1) 農業基盤整備事業に係る協議 …… 1

(2) 文化財確認調査 …… 1

(3) 開発と文化財保護に係る協議 …… 1

2．埋没条里（地割り）確認調査 …… 2

Ⅱ．調査組織 …… 2

Ⅲ．昭和61年度文化財確認調査の内容 …… 5

1．佐賀県東部地区の調査 …… 5

(1) 鳥栖市 …… 6

(2) 基山町 …… 6

(3) 北茂安町 …… 6

(4) 上峰村 …… 6

(5) 三根町 …… 8

(6) 千代田町 …… 8

(7) 東脊振村 …… 8

(8) 脊振村 …… 8

(9) 神埼町 …… 10

2．佐賀西部地区の調査 …… 11

(1) 佐賀市 …… 12

(2) 諸富町 …… 12

(3) 川副町 …… 12

(4) 大和町 …… 12

(5) 富士町 …… 15

(6) 多久市 …… 15

3．佐賀南部地区の調査 …… 18

(1) 武雄市 …… 19

(2) 白石町 …… 21

(3) 有明町 …… 22
(4) 鹿島市 …… 22
(5) 塩田町 …… 22
4．佐賀北部地区の調査 …… 23
(1) 伊万里市 …… 24
(2) 西有田町 …… 25
(3) 相知町 …… 25
(4) 北波多村 …… 25
5．佐賀上場地区の調査 …… 26
(1) 唐津市 …… 27
(2) 鎮西町 …… 27
(3) 呼子町 …… 28
(4) 玄海町 …… 28
6．筑後川下流用水事業に係る調査 …… 28
(1) 佐賀東部導水路 …… 29
(2) 大詫間幹線水路 …… 29

Ⅳ．埋没条里（地割り）確認調査 …… 30

1．調査の概要 …… 30
2．調査の内容 …… 30
(1) 白石西第一地区 …… 30
(2) 白石西第二地区 …… 35
(3) 白石西第四地区 …… 38
3．まとめ …… 41
(1) 白石平野の開発の概要――微地形を中心に―― …… 41
(2) 条里的地割りと斜行地割り …… 43
(3) 堤地区の条里的地割りについて …… 44

Ⅴ．昭和61年度発掘調査の概要 …… 47

1．立花遺跡 …… 48
2．江口四本松遺跡 …… 50
3．中津隈四本松遺跡 …… 52
4．田島一本松遺跡 …… 54

5．船石遺跡 …… 56
6．石動遺跡群 …… 58
7．中園遺跡 …… 62
8．吉野ケ里遺跡 …… 64
9．志波屋二ノ坪遺跡 …… 66
10．的小渕遺跡12区 …… 68
11．柴尾遺跡 …… 70
12．川崎遺跡 …… 72
13．泉三本栗遺跡 …… 74
14．太田本村遺跡Ⅰ区 …… 76
15．畑田遺跡 …… 78
16．池上二本松遺跡 …… 80
17．みやこ遺跡 …… 82
18．茂手遺跡 …… 84
19．小野原遺跡 …… 85
20．北田遺跡 …… 87
21．古館遺跡射手塚 …… 88
22．吉村遺跡 …… 90
23．隆城跡 …… 108
24．辻遺跡 …… 110
25．馬立場遺跡 …… 112
26．稗田遺跡 …… 114
27．荒崎遺跡 …… 116
28．吉野ケ里丘陵遺跡 …… 118
29．杉籠遺跡 …… 120
30．太田本村遺跡Ⅱ区 …… 122

Ⅵ．総　括 …… 124

挿図目次

図１　昭和61年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図 …… 折り込み
図２　佐賀東部地区周辺地形図 …… 5
図３　北茂安町北茂安中部地区試掘坑設定図 …… 7
図４　千代田町千代田工区試掘坑設定図(1) …… 9
図５　千代田町千代田工区試掘坑設定図(2) …… 9
図６　神埼町神埼工区右原・石井ケ里地区試掘坑設定図 …… 折り込み
図７　佐賀西部地区周辺地形図 …… 11
図８　諸富町諸富第３工区試掘坑設定図(1) …… 13
図９　諸富町諸富第３工区試掘坑設定図(2) …… 13
図10　諸富町諸富第６工区試掘坑設定図 …… 14
図11　大和町川上南部第１地区試掘坑設定図 …… 16
図12　大和町川上南部第２地区試掘坑設定図 …… 16
図13　多久市多久東部地区試掘坑設定図(1) …… 17
図14　多久市多久東部地区試掘坑設定図(2) …… 17
図15　佐賀南部地区周辺地形図 …… 18
図16　武雄市橘地区試掘坑設定図(1) …… 19
図17　武雄市橘地区試掘坑設定図(2) …… 20
図18　鹿島市中村地区試掘坑設定図 …… 22
図19　佐賀北部地区周辺地形図 …… 23
図20　伊万里市大里地区試掘坑設定図 …… 24
図21　佐賀上場地区周辺地形図 …… 26
図22　白石西第一地区位置図 …… 30
図23　白石西第一地区試掘坑設定図 …… 31
図24　白石西第一地区遺構配置図 …… 32
図25　白石西第一地区Ａ溝（北から） …… 32
図26　白石西第一地区Ａ溝土層断面図 …… 32
図27　白石西第一地区Ａ溝出土陶磁器実測図 …… 33
図28　白石西第一地区Ａ溝出土陶磁器 …… 34
図29　白石西第二地区位置図 …… 35
図30　白石西第二地区試掘坑設定図 …… 36
図31　白石西第二地区第１・第３試掘坑遺構配置図 …… 37

図32　白石西第二地区Ａ・Ｂ溝（北から）…… 37
図33　白石西第二地区Ａ・Ｂ溝土層断面図…… 37
図34　白石西第四地区位置図…… 38
図35　白石西第四地区試掘坑設定図…… 38
図36　白石西第四地区第１・第２試掘坑遺構配置図 …… 39
図37　白石西第四地区第３・第４試掘坑遺構配置図 …… 39
図38　白石西第四地区Ａ溝（北から） …… 40
図39　白石西第四地区第３試掘坑Ａ・Ｂ溝土層断面図 …… 40
図40　白石西第四地区Ａ溝出土陶磁器…… 40
図41　白石平野微地形図…… 42
図42　堤地区遺称及び里界復元図…… 45
図43　立花遺跡周辺地形図…… 48
図44　①立花遺跡全景（南から）　②縄文時代土坑　③縄文土器出土状況 …… 49
図45　江口四本松遺跡周辺地形図…… 50
図46　①江口四本松遺跡全景（南から）　②調査区全景　③調査区東西水路部
　④ＳＤ003溝周辺　⑤ＳＥ001井戸周辺　⑥ＳＤ002溝…… 51
図47　中津隈四本松遺跡周辺地形図…… 52
図48　①中津隈四本松遺跡調査区全景（西から）　②調査区全景（東から）
　③ＳＤ003・004溝…… 53
図49　田島一本松遺跡周辺地形図…… 54
図50　①田島一本松遺跡調査区全景（東から）　②ＳＫ001土坑…… 55
図51　船石遺跡周辺地形図…… 56
図52　①船石遺跡２～４区全景　②船石遺跡３区　③２区ＳＣ220石棺墓
　④２区ＳＨ264竪穴住居跡　⑤４区ＳＨ402・403・404竪穴住居跡…… 57
図53　石動遺跡群周辺地形図…… 58
図54　①西石動Ａ遺跡４～７区全景（南から）　②西石動Ａ遺跡４区ＳＨ301竪穴住居跡
　③西石動Ａ遺跡４区ＳＨ296竪穴住居跡　④西石動Ａ遺跡４区ＳＰ223土坑墓
　⑤西石動Ａ遺跡６区弥生時代墓地　⑥西石動Ａ遺跡６区ＳＪ336土器棺墓
　⑦西石動Ａ遺跡６区ＳＰ342土坑墓…… 60
図55　①石動裏田遺跡１区全景　②石動裏田遺跡ＳＴ001・002・003古墳
　③石動裏田遺跡ＳＴ001古墳　④石動裏田遺跡ＳＴ003古墳…… 61
図56　中園遺跡周辺地形図…… 62
図57　①中園遺跡調査区全景　②ＳＨ022竪穴住居跡　③ＳＢ049掘立柱建物跡

④ＳＢ067掘立柱建物跡　⑤ＳＡ061柵列 …… 63
図58　吉野ケ里遺跡周辺地形図 …… 64
図59　①吉野ケ里遺跡１区全景（西から）　②１区掘立柱建物跡　③１区土坑
④２区全景（西から）　⑤２区掘立柱建物跡　⑥２区道路跡　⑦２区土坑墓 …… 65
図60　志波屋二ノ坪遺跡周辺地形図 …… 66
図61　①志波屋二ノ坪遺跡全景　②１区掘立柱建物跡　③１区掘立柱建物跡
④３区掘立柱建物跡　⑤４区溝 …… 67
図62　的小渕遺跡周辺地形図 …… 68
図63　①的小渕遺跡12区全景（西から）　②ＳＰ1208土坑墓 …… 69
図64　柴尾遺跡周辺地形図 …… 70
図65　①柴尾遺跡Ⅱ区全景（北から）　②Ⅲ区全景　③Ⅱ区中央部
④Ⅱ区ＳＥ009井戸　⑤Ⅱ区ＳＫ003土坑 …… 71
図66　川崎遺跡周辺地形図 …… 72
図67　①川崎遺跡調査区全景（北から）　②調査区北側部　③ＳＥ003井戸 …… 73
図68　泉三本栗遺跡周辺地形図 …… 74
図69　①泉三本栗遺跡Ａ－Ⅰ区全景　②Ａ－Ⅱ区全景　③ＳＰ001土坑墓
④ＳＰ001土坑墓銅鏡片出土状況 …… 75
図70　太田本村遺跡周辺地形図 …… 76
図71　①太田本村遺跡Ⅰ区竹林部　②遺物出土状況　③犬の埋葬 …… 77
図72　畑田遺跡周辺地形図 …… 78
図73　①畑田遺跡調査区全景　②中央部建物跡・溝 …… 79
図74　池上二本松遺跡周辺地形図 …… 80
図75　①池上二本松遺跡ＳＥ305・306井戸　②ＳＪ18土器棺墓　③ＳＫ209土坑 …… 81
図76　みやこ遺跡周辺地形図 …… 82
図77　①みやこ遺跡11区東西水路（東から）　②11区南北水路（南から）　③Ｐ１柱穴 …… 83
図78　茂手遺跡周辺地形図 …… 84
図79　茂手遺跡12区（東から） …… 84
図80　小野原遺跡周辺地形図 …… 85
図81　小野原遺跡１区Ｐ９柱穴 …… 85
図82　①小野原遺跡１区全景（東から）　②２区全景（西から）
③３区南北水路全景（北から）　④３区東西水路全景（東から）　⑤１区Ｐ１柱穴
⑥１区Ｐ14柱穴　⑦２区ＳＪ212土器棺墓 …… 86
図83　北田遺跡周辺地形図 …… 87

図84　古館遺跡射手塚周辺地形図…… 88
図85　①北田遺跡全景　②北田遺跡ＳＸ106集石遺構
③古館遺跡射手塚全景　④古館遺跡射手塚近景 …… 89
図86　吉村遺跡周辺地形図…… 90
図87　吉村遺跡南側調査区遺構配置図…… 90
図88　①吉村遺跡全景（南から）　②調査区全景（南から）　③ＳＤ002溝 …… 91
図89　①ＳＫ001土坑　②～⑤ＳＫ001土坑遺物出土状況　⑥ＳＫ003土坑 …… 92
図90　吉村遺跡出土遺物実測図(1)…… 98
図91　吉村遺跡出土遺物(1)…… 99
図92　吉村遺跡出土遺物実測図(2)……100
図93　吉村遺跡出土遺物(2)……101
図94　吉村遺跡出土遺物実測図(3)……102
図95　吉村遺跡出土遺物(3)……103
図96　吉村遺跡出土遺物実測図(4)……104
図97　吉村遺跡出土遺物(4)……105
図98　吉村遺跡出土遺物実測図(5)……106
図99　吉村遺跡出土遺物(5)……107
図100　隆城跡周辺地形図……108
図101　①隆城跡遠景　②調査区遠景（本丸跡から）　③調査区全景（東から）
④第５・第６試掘坑（東から）　⑤第５試掘坑（南から）
⑥第７試掘坑（南から）　⑦第２試掘坑（南から）　⑧第２試掘坑溝……109
図102　辻遺跡周辺地形図……110
図103　①辻遺跡ＳＢ001・002建物跡（東から）　②ＳＢ004建物跡（西から）
③ＳＢ001建物跡出土陶磁器　④ＳＢ001建物跡北側出土陶磁器
⑤ＳＢ004建物跡出土陶磁器　⑥ＳＤ006溝出土陶磁器　⑦染付瓶　⑧染付碗……111
図104　馬立場遺跡周辺地形図……112
図105　①馬立場遺跡調査区全景（南から）　②遺物出土状況　③双鳥唐草文鏡……113
図106　稗田遺跡周辺地形図……114
図107　稗田遺跡出土遺物実測図……115
図108　荒崎遺跡周辺地形図……116
図109　①荒崎遺跡Ａ地点（南から）　②荒崎遺跡Ｂ地点（東から）
③Ａ地点ＳＸ001集石　④ＳＸ001集石実測図 ……117
図110　吉野ケ里丘陵遺跡周辺地形図……118

図111　①吉野ケ里丘陵遺跡調査区全景（西から）　②土器棺墓群周辺
③ＳＤ040溝遺物出土状況 ……119
図112　杉籠遺跡周辺地形図 ……120
図113　①杉籠遺跡調査区全景（東から）　②調査区全景（西から）　③ＳＫ009土坑
④ＳＫ014土坑須恵器出土状況　⑤ＳＫ011土坑土師器出土状況 ……121
図114　太田本村遺跡周辺地形図 ……122
図115　①太田本村遺跡Ⅱ区全景　②ＳＥ011井戸　③ＳＥ012井戸遺物出土状況 ……123

表　目　次

表１　農業基盤整備事業施行予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和61年度） …… 折り込み
表２　昭和61年度発掘調査遺跡一覧表 …… 折り込み

Ⅰ．調査に至る経過

1．昭和62年度農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査

(1) 農業基盤整備事業に係る協議

県農林部と県文化課が昭和53年４月に締結し、昭和59年４月に一部改正した「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」に基づいて、昭和61年９月に農業基盤整備事業施行計画について事業担当部局から文化財保護担当部局へ協議を求められた。

昭和62年度の対象地区は、佐賀東部地区（鳥栖市・基山町・北茂安町・三根町・上峰村・神埼町・千代田町・東脊振村・脊振村・三瀬村）393.3 ha、佐賀西部地区（佐賀市・諸富町・川副町・大和町・富士町・多久市・小城町）423 ha、佐賀南部地区（武雄市・北方町・白石町・福富町・有明町・鹿島市・塩田町・嬉野町）490.4 ha、佐賀北部地区（伊万里市・西有田町・浜玉町・七山村・厳木町・相知町・北波多村）89.1 ha、佐賀上場地区（唐津市・肥前町・玄海町・鎮西町・呼子町）360.5 ha の合計1,756.3 ha である。施行主体は、九州農政局上場農業水利事業所所管の国営、佐賀県農林部所管の県営、市町村所管の団体営事業に区分される。また、水資源開発公団所管の筑後川下流用水事業に伴う協議（三田川町・諸富町）もなされた。

(2) 文化財確認調査

協議された設計図について現地踏査の結果をもとに検討を行い、遺跡の存在が予測され確認調査が必要と認められた地区（表１）について、当該市町村の教育委員会、土地改良担当課、県農林部との第１回目の合同四者協議会を県教育委員会が主催して10月14日に開催した。

その合意に従って文化財確認調査を稲刈りが終了する10月下旬から麦の作付けが始まる12月上旬までの間に行った。確認調査は原則として、２×２ｍの試掘坑を20ｍ間隔で碁盤目状に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、広がりなどを調査した。

(3) 開発と文化財保護に係る協議

確認調査の結果を検討して詳細な遺跡分布図を作成した。確認された遺跡は、佐賀東部地区277,500㎡、佐賀西部地区277,000㎡、佐賀南部地区38,500㎡、佐賀北部地区2,500㎡、佐賀上場地区50,200㎡、の計645,700㎡である。この結果を基に、関係各市町村教育委員会が主体となって個別協議が行われ、12月19日に第２回目の合同四者協議会を開催し、昭和62年度の事業計画と埋蔵文化財保護との最終的な調整がなされた。これによって、対象遺跡面積を482,500㎡に絞り、この内406,600㎡については盛土法などの設計変更によって遺跡を保存し、残る75,900㎡については発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。

昭和61年度に関係各市町村教育委員会が実施した発掘調査（表２）は、昭和60年度に同様な方法で確認調査を実施し、農業基盤整備事業担当部局との協議を経た結果、記録保存で対応することになったものである。

2．埋没条里（地割り）確認調査

昭和61年度も、佐賀県教育委員会が主体となって条里的地割りなどの古地割り調査のための対応が進められ、その一環として埋没条里確認調査を実施した。調査は、条里的地割りが比較的良好な状態で残っている杵島郡白石町の当該年度工事区について行った。

また、昭和59年度に行った市町村が保管する「旧地籍図」の管理・保存状況調査の追加調査として、調査員が各市町村に赴いてその実情を確認した。更にこれらの明治期作成の「旧地籍図」のうち、旧神埼郡内のものについて縮図作成を委託し、その保存を図った。

Ⅱ．調査組織

1．調査主体

佐賀県教育委員会

2．総括

局長　北村　一義　県文化課長

次長　宮原　義幸　県文化課長補佐　　尾形　善郎　県文化課長補佐

3．庶務

菊池　文夫　県文化課庶務係長　　西岡　真一　県文化課庶務係

山下　行夫　県文化課庶務係　　鶴田　明美　県文化課庶務係

4．調査

調査主任　木下　巧　県文化課調査第２係長

調査員

田平　徳栄　県文化課調査第２係	西村　隆司　多久市教育委員会
東中川　忠美　県文化課調査第２係	盛　峰雄　伊万里市教育委員会
徳富　則久　県文化課調査第２係	原田　保則　武雄市教育委員会
徳永　貞紹　県文化課調査第２係	種浦　修　諸富町教育委員会
種浦　加代子　県文化課調査第２係	川崎　吉剛　大和町教育委員会
七田　忠昭　県文化課調査第２係	八尋　実　神埼町教育委員会
森田　孝志　県文化課調査第２係	緒方　祐次郎　神埼町教育委員会
天本　洋一　県文化課調査第１係	堤　安信　千代田町教育委員会
立石　泰久　県文化課調査第１係	久保　伸洋　東脊振村教育委員会
福田　義彦　佐賀市教育委員会	山田　正　基山町教育委員会
中島　直幸　唐津市教育委員会	鶴田　浩二　上峰村教育委員会
田島　龍太　唐津市教育委員会	
石橋　新次　鳥栖市教育委員会	

5．調査協力

佐賀市教育委員会	富士町教育委員会	北波多村教育委員会
唐津市教育委員会	神埼町教育委員会	玄海町教育委員会
鳥栖市教育委員会	千代田町教育委員会	鎮西町教育委員会
多久市教育委員会	東脊振村教育委員会	呼子町教育委員会
伊万里市教育委員会	脊振村教育委員会	西有田町教育委員会
武雄市教育委員会	基山町教育委員会	白石町教育委員会
鹿島市教育委員会	北茂安町教育委員会	有明町教育委員会
諸富町教育委員会	三根町教育委員会	塩田町教育委員会
川副町教育委員会	上峰村教育委員会	
大和町教育委員会	相知町教育委員会	

九州農政局上場農業水利事業所
佐賀県農林部
鳥栖農林事務所
佐賀中部農林事務所
武雄農林事務所
鹿島農林事務所
伊万里農林事務所
唐津農林事務所
各市町村土地改良担当課
地元各位

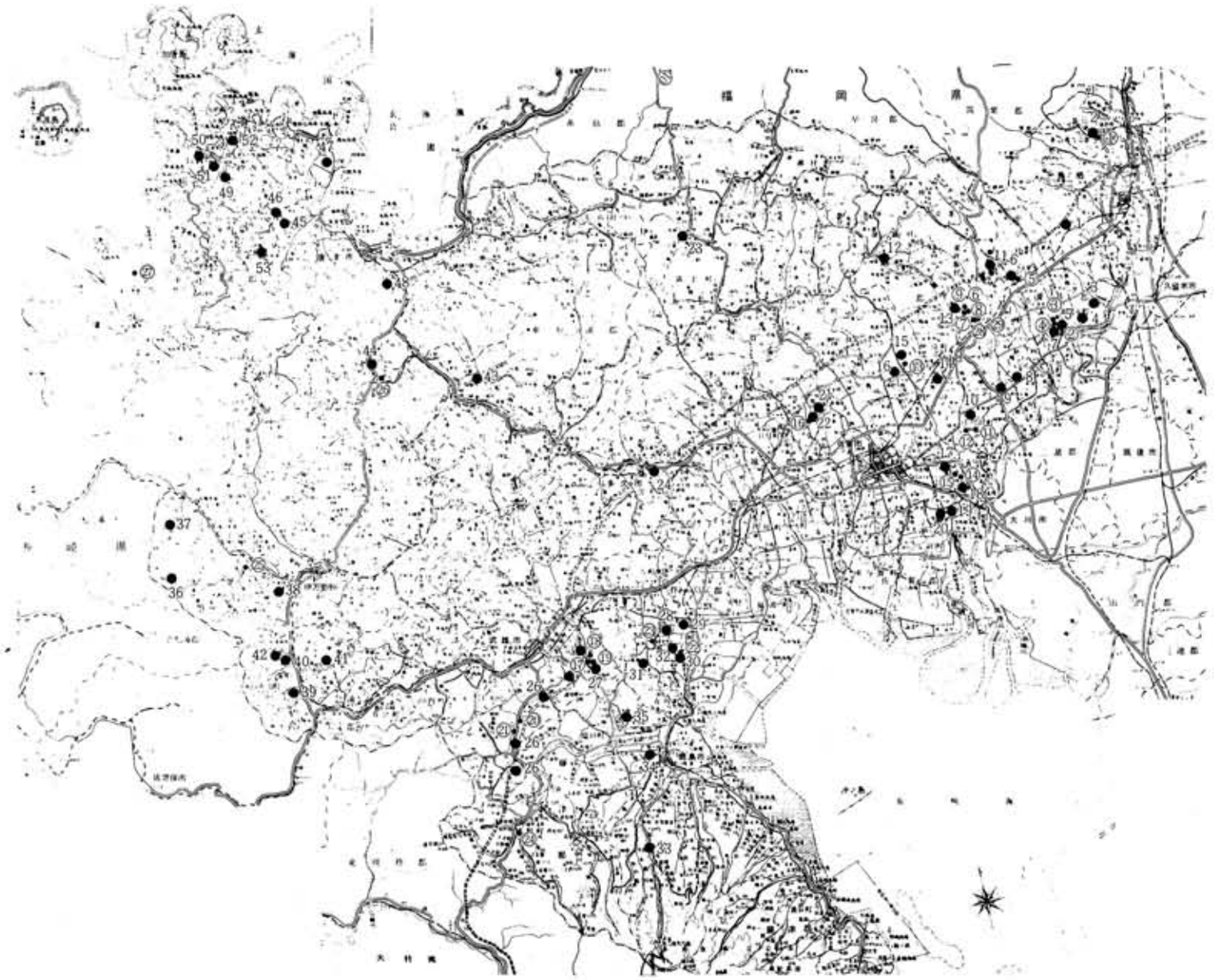


図１　昭和61年度農業基盤整備事業に伴う文化財調査地区位置図

	確認調査地区	発掘調査遺跡
佐賀東部地区	1．鳥栖市(鳥栖西部)	① 立花遺跡
	2．基山町(園部)	② 江口四本松遺跡
	3．北茂安町(北茂安東部)	③ 中津原四本松遺跡
	4．〃(北茂安中部)	④ 田島一本松遺跡
	5．〃(北茂安西部)	⑤ 船石遺跡
	6．上峰村(上峰北部)	⑥ 石動遺跡群
	7．三根町(三根東)	⑦ 中園遺跡
	8．〃(三根西一扇)	⑧ 吉野ヶ里遺跡
	9．千代田町(下板)	⑨ 志波屋二ノ坪遺跡
	10．〃(直鳥)	⑩ 的小溝遺跡
	11．東脊振村(東脊振)	⑪ 柴尾遺跡
	12．脊振村(脊振中部)	⑫ 川崎遺跡
	13．神埼町(石原・石井ヶ里)	⑬ 泉三本栗遺跡
	14．〃(六丁)	⑭ 太田本村遺跡
佐賀西部地区	15．佐賀市(久保泉東部)	⑮ 畑田遺跡
	16．〃(久保泉西部)	⑯ 池上二本松遺跡
	17．〃(北川副)	⑰ みやこ遺跡
	18．諸富町(諸富第３)	⑱ 茂手遺跡
	19．〃(諸富第６)	⑲ 小野原遺跡
	20．川副町(川副中部)	⑳ 北田遺跡
	21．大和町(川上南部第１)	㉑ 古館遺跡射手塚
	22．〃(川上南部第２)	㉒ 吉村遺跡
	23．富士町(大串)	㉓ 隆城跡
	24．多久市(多久東部)	㉔ 辻遺跡
佐賀南部地区	25．武雄市(武雄南部)	㉕ 馬立場遺跡
	26．〃(川登)	㉖ 柳田遺跡
	27．〃(橘)	㉗ 荒崎遺跡
	28．白石町(白石西第一)	㉘ 吉野ヶ里丘陵遺跡
	29．〃(白石西第二)	㉙ 杉隈遺跡
	30．〃(白石西第三)	
	31．〃(白石西第四)	
	32．有明町(有明第三)	
	33．鹿島市(鹿島西部)	
	34．〃(中村)	
	35．塩田町(黒木)	
佐賀北部地区	36．伊万里市(上古場)	
	37．〃(山代西部)	
	38．〃(大里)	
	39．西有田町(曲川)	
	40．〃(大山)	
	41．〃(黒岩)	
	42．〃(切抜農道)	
	43．相知町(伊岐佐)	
	44．北波多村(大杉)	
佐賀上場地区	45．唐津市(山道)	
	46．〃(枝去木村前)	
	47．〃(朝月幹線水路)	
	48．〃(和多田団地)	
	49．鎮西町(野元)	
	50．〃(風呂尾呂)	
	51．〃(赤玉七)	
	52．呼子町(殿ノ浦)	
	53．玄海町(藤平)	

表１　農業基盤整備事業施行予定地区内文化財確認調査一覧表（昭和61年度）

地区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査面積	調査結果	担当	備考
佐賀東部	鳥栖市	鳥栖西部	鳥栖市平田町	9 ha	遺跡は確認されなかった	石橋	
	基山町	園部	基山町大字園部字立花	5	遺跡は確認されなかった	山田	
	北茂安町	北茂安東部	北茂安町大字白壁	45	遺跡は確認されなかった	田平・七田	
		北茂安中部	北茂安町大字江口	17	弥生時代・中世集落跡	田平・七田	江口二本松遺跡
		北茂安西部	北茂安町大字江口	15	遺跡は確認されなかった	田平・七田	
	上峰村	上峰北部	上峰村大字堤	6	遺跡は確認されなかった	田平	
	三根町	三根東	三根町大字西島	30	遺跡は確認されなかった	田平	
		三根西一期	三根町大字寄人	18	遺跡は確認されなかった	田平	
	千代田町	千代田工区(下板)	千代田町大字下板	15	弥生時代～中世集落跡	堤	藤木西分遺跡
		千代田工区(直鳥)	千代田町大字直鳥	43	中世遺物包含層・館跡	堤	直鳥四本松遺跡ほか
	東脊振村	東脊振工区(下石動)	東脊振村大字石動	0.6	弥生時代～中世集落跡	久保	下石動遺跡
	脊振村	脊振中部	脊振村大字広滝字原	6	遺跡は確認されなかった	七田	
	神埼町	神埼工区(右原・石井ヶ里)	神埼町大字志波屋・鶴	60	古墳時代～中世集落跡・古代官道跡	八尋	鶴前田遺跡ほか
		神埼工区(六丁)	神埼町大字姉川・横武	20	遺跡は確認されなかった	八尋	
佐賀西部	佐賀市	久保泉東部	佐賀市久保泉町大字上和泉	16	弥生時代～中世集落跡	福田	上和泉遺跡
		久保泉西部	佐賀市久保泉町大字下和泉	9.2	遺跡は確認されなかった	福田	
		北川副	佐賀市北川副町	32	遺跡は確認されなかった	福田	
	諸富町	諸富第３工区	諸富町大字大堂・為重	45	古墳時代～中世集落跡	種浦修	太田本村遺跡ほか
		諸富第６工区	諸富町大字為重	80	弥生時代～近世集落跡	種浦修	三重本村遺跡ほか
	川副町	川副中部	川副町大字福富	37	遺跡は確認されなかった	東中川	
	大和町	川上南部第１	大和町大字池上	70.3	弥生時代集落跡・墓地	川崎	於保三本松遺跡
		川上南部第２	大和町大字池上	59.5	奈良～平安時代集落跡	川崎	本村籠遺跡
	富士町	大串	富士町大字大串字二本松	3	遺跡は確認されなかった	森田	
	多久市	多久東部	多久市北多久町大字多久原・南多久町大字下多久	20	縄文～古墳時代集落跡	西村	上田町遺跡ほか
佐賀南部	武雄市	武雄南部	武雄市橘町大字大日	21	遺跡は確認されなかった	原田	
		川登	武雄市東川登町大字袴野・西川登町大字小田志	66	近世窯業関連遺跡	原田	
		橘	武雄市橘町大字大日・永島	19	弥生時代～中世集落跡	原田	みやこ遺跡ほか
	白石町	白石西第一	白石町大字馬洗	12	遺跡は確認されなかった	東中川	
		白石西第二	白石町大字今泉	12	遺跡は確認されなかった	東中川	
		白石西第三	白石町大字廿治	16	遺跡は確認されなかった	東中川	
		白石西第四	白石町大字湯崎	15	遺跡は確認されなかった	東中川	
	有明町	有明第三	有明町大字辺田	32.4	遺跡は確認されなかった	木下	
	鹿島市	鹿島西部	鹿島市大字古枝	10	遺跡は確認されなかった	田平	
		中村	鹿島市大字中村	8	中世生活跡	徳富	国広遺跡
佐賀北部	塩田町	黒木	塩田町大字久間	7	遺跡は確認されなかった	立石	
	伊万里市	上古場	伊万里市東山代町大字川内野	2.7	遺跡は確認されなかった	盛	
		山代西部	伊万里市山代町大字西分	2.6	遺跡は確認されなかった	盛	
		大里	伊万里市二里町大字大里	8.1	弥生時代墓地・中世集落跡	盛	西尾遺跡
	西有田町	曲川	西有田町大字曲川	12	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
		大山	西有田町大字大木	15	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
		黒岩	西有田町大字大木	4	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
		切楠農道	西有田町大字大木・曲川	0.8	遺跡は確認されなかった	徳富・徳永	
	相知町	伊岐佐	相知町大字伊岐佐	11	弥生時代墓地	木下	盛土保存
	北波多村	大杉	北波多村大字大杉	11.5	遺跡は確認されなかった	田平	
佐賀上場	唐津市	山道	唐津市枝去木	10	縄文時代生活跡	中島	草覆作遺跡
		枝去木村前	唐津市枝去木	29.2	遺跡は確認されなかった	中島	
		朝月幹線水路	唐津市相賀・湊	2	旧石器～縄文時代遺物包含層	中島	十蓮II遺跡
		和多田団地	唐津市和多田字本村	0.1	古墳・中近世墓地	中島	
	鎮西町	野元	鎮西町大字野元	13	遺跡は確認されなかった	徳永	
		風呂尾呂	鎮西町大字名護屋	19	遺跡は確認されなかった	徳永	
		赤玉毛	鎮西町大字名護屋	19	遺跡は確認されなかった	徳永	
	呼子町	殿ノ浦	呼子町大字殿ノ浦	37	弥生時代集落跡・古墳群・近世陣跡	田平・徳永	松尾田古墳群ほか
	玄海町	藤平	玄海町大字有浦上	16	遺跡は確認されなかった	徳永	
筑下用後川流水	三田川町	田手	三田川町大字田手	0.1	遺跡は確認されなかった	東中川	
	諸富町	小杭	諸富町大字大堂	1.9	弥生時代～中世集落跡	東中川	小杭村中遺跡

表２　昭和61年度発掘調査遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	略号	遺跡の所在地	調査面積	調査主体者	調査担当者	遺跡の内容
基山町	立花遺跡	STB	三養基郡基山町大字園部字立花	1,000㎡	基山町教委	山田	縄文・古墳～平安時代集落跡
北茂安町	江口四本松遺跡	EGC	三養基郡北茂安町大字江口字四本松	700㎡	北茂安町教委	田平	弥生時代～中世集落跡
	中津隈四本松遺跡	NTY	三養基郡北茂安町大字中津隈字四本松	300㎡			弥生時代～中世生活跡
三根町	田島一本松遺跡	TIM	三養基郡三根町大字西島字一本松	400㎡	三根町教委	田平	弥生～古墳時代生活跡
上峰村	船石遺跡	FNI	三養基郡上峰村大字堤字一本谷	6,500㎡	上峰村教委	鶴田	弥生～古墳時代集落跡・墓地
東脊振村	西石動A遺跡	NIN(A)	神埼郡東脊振村大字石動字西二本杉	8,000㎡	東脊振村教委	久保	弥生時代～中世集落跡・墓地
	西石動C遺跡	NIN(C)	神埼郡東脊振村大字石動字西二本杉				古墳時代～中世遺物包含層
	下石動遺跡	SIN	神埼郡東脊振村大字石動字三本松				奈良時代～現代溝跡
	石動裏田遺跡	IUT	神埼郡東脊振村大字石動字四本杉				古墳時代後期古墳群
神埼町	中園遺跡	NZO	神埼郡神埼町大字志波屋	2,700㎡	神埼町教委	八尋・緒方	古墳時代集落跡・奈良時代官衙
	吉野ケ里遺跡	YNG	神埼郡神埼町大字鶴	5,000㎡			奈良時代官衙・中世墓
	志波屋二ノ坪遺跡	SNT	神埼郡神埼町大字志波屋	7,000㎡			古墳時代集落跡・奈良時代官衙
	的小渕遺跡	IWO	神埼郡神埼町大字的	1,500㎡			中世集落跡・墓地
千代田町	柴尾遺跡	SBO	神埼郡千代田町大字用作字五本松ほか	2,300㎡	千代田町教委	堤	弥生時代～中世集落跡
	川崎遺跡	KWS	神埼郡千代田町大字余江字川一本松	1,400㎡			弥生時代～中世集落跡
佐賀市	泉三本栗遺跡	IZS	佐賀市久保泉町大字下和泉字三本栗	3,600㎡	佐賀市教委	福田	弥生～古墳時代・中世集落跡・墓地
諸富町	太田本村遺跡	OHM	佐賀郡諸富町大字大堂	800㎡	諸富町教委	種浦 修	古墳・平安・鎌倉時代集落跡・近世館跡
	畑田遺跡	HKD	佐賀郡諸富町大字大堂	2,200㎡			弥生時代後期～鎌倉時代集落跡
大和町	池上二本松遺跡	INM	佐賀郡大和町大字池上字二本松	2,200㎡	大和町教委	川崎	弥生～古墳時代集落跡・墓地
武雄市	みやこ遺跡	MYK	武雄市橘町大字大日字郷ノ木	900㎡	武雄市教委	原田	弥生時代～中世集落跡
	茂手遺跡	MOD	武雄市橘町大字片白字茂手	500㎡			弥生時代～近世集落跡
	小野原遺跡	ONB	武雄市橘町大字大日字小野原	1,400㎡			弥生時代・中世集落跡・墓地
	北田遺跡	KTD	武雄市東川登町大字袴野字北田	700㎡			中世集落跡
	古館遺跡射手塚	FIT	武雄市東川登町大字袴野字大園	100㎡			中世墓
白石町	吉村遺跡	YSM	杵島郡白石町大字廿治字吉村	700㎡	白石町教委	東中川	近世生活跡
	隆城跡	TAK	杵島郡白石町大字堤字堤	4,000㎡			中近世城郭跡
嬉野町	辻遺跡	TJI	藤津郡嬉野町大字岩屋川内字辻	700㎡	嬉野町教委	田平	縄文時代遺物散布地・近世屋敷跡
伊万里市	馬立場遺跡	MAT	伊万里市東山代町大字里字馬立場	700㎡	伊万里市教委	盛	弥生時代終末～中世遺物包含層
北波多村	稗田遺跡	HED	東松浦郡北波多村大字稗田字稗田	400㎡	北波多村教委	徳永	弥生時代・中世遺物包含層
肥前町	荒崎遺跡	ARS	東松浦郡肥前町大字納所字荒崎ほか	1,700㎡	肥前町教委	徳永	縄文時代生活跡
三田川町	吉野ケ里丘陵遺跡	YGK	神埼郡三田川町大字田手字三本杉	800㎡	佐賀県教委	東中川	弥生～奈良時代集落跡・墓地
	杉籠遺跡	SGR	神埼郡三田川町大字田手字杉籠	720㎡			弥生時代～中世集落跡
諸富町	太田本村遺跡	OHM	佐賀郡諸富町大字大堂	1,720㎡			弥生～古墳時代集落跡

Ⅲ．昭和61年度文化財確認調査の内容

1．佐賀東部地区の調査

図２　佐賀東部地区周辺地形図　（１：100,000）

1．鳥 栖 市(鳥栖西部地区)
2．基 山 町(園部地区)
3．北茂安町(北茂安東部地区)
4．北茂安町(北茂安中部地区)
5．北茂安町(北茂安西部地区)
6．上 峰 村(上峰北部地区)
7．三 根 町(三根東地区)
8．三 根 町(三根西第一期地区)
9．千代田町(下板地区)
10．千代田町(直鳥地区)
11．東脊振村(東脊振工区)
12．脊 振 村(脊振中部地区)
13．神 埼 町(右原・石井ヶ里地区)
14．神 埼 町(六丁地区)
① 立花遺跡
② 江口四本松遺跡
③ 中津隈四本松遺跡
④ 田島一本松遺跡
⑤ 船石遺跡
⑥ 西石動Ａ遺跡
⑦ 西石動Ｃ遺跡
⑧ 下石動遺跡
⑨ 石動裏田遺跡
⑩ 中園遺跡
⑪ 吉野ヶ里遺跡
⑫ 志波屋二ノ坪遺跡
⑬ 的小渕遺跡
⑭ 柴尾遺跡
⑮ 川崎遺跡
⑯ 吉野ヶ里丘陵遺跡
⑰ 杉籠遺跡

(1) 鳥栖市（鳥栖西部地区）

鳥栖西部地区は鳥栖市平田町に所在する。城山から雲野尾峠へと南下する山麓下、標高約35～50ｍの緩傾斜をなす扇状地である。周辺の遺物散布地として地区の南に一本杉遺跡（弥生～古墳時代）、東側の山麓に平田原遺跡（縄文～古墳時代）、西側の丘陵上に立石遺跡（縄文～古墳時代）がある。

調査は対象地９haに22箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、１箇所で流れ込みと思われる古墳時代の須恵器・土師器片少量が出土した他は、遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 基山町（園部地区）

園部地区は基山町大字園部字立花に所在する。権現山から杓子ケ峰へ延びる丘陵と契山から東へ延びる丘陵に挟まれた標高50～54ｍの扇状地である。地区南側の丘陵に鎌浦・馬場・亀の甲、の各古墳群が、北側の丘陵に黒谷・水呑古墳群（山田正『黒谷・水呑古墳群』基山町文化財調査報告書第８集　1986）がある。また、昭和61年度事業地区に係る立花遺跡では、縄文時代晩期前半と平安時代の遺構・遺物が検出されている（本書Ｐ.48）。

調査は対象地５haのうち削平予定部に24箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 北茂安町（北茂安東部地区、北茂安中部地区、北茂安西部地区　図３）

北茂安東部地区は北茂安町大字白壁に所在する。古川と道瀬川に挟まれた標高４ｍ前後の水田部である。周辺には中世の遺物散布地である白壁五本松遺跡・座主野遺跡が存在する。

調査は対象地45haのうち水路予定部に33箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

北茂安中部地区は北茂安町大字江口に所在する。道瀬川と筑後川に挟まれた標高３～４ｍの水田部である。周辺には中世の遺物散布地である江口遺跡・瀬戸遺跡が存在する。

調査は対象地17haのうち水路予定部に22箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、２つの地点で遺構・遺物が検出された。水路予定部内に各々1,500㎡と300㎡の弥生時代・中世の集落跡（江口二本松遺跡）の存在が想定される。

北茂安西部地区は北茂安町大字江口に所在する。寒水川右岸の標高３～４ｍの水田部である。地区の南に接して江口四本松遺跡があり、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出されている（本書Ｐ.50）。

調査は対象地15haのうち水路予定部に26箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(4) 上峰村（上峰北部地区）

上峰北部地区は上峰村大字堤に所在する。切通川右岸の低位段丘上にあたり、標高約20ｍの水田部である。地区西側の丘陵上には二塚山遺跡群が、対岸の微丘陵上には船石遺跡・船石南

図３　北茂安町北茂安中部地区試掘坑設定図　（１：3,000）

遺跡が存在する。

調査は対象地6 haに22箇所の試掘坑を設定して行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

(5) 三根町（三根東地区、三根西一期地区）

三根東地区は三根町大字西島に所在する。寒水川右岸の標高3～4 mの水田部である。地区東側の北茂安町内では江口四本松遺跡が調査され、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出されている（本書P.50）。

調査は対象地30 haのうち水路予定部に39箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

三根西一期地区は三根町大字寄人に所在する。井柳川右岸の標高2～3 mの水田部である。地区の西に接して弥生時代集落跡である南里ケ里遺跡が存在する。

調査は対象地18 haのうち水路予定部に21箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 千代田町（佐賀東部地区千代田工区　図4・5）

千代田工区は千代田町大字下板・直鳥に所在する。下板地区は田手川左岸の標高3 mの沖積平野で、地区内には古代～中世の藤木西分遺跡・又南里遺跡がある。

調査は対象地15 haのうち水路予定部と削平予定部に41箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、藤木西分遺跡で弥生時代～中世の遺構・遺物が検出された。

直鳥地区は城原川右岸の標高3 mの沖積平野で、地区内には弥生時代の下直鳥貝塚、中世直鳥氏の居館跡である直鳥城跡が存在する。

調査は対象地43 haのうち水路予定部を中心に119箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、6箇所の試掘坑で中世の遺物包含層を検出した（直鳥四本松遺跡）他、直鳥城跡の範囲内で中世の遺構・遺物を検出した。

(7) 東脊振村（佐賀東部地区東脊振工区）

東脊振工区は東脊振村大字石動に所在する。田手川左岸の標高33～40 mの河岸段丘上である。周辺は弥生時代以降の遺跡が密集する地域であり、地区内の下石動遺跡は九州横断自動車道建設と圃場整備事業に伴う調査で弥生時代～中世の集落跡が明らかになっている。

調査は対象地12 haのうち確認調査の及んでいなかった約0.6 haに6箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、全ての試掘坑から遺構・遺物が検出され、推定されていた下石動遺跡の範囲を裏付けることができた。

(8) 脊振村（脊振中部地区）

脊振中部地区は脊振村大字広滝字原に所在する。城原川上流部左岸の段丘上、標高約300 mの水田部である。地区内は縄文時代遺物散布地の原遺跡として周知されていた。

対象地6 haに20箇所の試掘坑を設定し調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

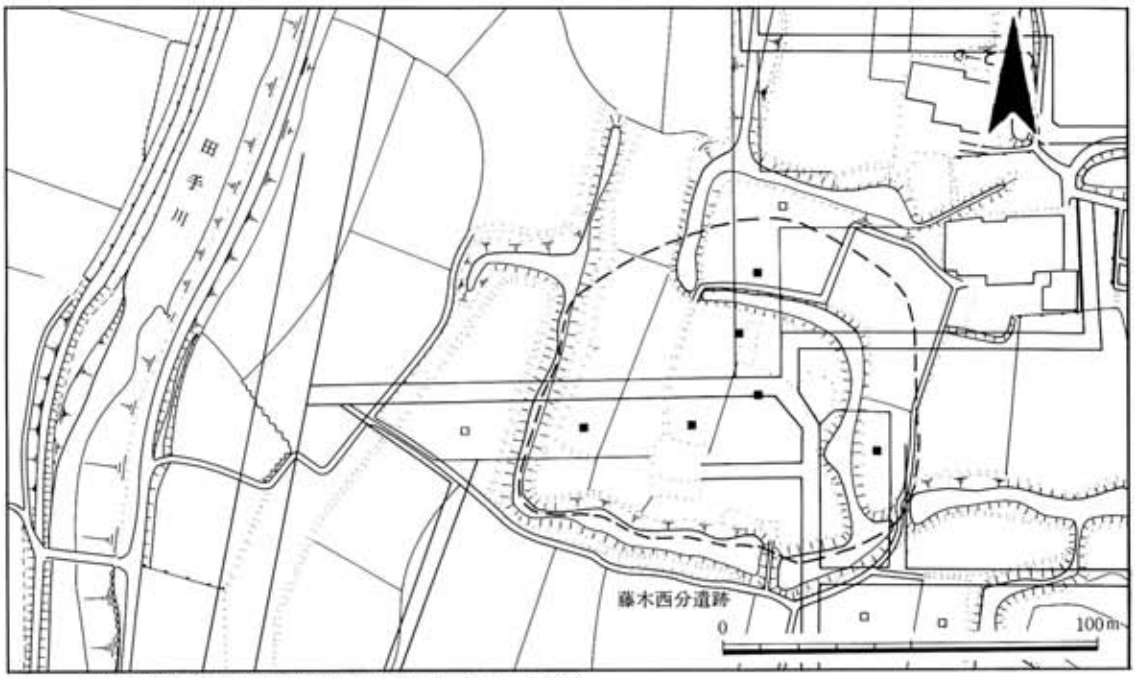


図4　千代田町千代田工区試掘坑設定図(1)　（1：2,000）

図5　千代田町千代田工区試掘坑設定図(2)　（1：4,000）

(9) 神埼町（神埼工区右原・石井ケ里地区、六丁地区　図６）

右原・石井ケ里地区は神埼町大字鶴・志波屋に所在する。大字志波屋地内は脊振南麓に延びる舌状丘陵である。周辺には伊勢塚前方後円墳を始め、縄文時代以降の遺跡が密集している。

調査は対象地７haのうち水路及び削平予定部に71箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、東側の谷部を除き竪穴住居跡・溝・小穴と遺物（土師器・須恵器）が検出された。古墳時代の集落跡・古代～中世の掘立柱建物跡群の存在が想定され、その中心は当該地区のほぼ中央にあると考えられる。

大字鶴地内は城原川左岸、標高７～15ｍの河岸段丘上である。地区内には古代～中世の遺物散布地である志波屋二ノ坪遺跡がある他、地区中央を古代官道跡と推定される古地割りが東西に走っている。

調査は対象地53haのうち水路及び削平予定部に172箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、志波屋二ノ坪遺跡で古墳～平安時代の遺構・遺物が検出され、該期の集落跡の存在が確認された。また、古代官道推定地では道路敷と考えられる面が検出された（鶴前田遺跡）。

六丁地区は神埼町大字姉川・横武に所在する。城原川と中地江川に挟まれた標高３～４ｍの低平な沖積平野である。地区の南側には姉川城跡・横武城跡・上六丁遺跡などの中～近世の館跡・環濠集落跡がある。

調査は対象地20haのうち水路予定部に55箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、数箇所の試掘坑で流れ込みと思われる磨耗した土師器片が出土した以外は、遺構・遺物は検出されなかった。

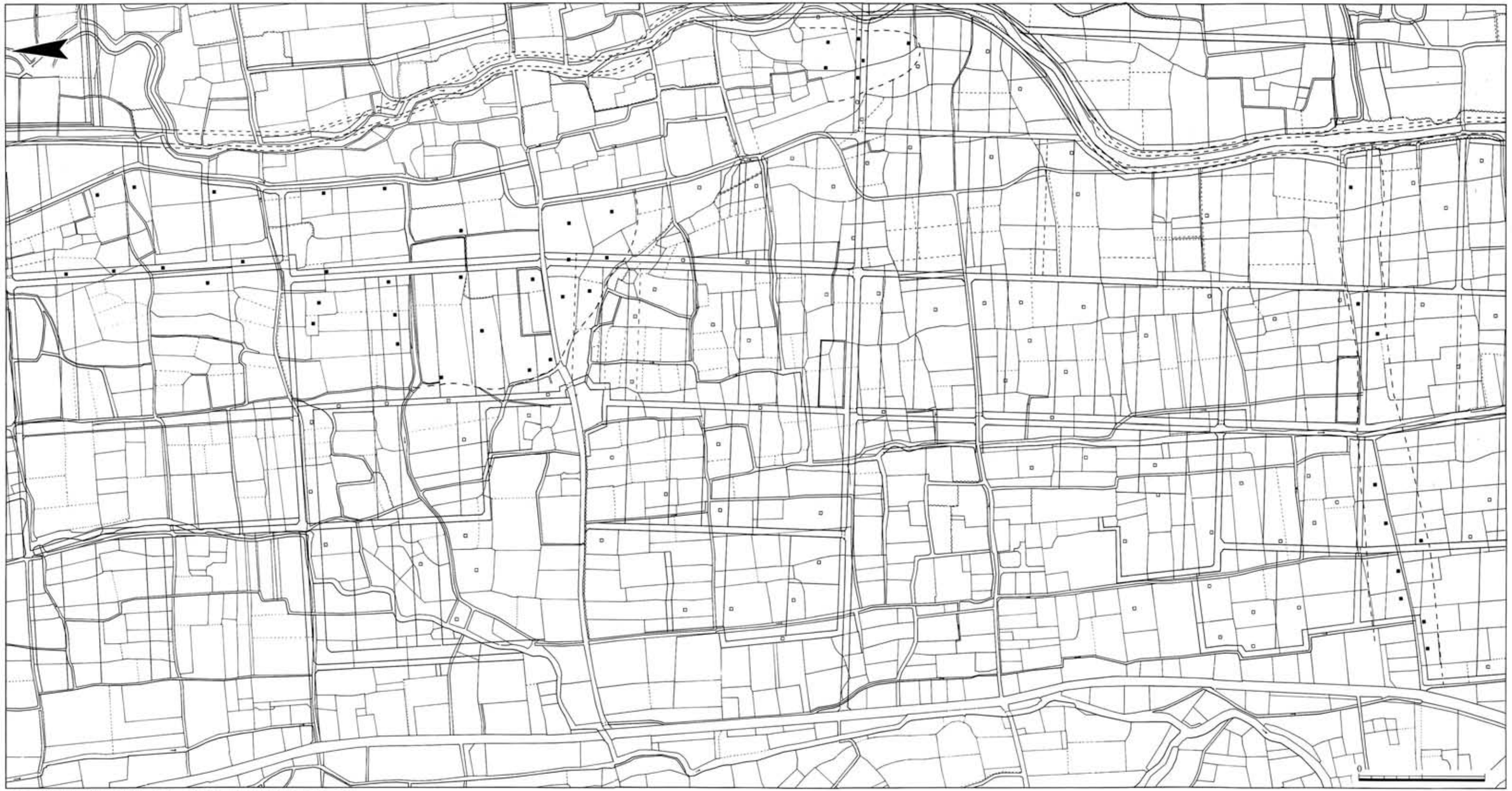


図6　神埼町神埼工区右原・石井ヶ里地区試掘坑設定図（１：3,000）

2．佐賀西部地区の調査

図７　佐賀西部地区周辺地形図　（１：100,000）

１．佐賀市（久保泉東部地区）
２．佐賀市（久保泉西部地区）
３．佐賀市（北川副地区）
４．諸富町（諸富第３工区）
５．諸富町（諸富第６工区）
６．川副町（川副北部地区）
７．大和町（川上南部第１地区）
８．大和町（川上南部第２地区）
９．富士町（大串地区）
10．多久市（多久東部地区）

①　泉三本栗遺跡
②　太田本村遺跡
③　畑田遺跡
④　池上二本松遺跡

(1) 佐賀市（久保泉東部地区、久保泉西部地区、北川副地区）

久保泉東部地区は佐賀市久保泉町大字上和泉に所在する。標高10～12ｍの南へ緩やかに傾斜する水田部である。地区の南には昭和60年度に調査が行われた泉遺跡がある。

調査は対象地16 ha に45箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、５箇所から溝・井戸・土坑と遺物包含層を検出した。弥生時代～中世の集落跡（上和泉遺跡）の存在が想定される。

久保泉西部地区は佐賀市久保泉町大字下和泉に所在する。県道小城・北茂安線に接する標高６～７ｍの水田部である。地区北方約300ｍに久保泉工場団地予定地があり、確認調査で弥生時代後期～中世の遺構・遺物が検出されている（福田義彦『久保泉工場団地内遺跡』佐賀市教育委員会　1986）。

調査は対象地9.2 ha に22箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

北川副地区は佐賀市北川副町に所在する。佐賀江川の支流である新川右岸の水田部で、地区の大半が中世以来の干拓地と考えられる。

調査は対象地32 ha に32箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 諸富町（諸富第３・第６工区　図８～10）

諸富第３工区は諸富町大字大堂・為重に所在する。筑後川右岸域の標高２ｍの沖積平野である。地区内には弥生～室町時代の太田本村遺跡・土師村中遺跡・小杭村中遺跡がある。

調査は対象地45 ha のうち水路予定部に120箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、太田本村遺跡で古墳時代・中世の遺構・遺物を、土師村中遺跡で奈良～平安時代の遺構・遺物を、小杭村中遺跡で弥生時代・中世の遺構・遺物を各々検出した。

諸富第６工区は諸富町大字為重に所在する。新川左岸の標高２ｍの沖積平野である。地区内には中～近世の遺物散布地である三重村中遺跡や川副代官所跡などがある。

調査は対象地80 ha のうち水路予定部に160箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、６地点で弥生時代～近世の遺構・遺物が検出された。

(3) 川副町（川副北部地区）

川副北部地区は川副町大字福富に所在する。佐賀平野南部の標高２ｍの低平な水田地帯である。地区東側の諸富町三重地区では最近の分布調査・確認調査で弥生時代後期～近世の遺跡が発見されている。

調査は対象地37 ha のうち水路予定部に12箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(4) 大和町（川上南部第１・第２地区　図11・12）

川上南部第１地区は大和町大字池上に所在する。嘉瀬川右岸の標高７～８ｍの低平な水田部

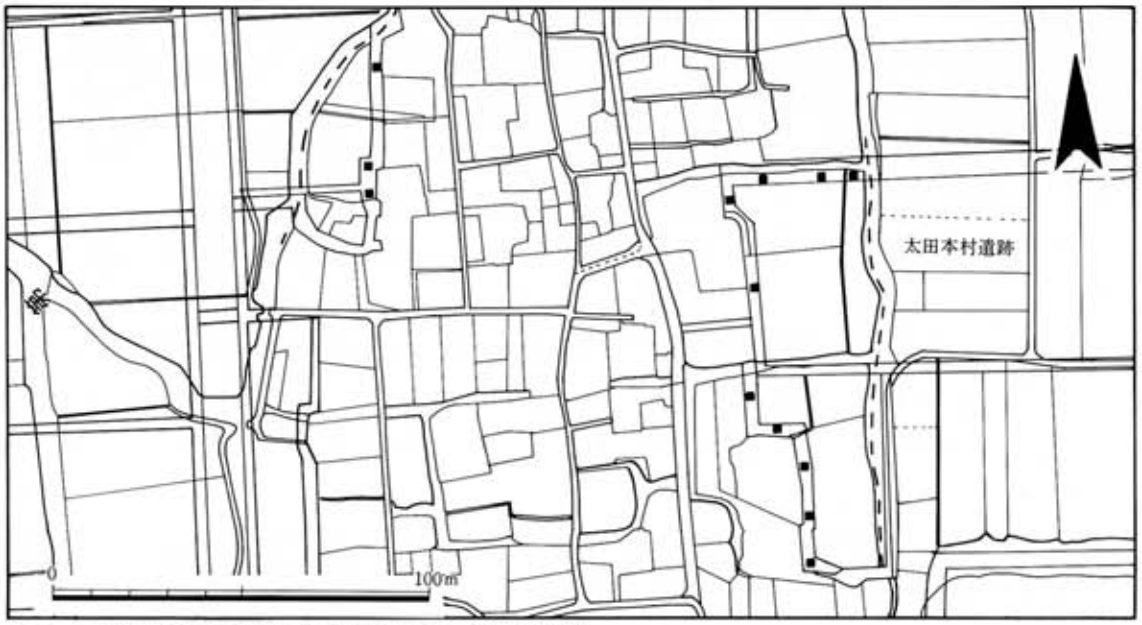


図８　諸富町諸富第３工区試掘坑設定図(1)　（１：4,000）

図９　諸富町諸富第３工区試掘坑設定図(2)　（１：4,000）

図10　諸富町諸富第６工区試掘坑設定図　（１：4,000）

であり、一段高い畑地が島状に点在する。地区内には弥生時代～中世の下戸田遺跡がある。

調査は対象地70.3 ha に160箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、14箇所の試掘坑で弥生時代の土器棺墓・土坑などの遺構と遺物を検出した。弥生時代の集落跡・墓地の存在が想定される。

川上南部第２地区は大和町大字池上に所在する。嘉瀬川と東平川に挟まれた標高５～10ｍの低平な水田部である。地区内には弥生時代～中世の池上二本松遺跡・佐保遺跡などが存在する他、風楽寺前方後円墳があり、周辺の道善寺古墳・四天王社古墳などの前方後円墳と共に池上古墳群を形成している。

調査は対象地59.5 ha に92箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、17箇所の試掘坑で井戸などの遺構と遺物を検出した。奈良～平安時代の集落跡の存在が想定される。

(5)　富士町（大串地区）

大串地区は富士町大字大串字二本松に所在する。大串川左岸の河岸段丘上で、標高325～350ｍの水田部である。

事業対象地は、縄文時代・中世の遺物散布地である大串遺跡として周知されていた。

調査は対象地3 ha に20箇所の試掘坑を設定して行ったが、表土と客土層から黒曜石片・白磁片が数点出土した以外は遺構・遺物は検出されなかった。

(6)　多久市（多久東部地区　図13・14）

多久東部地区は多久市北久町大字多久原・南多久町大字下多久に所在する。牛津川支流の今出川と西郷川に挟まれた標高15～30ｍの扇状地である。地区内には縄文～平安時代の大工田遺跡や弥生～古墳時代の上田町遺跡がある。

調査は対象地20 ha に272箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、４地点で遺構・遺物が検出された。古墳時代集落跡・縄文時代遺物包含層・中世の小穴群が確認された（上田町遺跡ほか）。

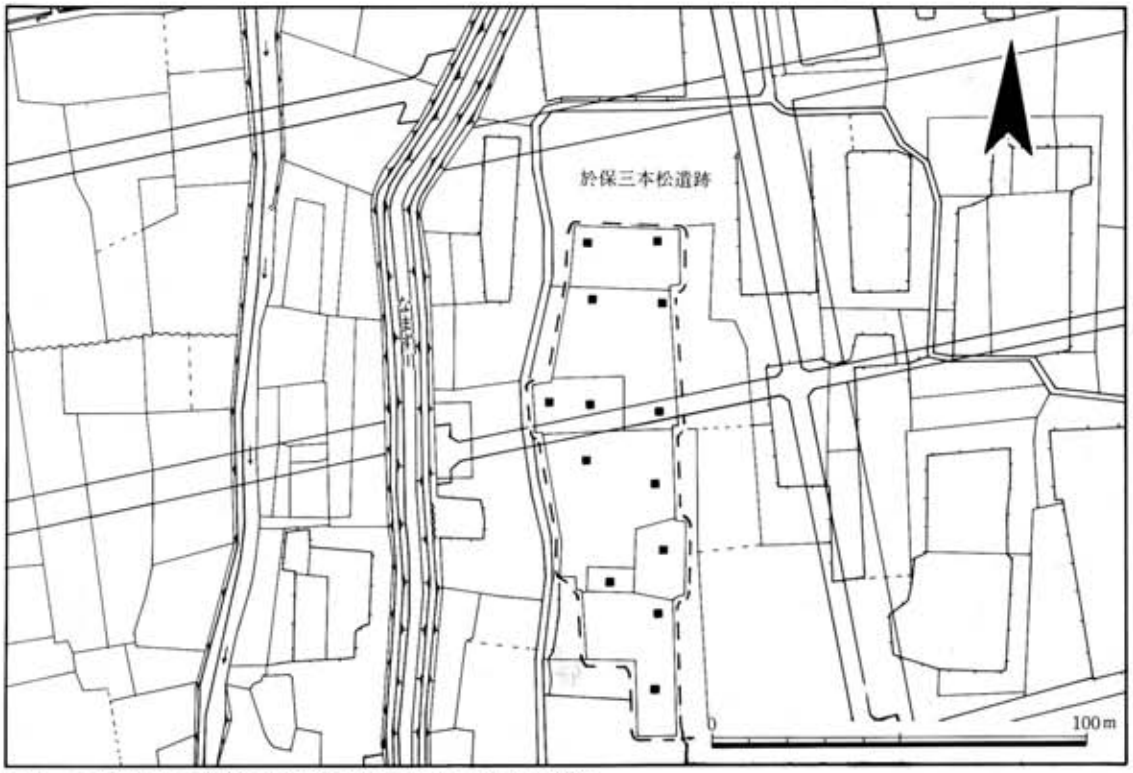


図11　大和町川上南部第１地区試掘坑設定図　（１：2,000）

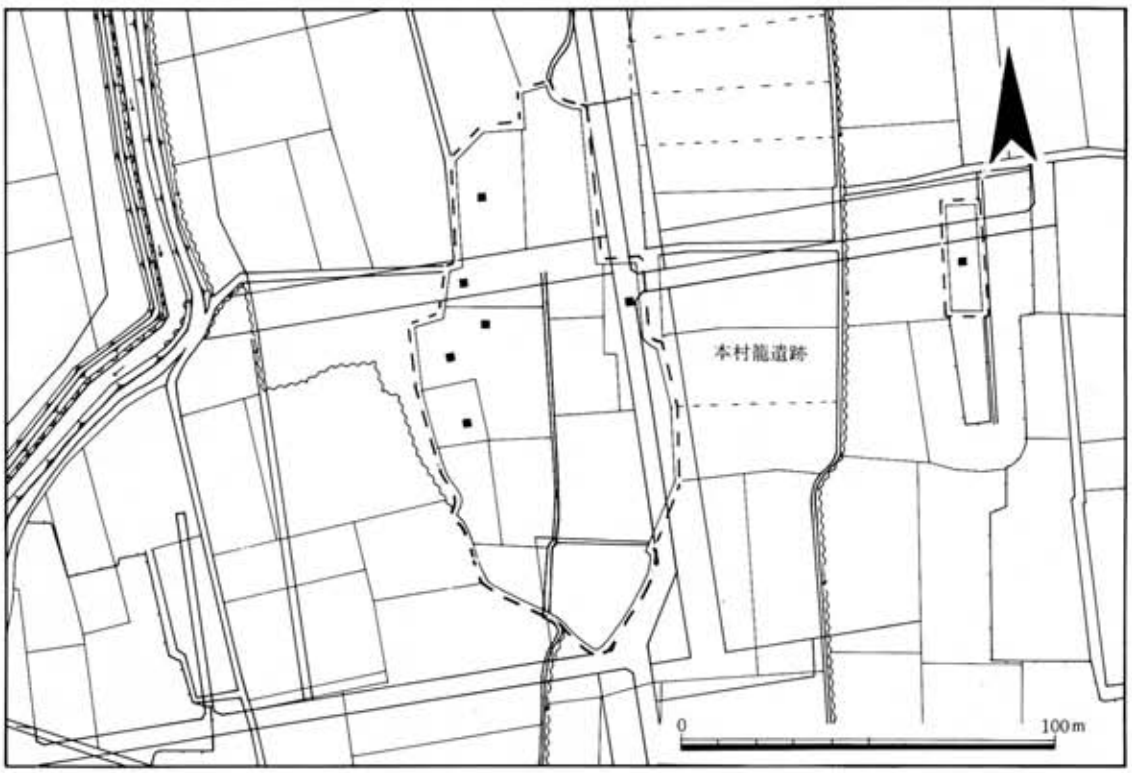


図12　大和町川上南部第２地区試掘坑設定図　（１：2,000）

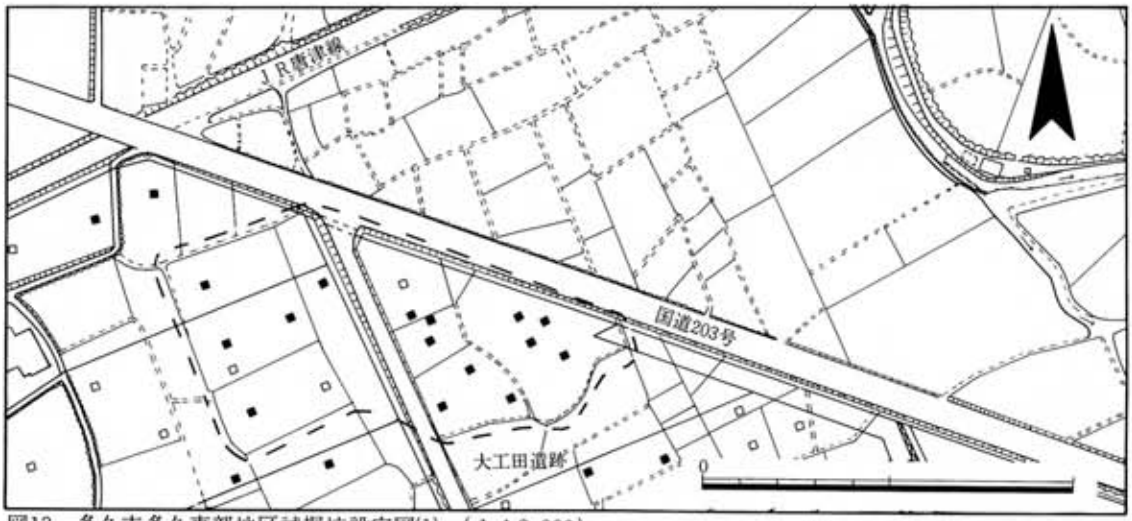


図13　多久市多久東部地区試掘坑設定図(1)　（1：2,000）

図14　多久市多久東部地区試掘坑設定図(2)　（1：2,000）

3．佐賀南部地区の調査

図15　佐賀南部地区周辺地形図　（1：100,000）

1．武雄市(武雄南部地区)
2．武雄市(袴野工区)
3．武雄市(小田志工区)
4．武雄市(橘地区)
5．白石町(白石西第一地区)
6．白石町(白石西第二地区)
7．白石町(白石西第三地区)
8．白石町(白石西第四地区)
9．有明町(有明第三地区)
10．鹿島市(鹿島西部地区)
11．鹿島市(中村地区)
12．塩田町(黒木地区)
① みやこ遺跡
② 茂手遺跡
③ 小野原遺跡
④ 北田遺跡
⑤ 古館遺跡射手塚
⑥ 吉村遺跡
⑦ 隆城跡
⑧ 辻遺跡

(1) **武雄市（武雄南部地区、川登地区、橘地区　図16・17）**

武雄南部地区は武雄市橘町大字大日に所在する。六角川左岸の標高約５ｍの水田部である。地区内には納手遺跡が、対岸にはみやこ遺跡があり、六角川改修事業に伴う調査で弥生時代～近世の集落跡・墓地が検出されている。

調査は対象地21 haのうち水路予定部に16箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

川登地区は武雄市東川登町大字袴野字二又・山揚と西川登町大字小田志字亀谷ほかに所在する。

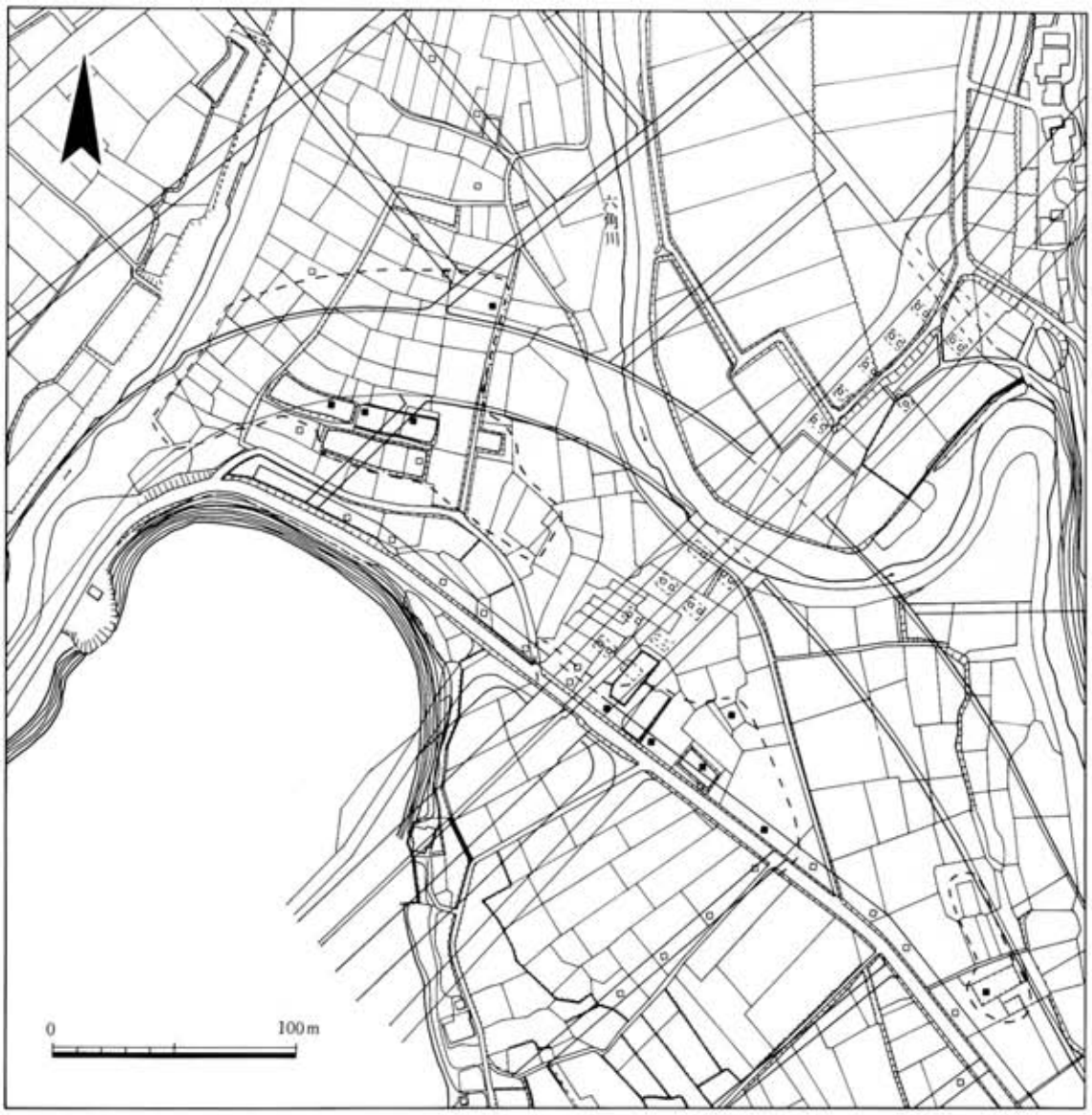


図16　武雄市橘地区試掘坑設定図(1)　（１：3,000）

図17　武雄市橘地区試掘坑設定図(2)　（１：3,000）

袴野工区は六角川によって開析された小盆地の水田部で、標高21～30ｍである。周辺の丘陵上には縄文時代の遺物散布地である山揚遺跡・黒木ノ元遺跡が存在する。

調査は対象地23 haのうち水路及び削平予定部を中心に25箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、１箇所で小穴１を検出したのみで、他に遺構・遺物は認められなかった。

小田志工区は塩田川の支流小田志川によって開析された谷で、標高27～58ｍの水田部である。周辺の山麓部には近世の陶磁器窯跡が群在しており、武雄古唐津南部系の小田志窯跡群として知られている。この内、事業予定地区に接する甕屋窯跡群は九州横断自動車道建設に伴い擂鉢・甕などの日常雑器を主とする窯跡群の調査が行われている。

調査は対象地43 haのうち山麓に接する部分を中心に92箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、甕屋Ａ窯跡群の広がりが地区内にも及ぶことが確認された。

橘地区は武雄市橘町大字大日・永島に所在する。大字大日地内は六角川右岸の標高６～８ｍの水田・畑地である。地区内には弥生時代～中世の小野原遺跡・みやこ遺跡が存在する。

調査は対象地19 haのうち水路及び削平予定部を中心に41箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、小野原遺跡・みやこ遺跡で各々遺構・遺物を検出した。

大字永島地内は六角川上流の右岸段丘上にある。地区内には弥生時代～中世の玉江遺跡・北上野遺跡があり、玉江遺跡は中広形銅矛の単独出土地として知られている。

調査は対象地19 haのうち水路及び削平予定部を中心に38箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、２地点で遺構・遺物を検出した。中世の集落跡と古墳時代～古代の集落跡の存在が各々想定される。

(2) 白石町（白石西第一・第二・第三・第四地区）

白石西第一地区は白石町大字馬洗に所在する。六角川右岸の標高２～３ｍの低平な水田部である。地区北西の馬田集落付近は古代～中世の遺物散布地、馬田遺跡である。

調査は対象地12 haのうち水路予定部に13箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

白石西第二地区は白石町大字今泉に所在する。六角川右岸の標高２ｍの水田部である。地区南側の多田遺跡は弥生～室町時代の遺物散布地として知られている。

調査は対象地12 haのうち水路予定部に12箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

白石西第三地区は白石町大字廿治に所在する。白石平野の中央部にあたる標高２ｍの水田部である。地区内には昭和61年に一部調査され、近世の遺構・遺物が検出された吉村遺跡（本書Ｐ.90）がある。

調査は対象地16 haのうち水路予定部に11箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

白石西第四地区は白石町大字湯崎に所在する。杵島山系東麓部に接する標高３ｍの水田部である。事業地区は弥生時代～中世の集落跡である川津遺跡として周知されている。

対象地15 haに23箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 有明町（有明第三地区）

有明第三地区は有明町大字辺田に所在する。白石平野西部の標高２～３ｍの水田部である。地区周辺には弥生時代～中世の久沼二本松遺跡・久沼四本松遺跡などがある。

対象地32.4 haに50箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

(4) 鹿島市（鹿島西部地区、中村地区　図18）

鹿島西部地区は鹿島市大字古枝に所在する。多良山系の火山性台地が浜川によって開析された標高約100ｍの谷部である。両側の丘陵上には縄文時代の堂園遺跡などがある。

対象地10 haに22箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

中村地区は鹿島市大字中村に所在する。鹿島川と塩田川に挟まれた標高２ｍの水田部である。地区北東に中世の横造城跡・本町遺跡が存在する。

対象地８ haに23箇所の試掘坑を設定して調査した結果、３箇所の試掘坑で溝・土坑と土師器・青磁が検出された。室町時代の小規模な生活遺跡（国広遺跡）の存在が想定される。

(5) 塩田町（黒木地区）

黒木地区は塩田町大字久間に所在する。杵島山系白岩山の西麓、標高12～31ｍのやや傾斜のある水田部である。地区周辺には縄文時代の堂徳遺跡や平安時代の冬野瓦窯跡などがある。

対象地７ haに18箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

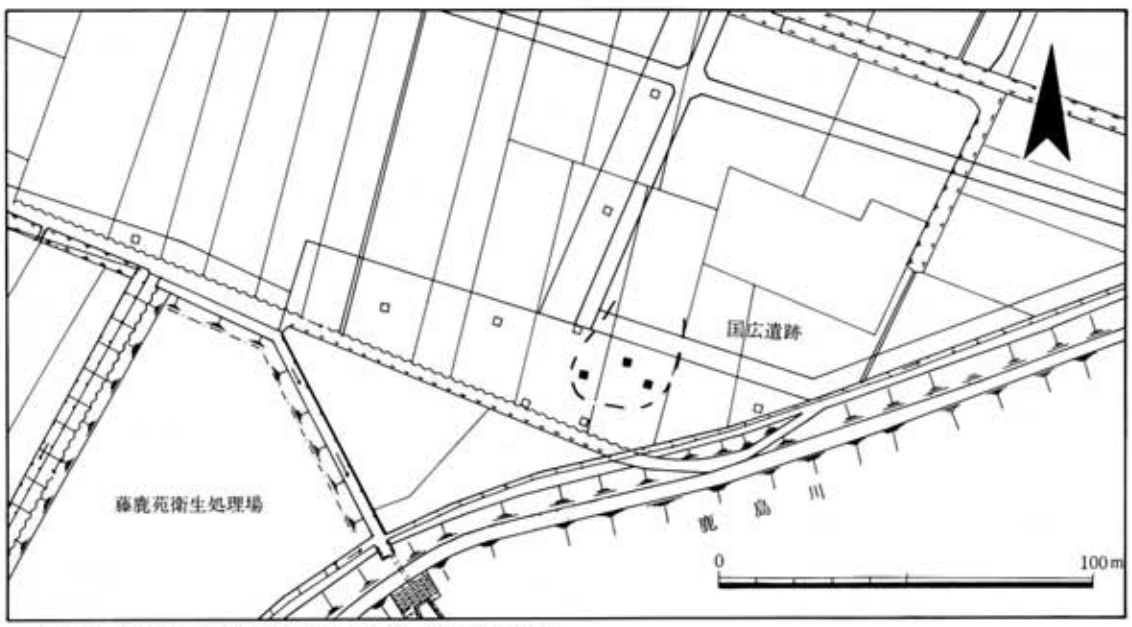


図18　鹿島市中村地区試掘坑設定図　（１：2,000）

4．佐賀北部地区の調査

図19　佐賀北部地区周辺地形図　（1：100,000）

1．伊万里市(上古場地区)
2．伊万里市(山代西部地区)
3　伊万里市(大里地区)
4　西有田町(曲川地区)
5．西有田町(大山地区)
6．西有田町(黒岩地区)
7．西有田町(切楠農道)
8．相知町(伊岐佐地区)
9．北波多村(大杉地区)

①　馬立場遺跡
②　稗田遺跡

(1) 伊万里市（上古場地区、山代西部地区、大里地区　図20）

上古場地区は伊万里市東山代町大字川内野に所在する。志佐川が形成した小規模な河岸段丘上で、標高約250ｍである。周辺には縄文時代遺物散布地の上古場遺跡などがある。

対象地2.7 haに12箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

山代西部地区は伊万里市山代町大字西分に所在する。佐代川下流左岸域の丘陵上である。周辺には縄文～弥生時代の遺物散布地が多い。

対象地2.6 haに11箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

大里地区は伊万里市二里町大字大里に所在する。国見山系から東に延びる丘陵上で、標高7～22ｍである。地区内には、縄文～弥生時代の遺物散布地、西尾遺跡・山川遺跡などがある。

対象地8.1 haに27箇所の試掘坑を設定して調査した結果、西尾遺跡で弥生時代と中世の遺物、柱穴と思われる小穴を検出した。

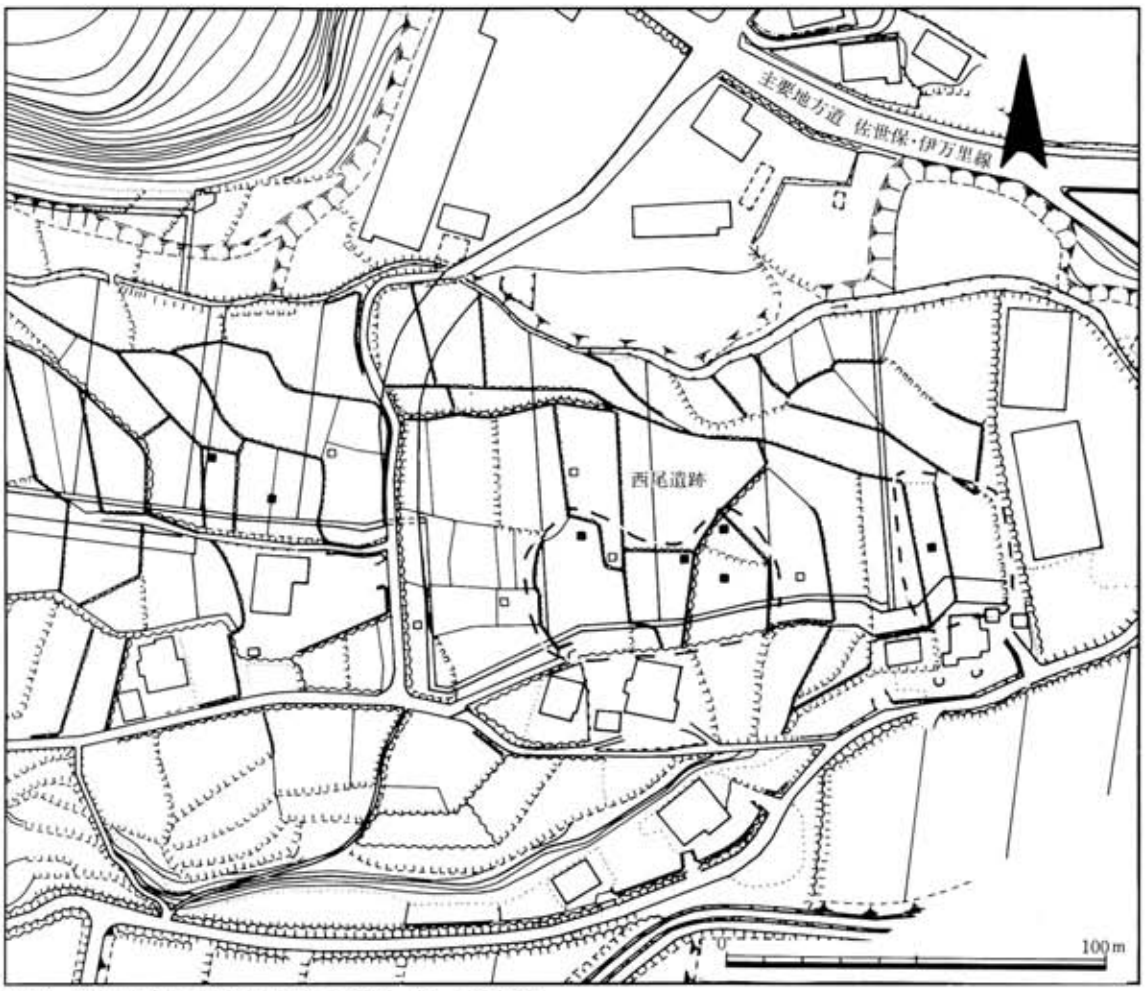


図20　伊万里市大里地区試掘坑設定図　（１：2,000）

(2) 西有田町（曲川地区、大山地区、黒岩地区、切楠農道）

曲川地区は西有田町大字曲川に所在する。国見山系東麓の蔵宿川と内野川によって形成された扇状地である。地区北側の丘陵に川浪遺跡が、南側の丘陵に中通遺跡などがあり、縄文時代の遺物散布地として周知されている。

対象地12 haに99箇所の試掘坑を設定して調査したが、数箇所の試掘坑で黒曜石剝片・近世磁器片が少量出土したのみで、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

大山地区は西有田町大字大木に所在する。国見山系東麓、桑ノ木原集落北側の丘陵斜面と扇状地である。地区南側の丘陵に上原遺跡、東側の丘陵に八郎山遺跡・下野山遺跡など、西側の丘陵に中原遺跡・寺尾遺跡などの旧石器～縄文時代の遺物散布地がある。

対象地15 haに54箇所の試掘坑を設定して調査したが、数箇所の試掘坑で黒曜石砕片・近世磁器片が少量出土したのみで、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

黒岩地区は西有田町大字大木に所在する。黒髪山系広瀬山北東の谷水田部で、地区に接して近世の茂右衛門窯跡がある。

対象地4 haのうち物原の延長部の可能性がある地点を中心に6箇所の試掘坑を設定して調査を行った。近世磁器片・窯道具が少量出土したが、出土状況から流れ込みと考えられる。

切楠農道は西有田町大字曲川と大字大木にまたがる、国見山系東側の標高100m前後の丘陵部である。地区内には旧石器～弥生時代の遺物散布地である神の前遺跡などがある。

対象地延長2kmのうち遺跡の存在が予想される部分に7箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 相知町（伊岐佐地区）

伊岐佐地区は相知町大字伊岐佐に所在する。左伊岐佐川と伊岐佐川の合流点にあたる標高11～22mの緩傾斜をなす段丘上である。地区東側は昭和58年の調査で縄文～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された伊岐佐中原遺跡、左伊岐佐川を隔てた南側は昭和59年の調査で鎌倉時代の小鍛治跡を伴う集落跡が検出された伊岐佐伊良尾遺跡がある（蒲原宏行ほか『伊岐佐遺跡群』相知町文化財調査報告書第1集　1986）。

対象地11 haに35箇所の試掘坑を設定して調査した結果、弥生時代中期の土器棺墓1基が検出された。隣接する伊岐佐中原遺跡Ⅰ区では弥生時代後期初頭の土器棺墓1基が調査されており、地区内に弥生時代墓域の広がりが想定される。

(4) 北波多村（大杉地区）

大杉地区は北波多村大字大杉に所在する。徳須恵川右岸の標高3～4mの水田部である。地区東側の霧差山山麓の丘陵上には庚申山古墳・正福寺古墳・立山古墳群や弥生～古墳時代の遺物散布地である立山遺跡・笹山遺跡がある。

対象地11.5 haに16箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

5．佐賀上場地区の調査

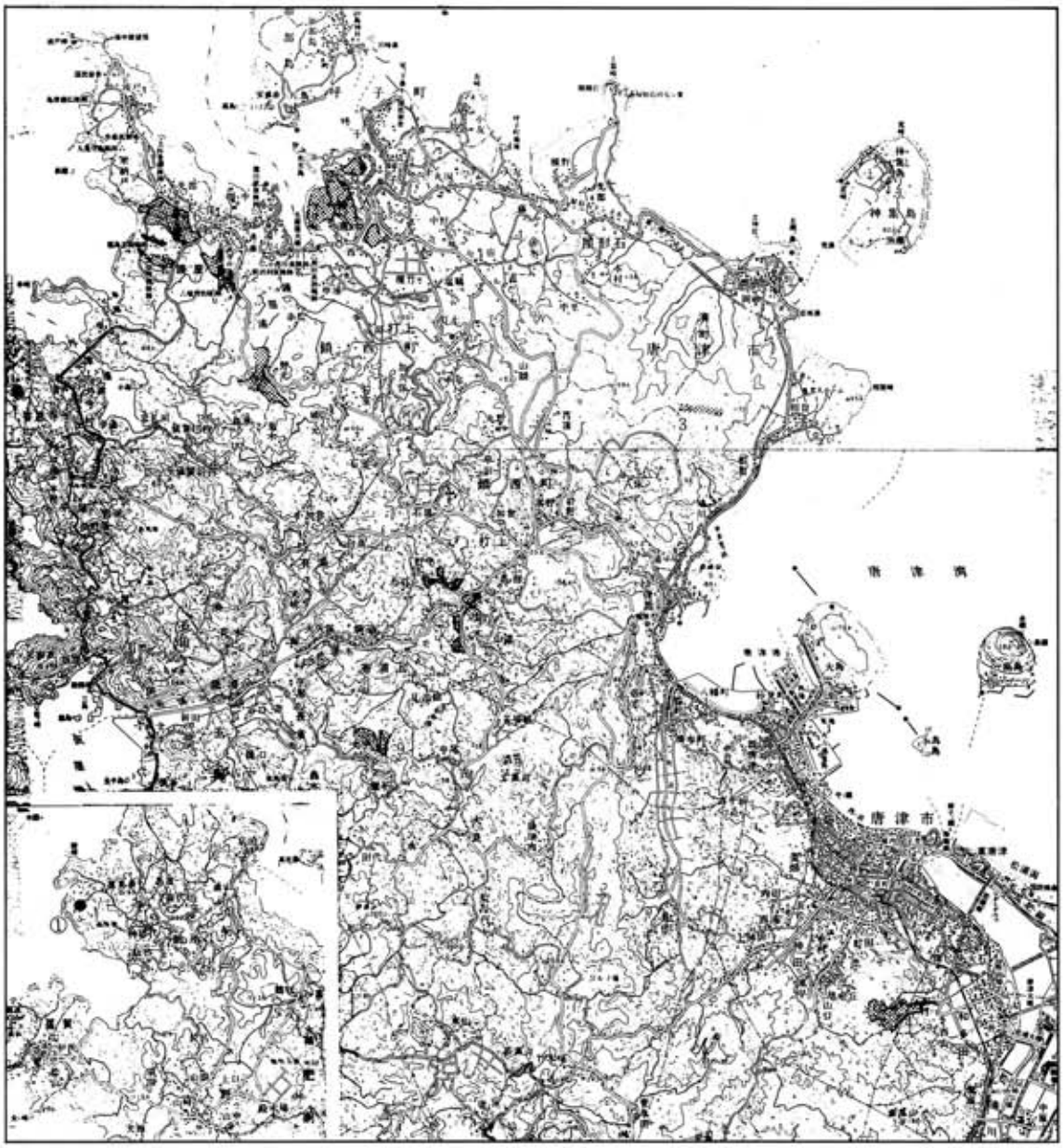


図21　佐賀上場地区周辺地形図　（1：100,000）

1．唐津市(山道工区)
2　唐津市(枝去本村前工区)
3．唐津市(朝月幹線水路)
4．唐津市(和多田団地)
5　鎮西町(野元工区)
6．鎮西町(風呂尾呂工区)
7　鎮西町(赤玉毛工区)
8　呼子町(殿ノ浦工区)
9　玄海町(藤平工区)
①　荒崎遺跡

(1) 唐津市（山道工区、枝去木村前工区、朝月幹線水路、和多田団地）

山道工区は唐津市枝去木字草履作ほかに所在する。上場台地上の小盆地状をなす標高95～140ｍの低地と、これに向って開析された谷部である。周辺の台地上には、牟田辻遺跡・辻遺跡・笹ノ尾遺跡などの旧石器～縄文時代の遺跡が多い。

対象地10 haのうち削平予定部を中心に19箇所の試掘坑を設定して調査した結果、３箇所の試掘坑で焼土を伴う遺構や石鏃などを検出し、縄文時代の遺跡（草履作遺跡）を確認した。

枝去木村前工区は唐津市枝去木字丸田ほかに所在する。有浦川上流によって開析された盆地状の低地である。周辺には旧石器～縄文時代の丸田遺跡・枝去木分校入口遺跡などがある。

対象地29.2 haのうち削平予定部を中心に20箇所の試掘坑を設定して調査したが、表土層から近世以降の陶磁器片若干が出土した以外は、遺構・遺物は検出されなかった。

朝月幹線水路は唐津市相賀字黒岩・湊字十蓮に所在する。上場台地東端の標高約140～180ｍの緩やかな丘陵部である。地区内及び周辺には旧石器～縄文時代の十蓮Ⅰ・Ⅱ遺跡、弥生～古墳時代の集落跡・墓地が検出された湊中野遺跡がある。

水路及びファームポンド予定部に23箇所の試掘坑を設定して調査した結果、十蓮Ⅱ遺跡で旧石器～縄文時代の遺物包含層が検出された。

和多田団地は唐津市和多田字本村に所在する。大土井砂丘列による後背湿地を望む低丘陵上である。地区内及び周辺には弥生～古墳時代の遺跡が多く、権現山古墳・本村遺跡などが知られている。

調査は道路予定部及び隣接する古墳推定地に12箇所の試掘坑を設定して行った。その結果、古墳推定地に設定した２箇所の試掘坑で花崗岩を主とする石組みの一部を検出した。古墳主体部であろう。この他、石垣で区画された墓地があり、一部は中世に遡る遺構が予想される。

(2) 鎮西町（野元工区、風呂尾呂工区、赤玉毛工区）

野元工区は鎮西町大字野元字前田・清水に所在する。名護屋湾の最奥部にあたる野元川河口の水田部である。地区内には縄文時代の遺物散布地である野元Ａ・Ｂ遺跡がある。

対象地13 haのうち干拓地を除く部分に15箇所の試掘坑を設定して調査を行った。その結果、稜柱形の黒曜石細石刃石核が１点出土したが、磨耗が著しく出土状況からも地区外からの流れ込みと考えられる。

風呂尾呂工区は鎮西町大字名護屋字フロヲロ・コホシキに所在する。海岸部に近い標高40～50ｍの丘陵地帯である。一帯には文禄・慶長の役に際しての諸将の陣跡が密集しており、地区内にも羽柴侍従陣跡・芦蒲観音寺陣跡などがある。

対象地19 haのうち周知の陣跡を中心に107箇所の試掘坑を設定して調査したが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

赤玉毛工区は鎮西町大字名護屋字赤玉毛・在郷町に所在する。名護屋湾の西側にあたる標高

約40～50ｍの丘陵地帯である。地区内には縄文時代の遺物散布地である在郷町遺跡が、また周辺には名護屋城跡を始め、古田織部陣跡・前田利家陣跡などがある。

対象地19 haに42箇所の試掘坑を設定して調査したが、２箇所の試掘坑で近代の遺物を伴う集石遺構が確認された以外は、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 呼子町（殿ノ浦工区）

殿ノ浦工区は呼子町大字殿ノ浦に所在する。呼子港と名護屋湾に挟まれた小半島状の標高約50ｍの丘陵地帯である。地区内には旧石器～縄文時代の遺物散布地である殿ノ浦岡Ａ・Ｂ遺跡・辻Ⅰ・Ⅱ遺跡・吹上遺跡や中世館跡伝承地の呼子殿館跡、文禄・慶長期の宗義智陣跡・脇坂安治陣跡・徳川家康別陣跡・久留米秀包陣跡などがある。

対象地37 haのうち陣跡比定地を中心に152箇所の試掘坑を設定して調査した結果、弥生時代集落跡、古墳群、陣跡関連遺構が確認された。

弥生時代のものとしては３地点で溝・土坑・小穴と中期を主とする遺物が検出された。土器棺と思われる大甕の破片も出土しており、墓地が存在する可能性もある。

古墳は近接した位置で２基が確認された（松尾田古墳群）。１基は腰石を残すに過ぎないが、耕作時に完形の須恵器横瓶が出土している。別の１基は僅かながらも墳丘の一部を留め、横穴式石室の石材が露出している。

陣跡関連では地区北西の丘陵で石敷遺構・溝を検出した。石敷遺構は豊臣秀保陣跡西腰曲輪のもの（田平徳栄ほか『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡　２』佐賀県文化財調査報告書第72集1983）に形態・規模が酷似している。丘陵表面には玉石・陶磁器片が少量散布しており、文禄・慶長期の陣跡と見て間違いないが、畑地としての利用が進んでいるためか礎石・土塁・堀などの目立った構造物はなく、縄張りの詳細は不明である。東南に延びる岬には加藤嘉明陣跡があり、本地点と有機的関連を持つ可能性がある。また、脇坂安治陣跡東南方の標高約50ｍの低丘陵上で三又状に延びる溝と小穴を検出した。遺物は出土しなかったが、規模・形態から陣跡関連の遺構である可能性が強い。脇坂安治陣跡では低丘陵の屋根筋に走る土塁を中心に調査を行った。土塁が人為的な盛土で南側に浅い溝が沿うことを確認したものの、時期や性格を決定するだけの資料は得られなかった。宗義智陣跡では表面に高麗青磁を含む陶磁器片が僅かながら散布するが、全体的に削平が著しく明確な遺構を確認することはできなかった。

(4) 玄海町（藤平工区）

藤平工区は玄海町大字有浦上に所在する。有浦川によって開析された谷を望む標高約120ｍの緩やかな丘陵部である。地区内には旧石器～縄文時代遺物散布地の京野遺跡がある。

対象地16 haに41箇所の試掘坑を設定して調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

６．筑後川下流用水事業に係る調査

筑後川下流用水事業に伴う埋蔵文化財確認調査は、佐賀東部導水路の神埼郡三田川町田手

地区、大詫間幹線水路の佐賀郡諸富町小杭地区について実施した。

(1) 佐賀東部導水路

田手地区は三田川町大字田手に所在する。西側の吉野ケ里丘陵遺跡と東側の田手川とに挟まれた標高10m前後の狭隘な水田地帯で、佐賀県遺跡地図では同年度に発掘調査を実施した吉野ケ里丘陵遺跡（本書P.118）の範囲に含まれている。

調査は長さ100m、幅10mの水路予定地に5箇所の試掘坑を設けて行った。その結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(2) 大詫間幹線水路（図9）

小杭地区は諸富町大字大堂に所在する。諸富町役場に北接する小杭集落の北側、山領と大堂を結ぶ県道の南側一帯の標高2m前後の水田地帯である。同年度に発掘調査を実施した太田本村遺跡Ⅱ区（本書P.122）は、本調査地点から北側約1kmに位置する。周辺には小杭屋敷遺跡、小杭村中遺跡や「土師」の地名を残す土師村中遺跡などがある。

調査は長さ940m、幅20mの水路予定地に24箇所の試掘坑を設けて行った。その結果、小杭集落の縁辺を中心とする長さ330mの部分に弥生時代～中世に至る遺物包含層ならびに土坑・溝状の遺構を検出した。なかでも小杭集落の北側を東西に走る水路予定地内は濃密な遺構の分布状況がみられた。予定地内の遺跡の面積は約6,600㎡である。

Ⅳ．埋没条里（地割り）確認調査

1．調査の概要

昭和60年度に引き続き埋没した地割りの確認調査を実施した。本年度の調査は、当該年度県営圃場整備事業対象地区となっている杵島郡白石町の白石西第一・第二・第四地区を対象として実施した。

調査の結果、白石西第一地区で一連のものと思われる溝１条など、白石西第二地区で斜行する溝１条、白石西第四地区で溝３条などが検出された。

2．調査の内容

(1) 白石西第一地区

白石西第一地区は、白石町大字馬洗・今泉に所在する（図22）。県道福富・武雄線と大町―有明町深浦を結ぶ農免道路が交差する点の南東の一角、東西約650ｍ、南北約600ｍの地区で、標高は約2.2～2.5ｍである。

図22　白石西第一地区位置図（１：50,000）

事前の聞き取り調査によると、本地区内には条里制坪並の遺称「２の坪」・「15の坪」・「16の坪」・「29の坪」・「33の坪」が残っており、この遺称より坪並を復元すると、今回調査対象となった地区が１里分にほぼ合致することが判り、日野氏の発表[註1]や『白石町史』などの記述と一致する。この復元坪並によると、本地区の１坪の長さは平均で、東西方向に110ｍ弱、南北方向に約100ｍとなる。

尚、本地区北西の馬田集落付近は、古代～中世の遺物散布地である馬田遺跡として知られていた。

本地区の調査に係る試掘坑の設定については、現況地割りによって推定される線、及び過去３年次の調査によって検出されている現況地割りに斜行する埋没地割りの検出も考慮し、水路予定地のうち、切れ目なく比較的長い試掘坑が設定できる部分を選んだ。

その結果、地区北部に東西長さ約200ｍ、地区南部に東西長さ約400ｍの試掘坑を設定し調査を行った（図23）。

尚、本地区の基本土層は、約20～30㎝の耕作土下に、この地域全域に見られる灰白色粘質土（上部は酸化して黄褐色化）、いわゆる潟土が堆積する。その下には青灰色粘質土が確認された。

地区北部に設けた試掘坑では遺構・遺物ともに検出されなかった。

地区南部に設けた試掘坑では、中央付近に１条（Ａ溝）、西端で１条（Ｂ溝）が検出された。

Ａ溝は、地区東寄りを南北に走る畦道の東側で検出された。この畦道は復元坪並では19～24

図23　白石西第一地区試掘坑設定図　（１：3,000）

の坪と25～30の坪を画する線に当り、又A溝が検出された場所は、28・29の坪の境付近に当る。図24はA溝付近の拡大図である。主試掘坑（東西）部分の、畦道より東24～26m付近で、幅約1.8m、深さ約0.7mの南北方向のU字溝が検出された。この溝を追って北側へ試掘坑を広げた所、主試掘坑北壁より6m北部分でこの溝は終了し、北端より1.4～3.2m部分より西へ、上部幅1.8m、下部幅0.8m、深さ0.45mの2段掘り状の小溝が検出された。この小溝を追って更に西約10m付近に南北試掘坑を設けた所、この小溝が北へ向って大きく屈曲している状態が確認された。この溝は幅約2.5m、深さ約0.55mで、U字状を呈する。尚この部分の南側に接して、東西方向の浅い皺状の凹凸が見られた。更に西に主試掘坑より約15mの南北試掘坑を設けたが、遺構は検出されなかった。これらの溝は埋土の土質などより一連の溝と考えられる。

A溝の南北部分の東側壁は出入りが大きい。図26はA溝の主試掘坑南壁部分の土層断面図である。溝は灰白色粘質土の地山（Ⅱ）に掘り込まれており、底面は基本土層の青灰色粘質土（Ⅴ）となっている。溝の埋土は灰色粘質土（Ⅳ、よくしまる）で、地山の酸化土と思われる黄灰色粘質土（Ⅲ）をブロック状に包含していた。

本溝より数十点の陶磁器が出土した。図27・28は本溝出土の陶磁器である。1・2・4～6はA溝南北部、3は西の小溝上部より出土した。

1は、別個体の口縁部が$\frac{3}{8}$周ほど熔着した白磁碗で、口径10.7cm、器高6.5cm。口縁内面に雷文帯を廻らし、その上下に各2条の圏線を廻らす。見込みには2条の圏線及び花文を配す。

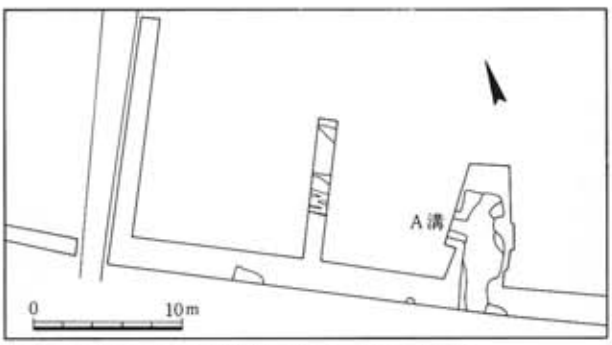
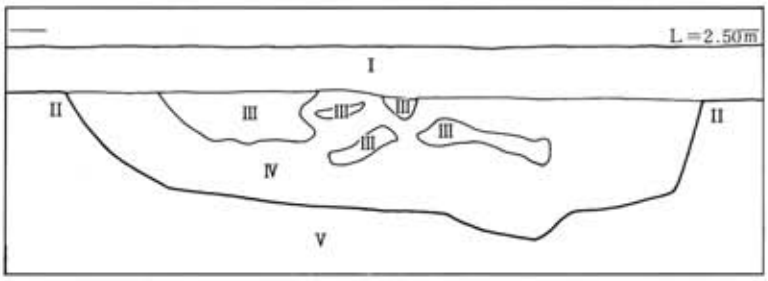


図24　白石西第一地区遺構配置図　（1：500）

図25　白石西第一地区A溝(北から)



Ⅰ：耕作土・床土
Ⅱ：灰白色粘質土（上部は黄褐色）
Ⅲ：黄褐色粘質土（地山Ⅱの酸化土）
Ⅳ：灰色粘質土（よくしまる、水気少ない）
Ⅴ：青灰色粘質土

図26　白石西第一地区A溝土層断面図　（1：40）

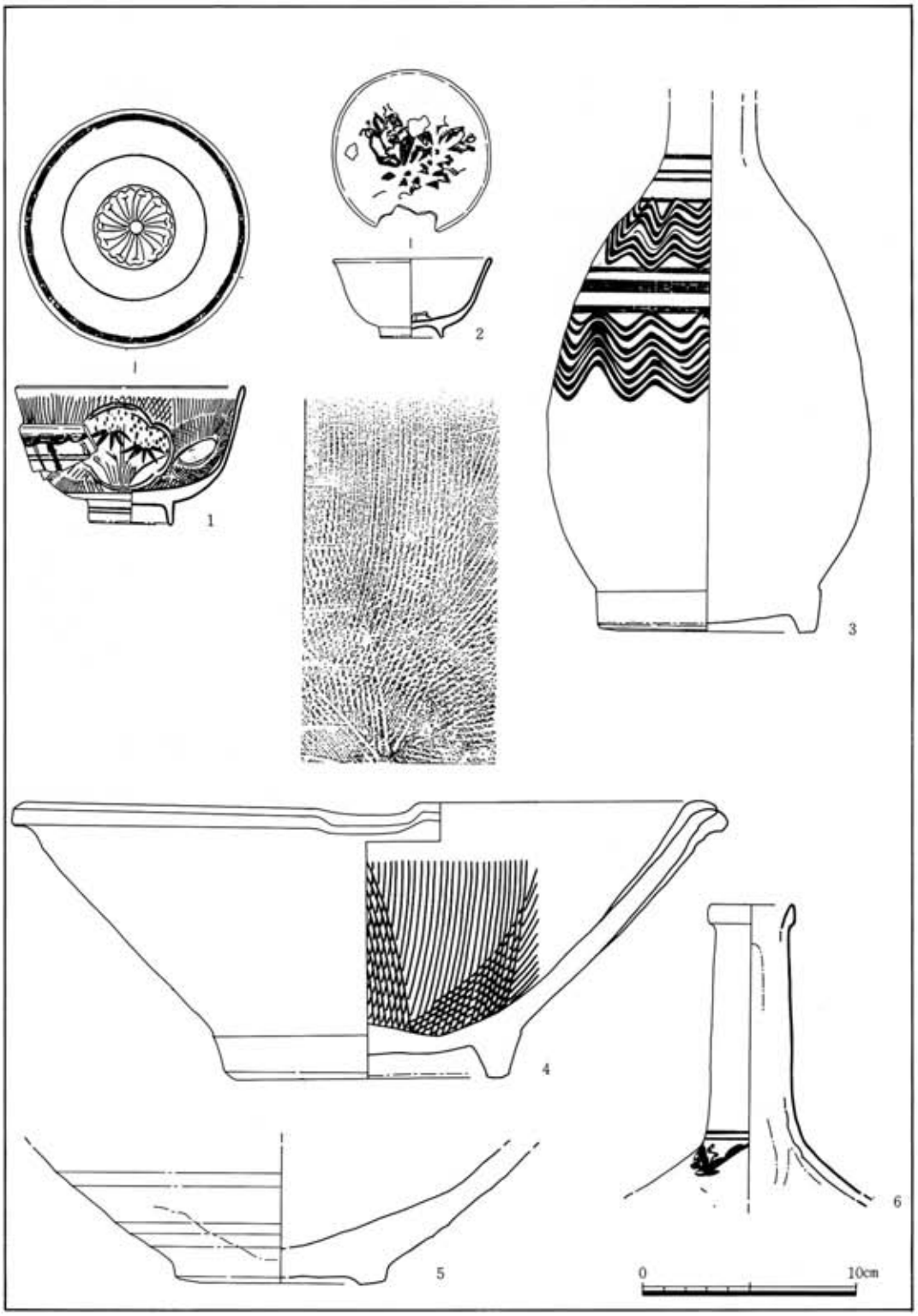


図27　白石西第一地区Ａ溝出土陶磁器実測図

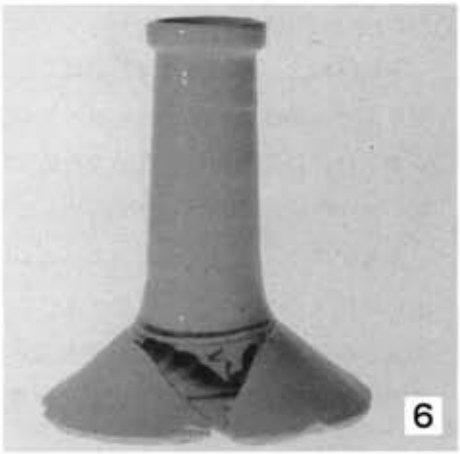


図28　白石西第一地区Ａ溝出土陶磁器

外面体部は目の細い線で埋め、三方に窓を配してその中に竹笹文を描く。体部下位から高台外面にかけて３本の圏線。呉須は青色に発色する。熔着した個体は、横方向に平行線文、縦方向に太い線と２本の平行線を交互に配した粗い格子目文を描く。呉須は黒味がかかっている。

２は口径7.4cm、器高3.6cmの白磁坏で、見込みには暗青色に発色した呉須で草花文を描く。釉は黄味がかった灰白色。見込みに剝落した窯壁小片が熔着している。

３は削り出し高台を持つ唐津徳利で、口縁部を欠く。胎土は暗赤褐色で、鉄釉を施した後、体部上半に白化粧土で刷毛による波状文を描く。

４は口径32.9cm、器高12.7cmを計る片口の擂鉢である。口縁部は外方に肥厚する。胎土は赤褐色で、内外面に鉄釉を施し暗赤褐色化している。櫛目は27本を１単位とし、重ねながら右方向に施している。

５は唐津大皿の破片で、器壁は厚く、高台は三日月高台に近い。胎土は赤褐色～淡赤褐色で、内面の見込み中央を除いた部分と、外面の体部に不規則にかかる。見込みには目跡を残す。

６は染付徳利の口縁部で、胎土は灰白色、釉は青味がかった灰色である。肩部に２条の圏線を廻らし、その間に山状の文様を三方に描く。

Ｂ溝跡は、試掘坑西端で検出された。検出されたのは東岸のみであるが、昭和60年度の確認調査で、墓地南側部分に設けた試掘坑（図23■部分）より植物遺体を含む暗灰色粘質土の深い堆積が検出されていることから、幅10ｍ以上の南北溝になるものと思われる。今回の調査でも出土した遺物は磨耗した土器片だけで遺構の時期は不明であるが、本地点より北へ約50ｍの部分から北へ、南北に走る水路が存在することから、この水路が本地点まで延びていた可能性がある。但し、この南北水路は復元坪界線と一致しない。

(2) 白石西第二地区

白石西第二地区は、白石町大字今泉に所在する（図29）。県道福富・武雄線の南に接する地区で、白石西第一地区と隣接する。東西約440ｍ、南北約660ｍの地区で、標高は約2.1～2.5ｍである。

図29　白石西第二地区位置図（１：50,000）

本地区南方の多田集落付近には、弥生時代～中世の遺物散布地である多田遺跡が知られており、又この「多田」は『和名抄』に見える多駄郷の遺称地と考えられる。地区北側には中世～近世の遺物散布地である今泉遺跡が所在する。

本地区内には、北西より南東へ走る畦道１本、北東より南西へ走る水路１条が、又地区北東方に同傾きの水路１条が存在するため、白石西第一地区と同様、現況地割り及び斜行地割りの両面から試掘坑を設定した。即ち地区北側の南北方向の試掘坑（第１試掘坑）、地区南側の東西方向の試掘坑（第２試掘坑）及び補助試掘坑４本（第３～６試掘坑）である（図30）。基本

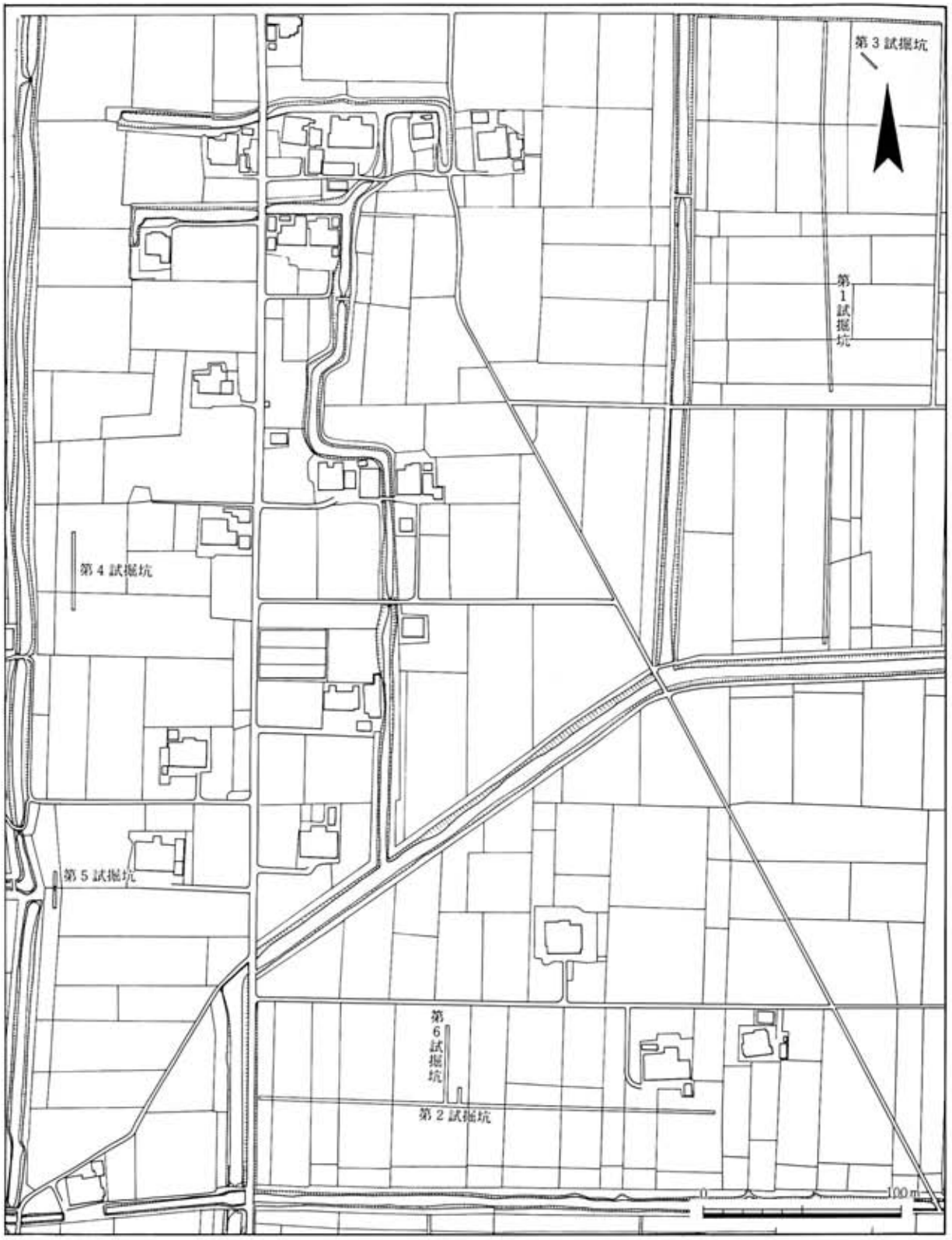


図30　白石第二地区試掘坑設定図　（１：3,000）

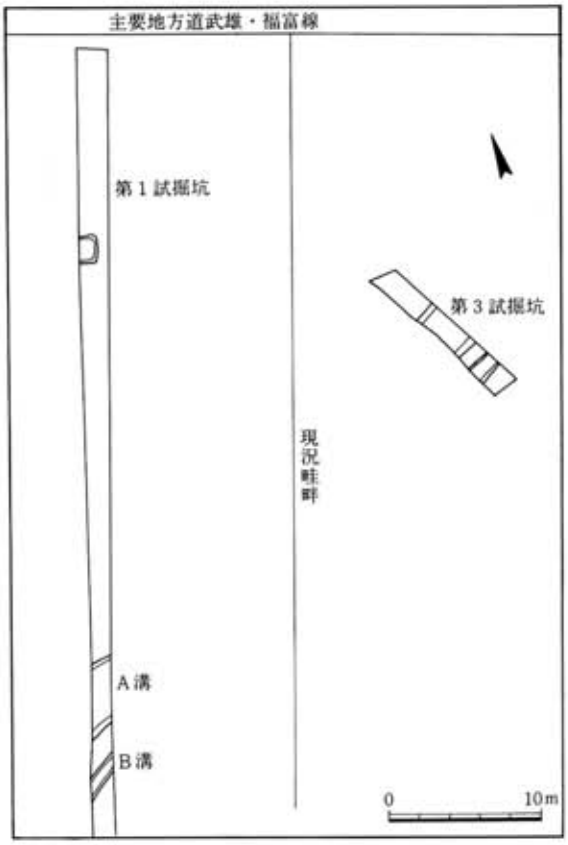


図31　白石西第二地区第１・第３試掘坑遺構配置図　（１：500）

図32　白石西第二地区Ａ・Ｂ溝（北から）

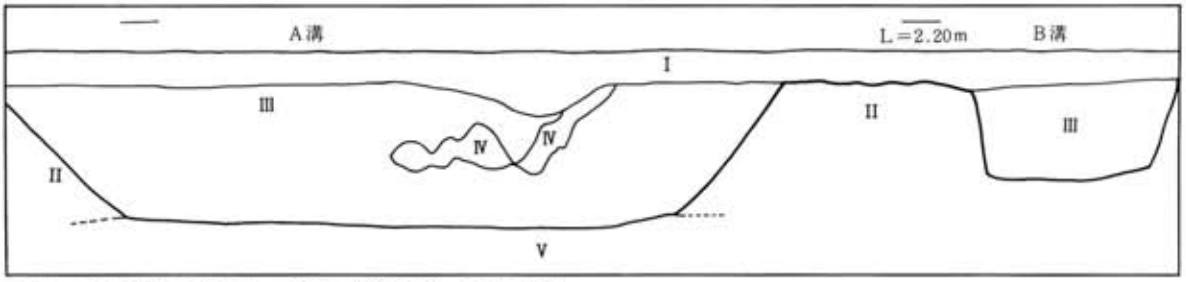


図33　白石西第二地区Ａ・Ｂ溝土層断面図　（１：40）

土層は白石西第一地区と同じである。

第１試掘坑は、県道脇より南北に310ｍの長さで設けた。その結果、道路端より21～25ｍ付近で平行して走る２条の溝を検出した。このため本地点北東部の、この溝の延長部が推定される部分に、検出された溝を直角に検出できるよう第３試掘坑を設定した（図31）。北を走るＡ溝は幅約1.8ｍ、深さ0.4ｍ、南を走るＢ溝は幅0.4～0.6ｍ、深さ約0.25ｍである。図33は第３試掘坑東壁におけるＡ・Ｂ溝の土層断面図である。遺構は地山である灰白色粘質土（Ⅱ、酸化して黄灰色粘質土）に切り込んでおり、Ａ溝の底面には基本土層の青灰色粘質土（Ⅴ）が見えている。埋土はＡ・Ｂ溝とも固くしまる暗灰色粘質土（Ⅲ）で、Ａ溝には地山である黄灰色粘

質土がブロック状に混入していた（Ⅳ）。遺物としては、磨耗した土師器片１点が出土したのみで時期は不明である。

この検出された溝を北東方へ延長すると、調査区外で同傾きを持つ水路と合致し、本溝は過去におけるこの水路の延長部と考えてよいと思われる。尚、この溝の南西方延長上に設けた第４試掘坑では、関連すると思われる遺構は検出されなかった。

第２試掘坑は地区南寄りに東西に設けた長さ230ｍ弱の試掘坑で、更にこの試掘坑の西端より93ｍ部分から北へ長さ38ｍの第６試掘坑を設けた。その結果、第６試掘坑部分で近代の陶磁器埋棄坑を検出した他は、遺構・遺物は検出されなかった。

第５試掘坑は、本地区一帯の現況地割りが今回調査対象地区西辺に沿った水路を境にし、それ以西と以東の東西地割りにズレが見られることから、地区両方に存在する東西水路の延長上に設けた試掘坑である。調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

図34　白石西第四地区位置図

(3)　白石西第四地区

白石西第四地区は、白石町大字堤に所在する（図34）。杵島山系東麓の標高3.1～3.7ｍの沖積平野である。

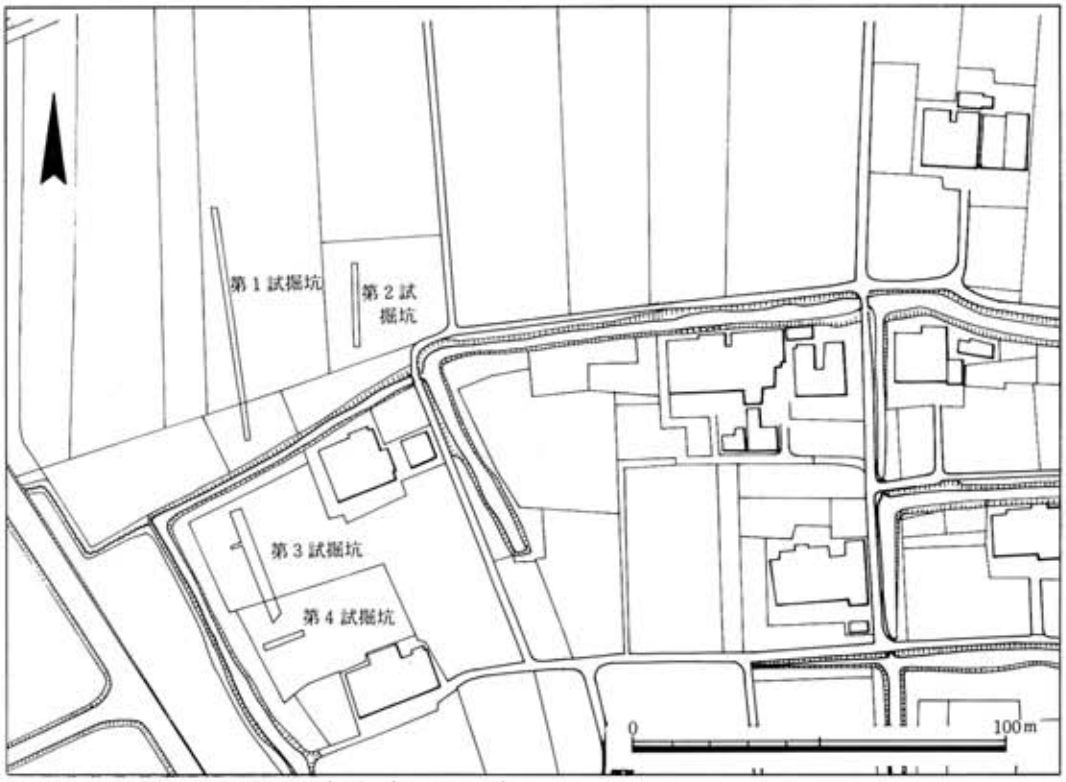


図35　白石西第四地区試掘坑設定図　（１：2,000）

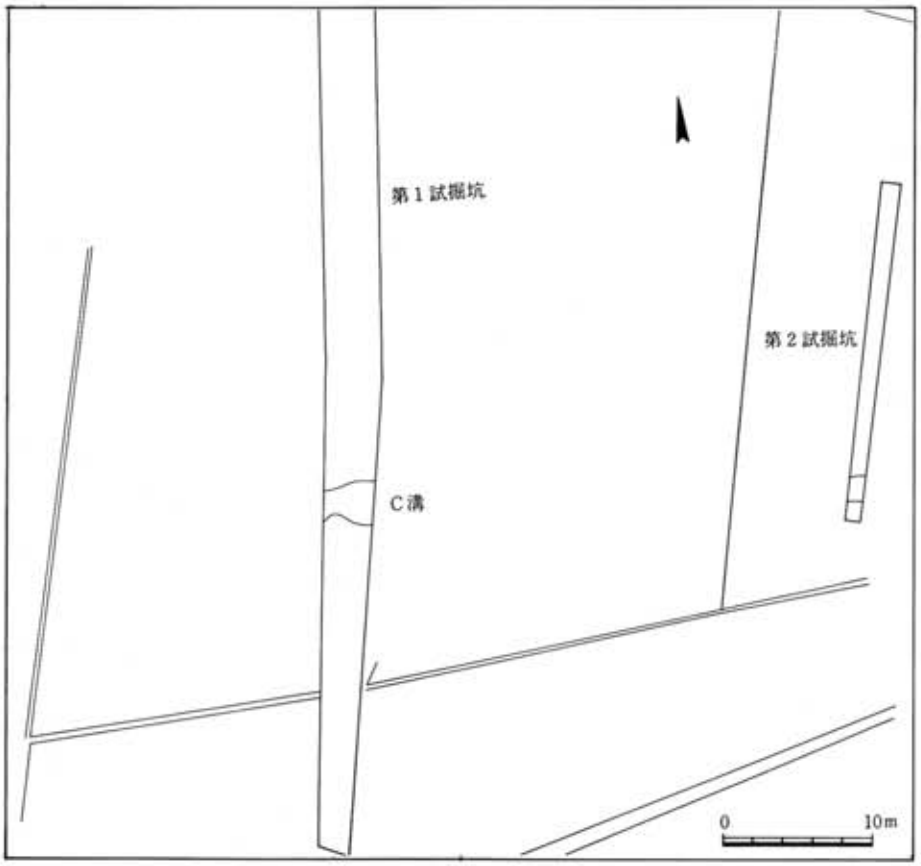


図36　白石西第四地区第1・第2試掘坑遺構配置図　（1：500）

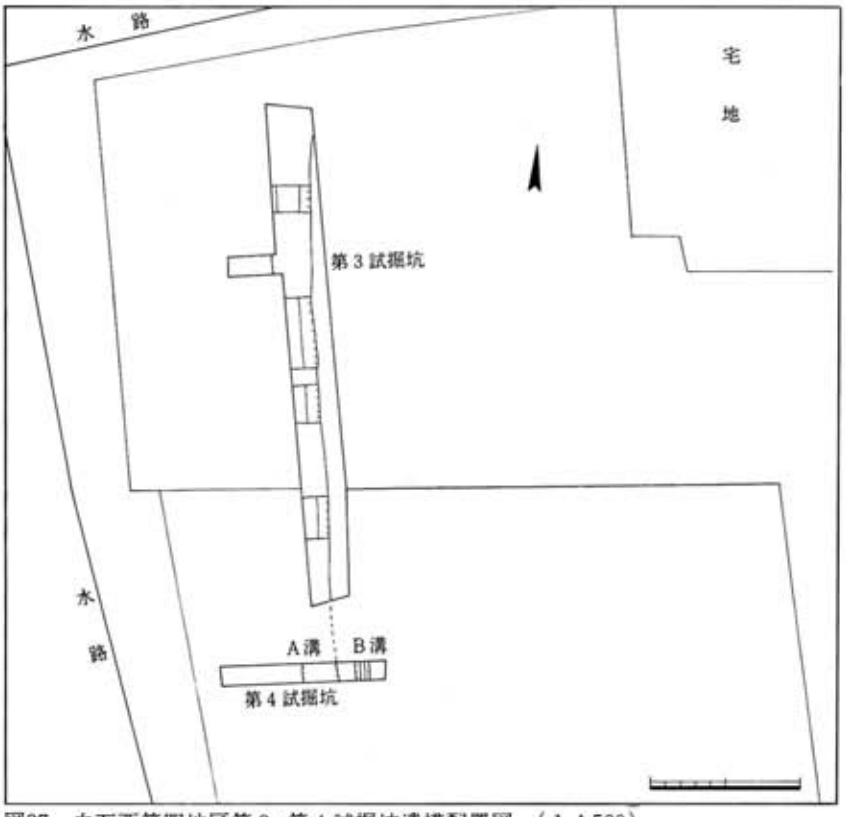


図37　白石西第四地区第3・第4試掘坑遺構配置図　（1：500）

事前の聞き取り調査によると、本地区内には条里制の坪名の遺称である「１の坪」・「２の坪」・「11の坪」・「12の坪」・「十三」・「23の坪」・「24の坪」・「北里」・「西里」などの地名が残っていた。

本地区の大部分が、弥生時代～中世の遺物散布地である堤遺跡の範囲にあたり、また地区南側には須古城（高城・隆城）跡が存在し、その北側堀跡と考えられる地割りが本地域内に残っている。

調査は地区内に４本の試掘坑を設けて行った（図35）。

第１・第２試掘坑は地区北西部に南北に設けた長さ62ｍと23ｍの試掘坑である（図36）。この２本の試掘坑より一連のものと考えられる東西方向の小溝（Ｃ溝）が検出された。幅1.4～2.8ｍ、深さ0.1～0.3ｍ。暗灰色粘質土を埋土とし、遺物は出土しなかった。

図38　白石西第四地区Ａ溝（北から）

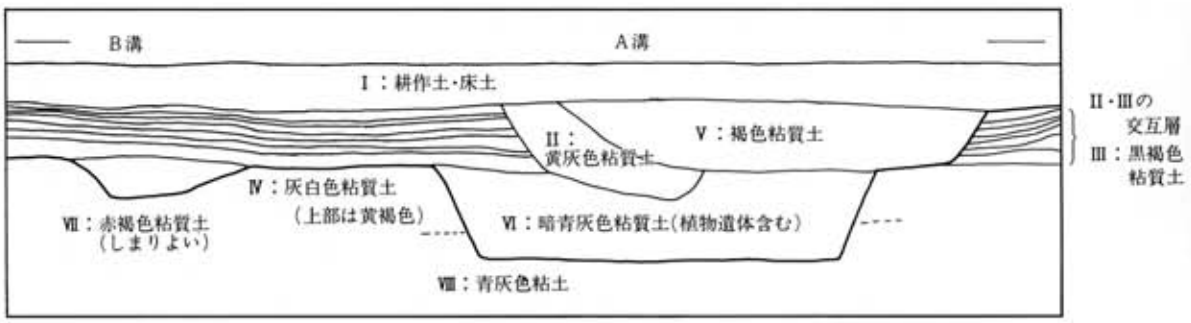


図39　白石西第四地区第３試掘坑Ａ・Ｂ溝土層断面図　（１：40）

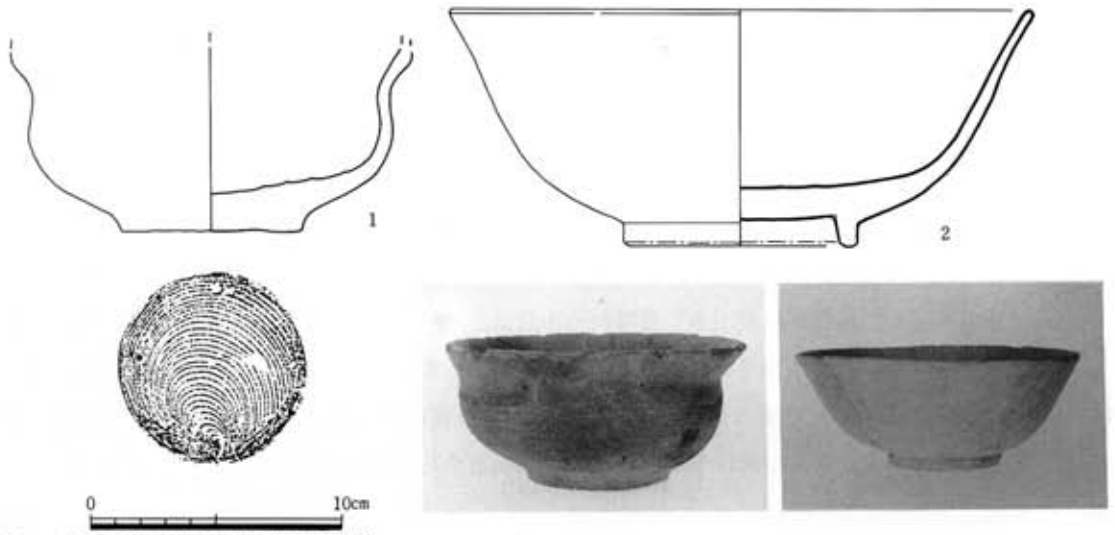


図40　白石西第四地区Ａ溝出土陶磁器

第３・第４試掘坑は地区南部に設けた試掘坑である。この両試掘坑より南北方向の溝１条（Ａ溝）及びこれに並行して東側を走る小溝１条（Ｂ溝）が検出された（図37）。Ａ溝は幅1.2～2.6m、深さ0.6～0.7m、Ｂ溝は幅0.9m、深さ0.2mである。図39は第４試掘坑におけるＡ・Ｂ溝の土層断面図である。Ａ溝は数次にわたる土の堆積により、３度掘り替えられたことが判る。Ｂ溝はこのうち最初の溝とほぼ同時期のものと考えられる。第３試掘坑の検出面はこのうち最下層のものである。Ａ溝は北側へいくに従い溝壁が岸から中央に向って傾斜が強くなる形状をとる。

図40はＢ溝Ⅵ層出土の陶磁器である。１は無釉の陶器鉢で、底部は糸切りの平底。胎土は暗赤褐色である。２は白磁鉢。胎土はやや灰色がかった白色で畳付部のみ無釉。釉はきれいに発色していない鈍い白色で、いくつかの貫入がある。

３．まとめ

(1) 白石平野の開発の概要――微地形を中心に――

図41は、県営圃場整備事業に先立ち農林部で測量した$\frac{1}{1,000}$地図を基に作成した白石平野の微地形図である。周知のように白石平野は、農業用水確保のための地下水採取により、地盤沈下の著しい地域となっている（平野東部で最大年間５cmの沈下が確認されている。平均して年間１～２cm[注3]）。地下水の保水層である有明粘土層などの状態による地盤沈下が微地形に与える影響については後考に俟ちたい。そういう意味も含めて本図は未完成のものであり、今後資料を集めて完成させたいと思っている。

一般に白石平坦地と呼ばれる本平野も微地形から見ればかなり変化があることが判り、この微地形が開発に与える影響も決して小さいものではなかったと思われる。

白石平野の微地形を大きく見ると、妻山丘陵と稲佐山丘陵に挟まれた部分で、微高地が東に向って舌状に張り出している。また、この微高地の北東端から東に今泉・多田方面へ枝微高地が延びている。この微高地の北側は六角川に向って緩やかに傾斜しており、南側は高町・廻里を中心に辺田方面へ強く湾入する。

白石平野平坦地において、現在までに本調査・確認調査でまとまった古墳時代前後の集落跡が確認されているものとして、湯崎東遺跡[注4]と多田遺跡[注5]がある。両遺跡ともその範囲については未確認であるが、微高地上ないし微高地周辺に立地していることが判る。また生産基盤を考える上で、両遺跡とも微谷状地形に面していることは注意してよいと考える。

このように白石平野の初期の開発は微高地部を中心に行われていたようであるが、生産・経済基盤としての稲作が進展する平安時代～中世にかけて、荘園などに伴う新田開発は六角川周辺・有明町地区の低地部及び海の方（干拓）に向う。杵島郡内の荘園・公領などの位置・範囲については諸説が対立する所であるが、概ね六角川両岸地域及び、平野東部低地に杵島北郷庄・太田庄・大町庄・中津庄など、堤周辺の微高地から南部低地にかけて杵島南郷・久治国・

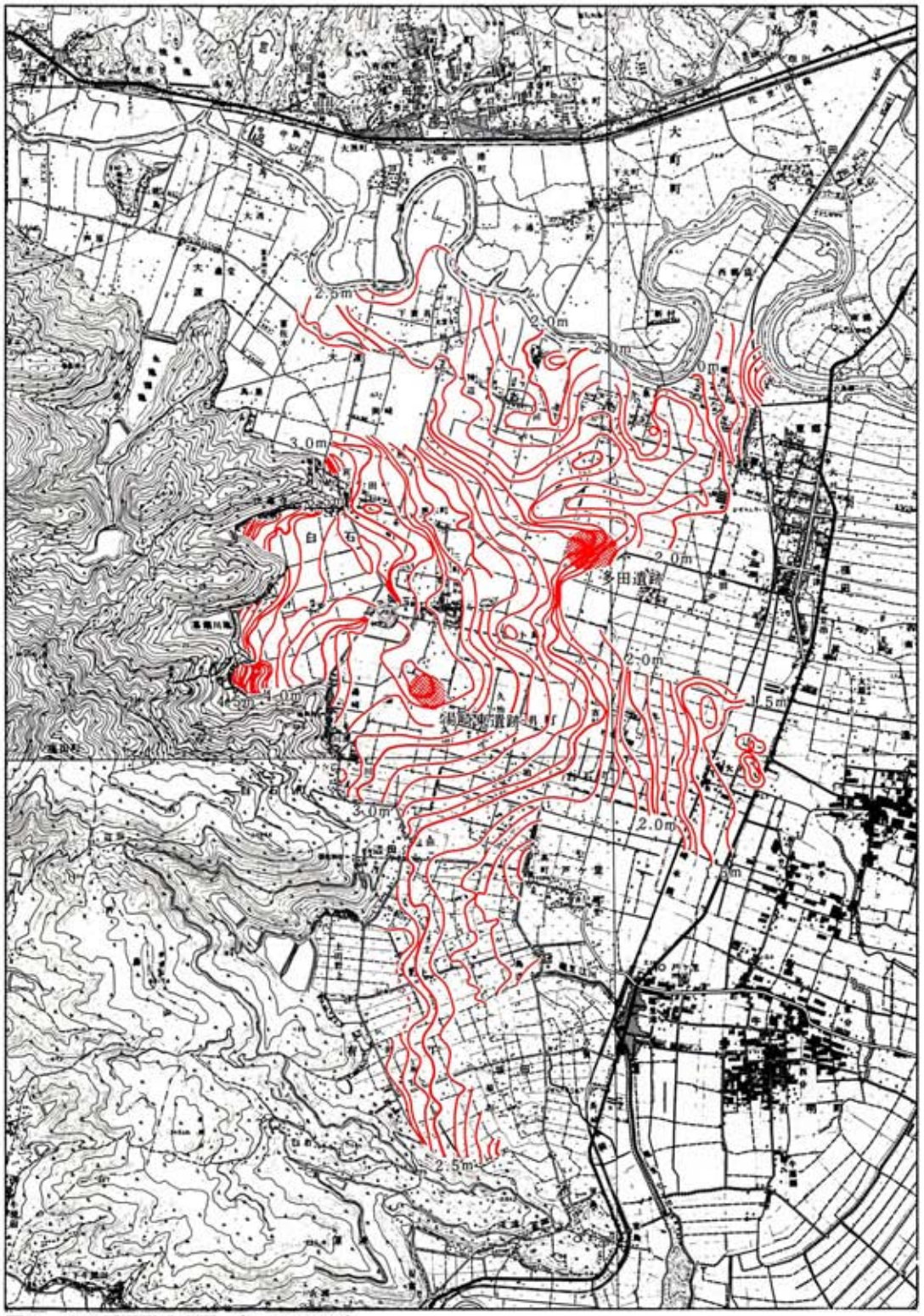


図41　白石平野微地形図　（１：50,000）

稲佐社・六ケ里保などが存在した。本地域に残る条里ないし条里的地割りが作られたのがどの時期にあたるかは現在の所、不明である。

時代が降るに従い、有明海の自然陸地化及び干拓に伴う可耕水田の増加が進むが、これに伴う作水需要の増加が白石平野域における水不足の慢性化を促す結果となった。周知のように六角川の塩水朔上は、満潮時には武雄市高橋まで至る。このため六角川本流の作水への利用は、白石平野灌漑の主体になり得なかった。『六角川流域の灌漑構造』[注6]に依れば、昭和21年現在で、全灌漑水量のうち河川灌漑は12.3%に過ぎず、溜池灌漑の72.9%と対称的である（尚これに井戸灌漑12.3%、その他2.5%が加わる。又この数値は六角川全域に関するもので平坦地のみに限ればその差はもっと大きくなるであろう。）。白石平野における用水不足率は57.2%に達し、本県一の用水不足地帯となっている。

こうした水不足は江戸前期には既に顕著なものとなっており、「白石三万石」といわれた水田を抱える藩政府にとって、本地区の灌漑は重要問題であった。特に微地形図が示す通り、中部域の灌漑は１つの障壁である。西の杵島山地は集水面積が狭く、充分な水を供給してくれない。そこで天水の有効利用の方策として堤が造られた。この間の事情は『疏導要書』に詳しい。南郷（有明町）地区は福泉寺堤、須古地区は船野堤・嘉瀬川池（宗桂塘）によってまかなわれたが、問題は馬洗・今泉から東の地区であった。永池堤、次いで六角川を越え焼米堤から水を引かなければならなかった（現在も大渡から馬洗の岡崎を結ぶ水路及び夫婦堀として地割りが残っている。）。しかし「後年ニナリテ土井外搦地多ク新田所々ニ出来テ水ヲ遠ク引クユヘ只様廻水ノ便利悪クナリタル」上、「中郷ノ地面高クシテ廻水思ハシカラス」という状況であった。このように、白石地区における「水配分」の問題は困難を極めると同時に、農民にとっては死活に関わる問題でもあった。

(2) 条里的地割りと斜行地割り

白石平野一帯にはやや東に偏った（N16°E）条里的地割りが広がっている（『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書３～５』 1985～1987）。この条里的地割りの東西線は六角川にほぼ並行して設定されている。また斜行道路・水路は白石平野全域に分布するが、比較的北半に多い。また過去４年次にわたる条里的地割り確認調査においても数箇所で検出されている。その中には現存の水路より明らかに古いと考えられるもの（昭和59年度白石西第四地区検出溝）も含まれる。

こうした斜行地割りの成因について現段階で結論を出すことはできないが、前項でみたようにこの地域の用水問題を抜きにしては考えられない。

図41で見るように、白石平野に残っている条里的地割りは微地形の斜面方向と傾きを異にする場合が多い。このため水配分の必要性によっては、条里的地割りの方向と傾きが違う水路を造る意義も生まれてくる。検出された埋没溝は、時代決定に必要な遺物をあまり包含しておら

ず、時期が不明であるが、前記昭和59年度検出溝が嘉瀬川池と今泉を結ぶ線上にあたるのは示唆的である（当該調査では北東方の延長部が検出できなかったが）。現在の所、全ての斜行地割りの問題をこの観点から説明することはできないが、『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書４・５』で立てた現地割り以前の旧地割りという仮説と併せて、今後検討していきたい。

(3) 堤地区の条理的地割りについて

本地区の現況地割りにより、条里的地割りを見てみると、船野・宝蔵寺地区に行われているやや西偏した地割りと、白石平野一般に行われているやや東偏した地割りの接する地区にあたる。

この地区の中世後期～江戸時代における状況については『北肥戦史巻21』に「然るに彼の平井が居城高岳と申すは、（中略）西は百町牟田とて深泥限りを知らず」とあり、船野・宝蔵寺地区に百町牟田と呼ばれる湿地が存在したことが知れるが、これはこの地域が杵島山麓の源泉地帯に面していたこと、地区の出口に須古城の所在する高岳を擁し水はけが悪かったことが考えられる。この百町牟田が当時あるいはそれ以前に条里的地割りを持っていたかどうか不明であるが、この地区は初代須古邑主龍造寺信周により、川津及び馬田方面へ排水する工事が行われ、「美田」に変った（『白石町史』）。

今回の調査対象地区周辺で採集できた遺称により、註１日野氏研究と『有明町史』を参考にして、本地区一帯における条里的地割りの里界線を図42に復元した。

井ノ元、白川町を含む里（以下、本里という）の四至のうち、北辺は遺称名からＡＢを結ぶ線に想定される。この線を生かすと、本里の北の里、黒木町を含む里の南側の東西２列分は、本里の北側の２列と重複し、存在しなくなる。本里の東辺はＢＣを結ぶ線に想定され、これは白石平野北部に一般に行われている条里的地割りの里界線に連なる。またこの線の東は「西里」と呼ばれている幅１～２町の地帯を挟んで、小島城を含む里と接する。本里の南辺は隆城跡及びその城下町内に想定され不明。本里の西辺は、「１の坪」の西の「西里」の存在から、ＤＥを結ぶ線付近に想定される。この想定線は、これ以東の坪並と比べて著しく西偏し、これ以西の坪並と並行する。本里は「西里」・「まんぞう西」・「のぼりあがり」などと呼ばれている幅約１町の地帯を隔ててＨＦＧで囲まれる里と接する。

このように今回検出された溝のうちＡ・Ｃ溝をこの復元坪並の上で見てみると、Ａ溝は本里の西辺であるＤＥ線上よりやや西にずれるが傾きはほぼ一致する。本溝は出土した遺物より江戸前期のものと考えられる。また須古城との関連も考えられる。Ｃ溝は「２の坪」と想定３の坪の間にあり、傾きは本里以東の地割りとほぼ一致する。

白石平野の条里ないし条里的地割りについては、未解決の問題が山積みしていると言わざるを得ない。また調査者の怠慢から未見資料も数多いと思われる。こうした点に反省し、今後資

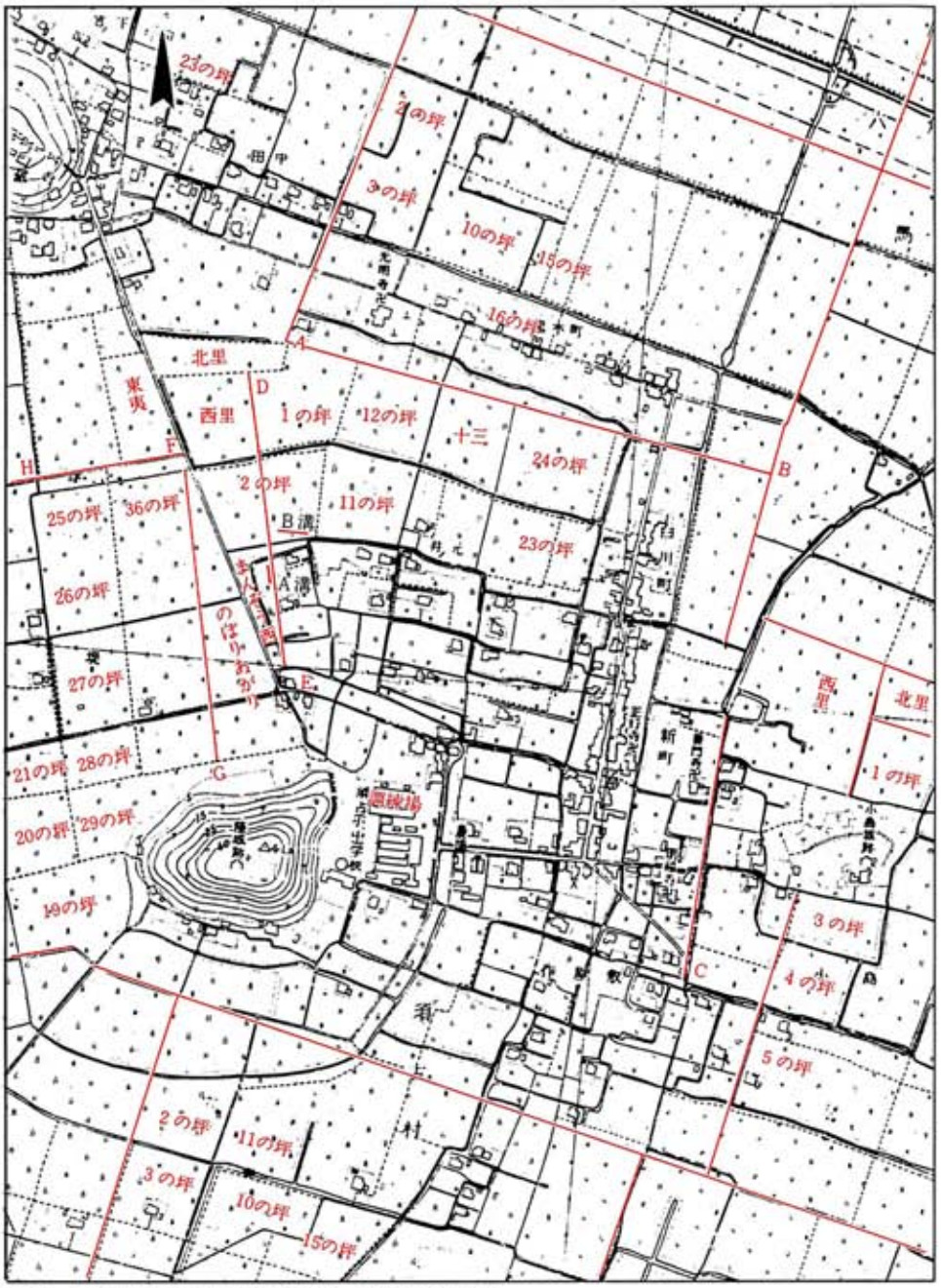


図42　堤地区遺称及び里界復元図　（1：10,000）

資料の蓄積を図っていきたい。

註1　日野尚志「変形・変則条里について――佐賀平野の場合――」『条里制の諸問題Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1983

註2　須古城（隆城）は杵島山地東麓の平坦地に所在する独立丘陵（標高42m）上に築かれた平山城。平安時代後期、三根郡綾部庄に土着した藤原氏（綾部氏）の子孫、日向太郎は、平治元（1159）年冬反乱を起したが、平氏により討たれた。その後仁治元（1240）年日向太郎の裔、綾部五郎通益は鎌倉幕府により白石郷の地頭職に補され、姓を白石と改めた。高岳城を居城とし、支城として北に妻山城、南に稲佐城・室島城を築き白石地方を支配したと伝える。その後白石氏は妻山城へ、次いで嬉野に移り、同じ天文年間（1532～1554）にこの地に移ってきた平井次郎経治がこの須古城を本拠とした。また杵島と小島の丘陵上に支城を築いた。当時有馬勢に加担していた平井氏は、その後4度にわたり龍造寺氏によって攻められ、天正2（1574）年12月終に落城する。落城後、龍造寺隆信は隠栖する名目で高城を修築し、天正4（1576）年頃完成したが、天正12（1584）年隆信が島原で戦死した後、鍋島氏の藩政期には、隆信の弟信周を初代とする須古邑主の居城となった（『白石町史』より要約）。

註3　九州農政局計画部・佐賀県農林部『白石平野の地下水』　1960　など。

註4　湯崎東遺跡については、圃場整備事業に際して、遺物が多量に散布している良好な畑地が存在することから、工事着手予定の4年前に農林部より協議があり、昭和59年度に確認調査を実施した。その結果、古墳時代を主体とする弥生時代～近世の遺物及び遺構が検出された（『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書4』佐賀県教育委員会　1986）。これに基づき、白石町教育委員会が昭和62年度に1年目の調査に着手した。

註5　多田遺跡については、昭和30年に梅林寺を中心とする地域の水田及び用水路から古墳～平安時代の土器が多量に出土し、集落跡として知られていた。昭和63年度圃場整備事業に先立ち、昭和62年度に確認調査を実施した結果、古墳～平安時代の遺構・遺物包含層が確認された。

註6　九州経済調査協会『六角川流域の灌漑構造――農業生産力構造と水（河川）豊度――』六角川水利現況調査報告書　1965

Ⅴ．昭和61年度発掘調査の概要

1．立花遺跡
2．江口四本松遺跡
3．中津隈四本松遺跡
4．田島一本松遺跡
5．船石遺跡
6．石動遺跡群
7．中園遺跡
8．吉野ヶ里遺跡
9．志波屋二ノ坪遺跡
10．的小渕遺跡12区
11．柴尾遺跡
12．川崎遺跡
13．泉三本栗遺跡
14．太田本村遺跡Ⅰ区
15．畑田遺跡
16．池上二本松遺跡
17．みやこ遺跡
18．茂手遺跡
19．小野原遺跡
20．北田遺跡
21．古館遺跡射手塚
22．吉村遺跡
23．隆城跡
24．辻遺跡
25．馬立場遺跡
26．稗田遺跡
27．荒崎遺跡
28．吉野ヶ里丘陵遺跡
29．杉籠遺跡
30．太田本村遺跡Ⅱ区

1．立花（たちばな）遺跡（略号：ＳＴＢ）

遺跡の所在地

三養基郡基山町大字園部字立花

調査主体者

基山町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～８月

調査面積

1,000㎡

図43　立花遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

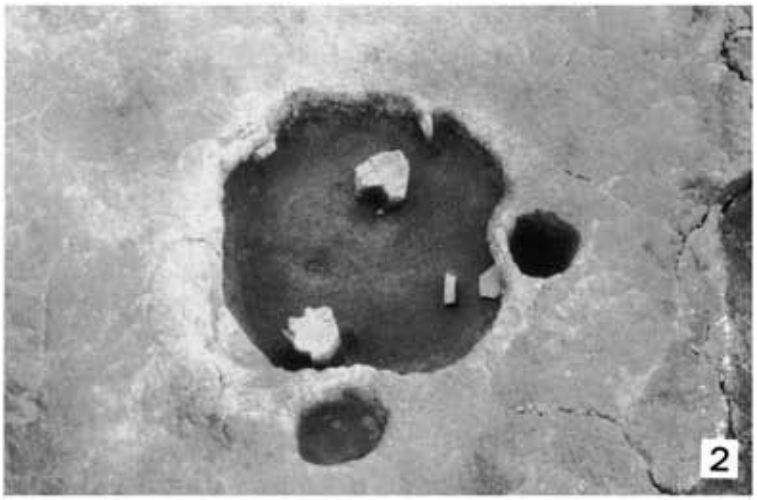
立花遺跡は、基山町の南西部に位置し、杓子ケ峰より東へ延びる丘陵と契山より東へ延びる丘陵に挟まれた扇状地の標高50～54ｍ上に立地する。遺跡の周辺には、杓子ケ峰より延びる丘陵上に亀ノ甲古墳群・鎌浦古墳群・馬場古墳群が、契山から延びる丘陵上に浦田遺跡・黒谷古墳群・水呑古墳群がある。また、付近には条里制の坪名を残す所もある。

調査は、水路によって掘削を受ける部分とその他で削平を受ける部分について実施した。

検出した遺構は、縄文時代後～晩期・古墳時代後期～奈良・平安時代の土坑・井戸・溝・小穴群である。遺構は、水田の耕作や造成時における削平を受けており残りの状態が悪かった。また、遺構の多くが切り合っており、その関係を把握するのが困難であった。土坑は、12基を検出したがほとんど平安時代のものである。土坑の形状は、ほとんどが不整形でその性格を摑めるものはなかった。井戸は、１基検出した。平面の形状は円形で、径約1.2ｍ、深さ約2.5ｍである。井戸枠などの施設はなかったが、内部より土師器の坏片、瓦片が出土した。溝は、調査区の南東側より東西に走るものを１条検出した。溝の断面は逆台形状である。小穴群には、掘立柱建造物として並ぶものは確認できなかった。

遺物は、縄文時代後～晩期の粗製深鉢形土器・黒色研磨土器・黒曜石製石器類、古墳時代や奈良・平安時代の土師器小皿・坏・鉢・甕・壺・手捏土器、須恵器の坏・甕が得られた。ほかには青磁・白磁片も得られた。遺物の多くは、古墳時代や奈良・平安時代のものである。

本遺跡は、縄文時代・古墳時代および奈良～平安時代の複合遺跡であるが、主体は奈良～平安時代にある。また、本町において資料的に僅少な縄文時代の遺構・遺物の出土は貴重である。



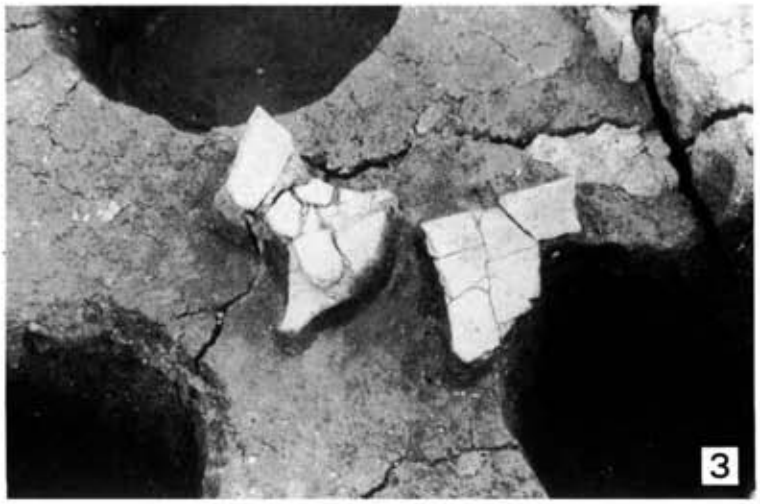


図44

1.立花遺跡全景
（南から）
2.縄文時代土坑
3.縄文土器出土状況

2．江口四本松遺跡（略号：ＥＧＣ）

遺跡の所在地

三養基郡北茂安町大字江口字四本松

調査主体者

北茂安町教育委員会

調査期間

昭和61年８月

調査面積

700㎡

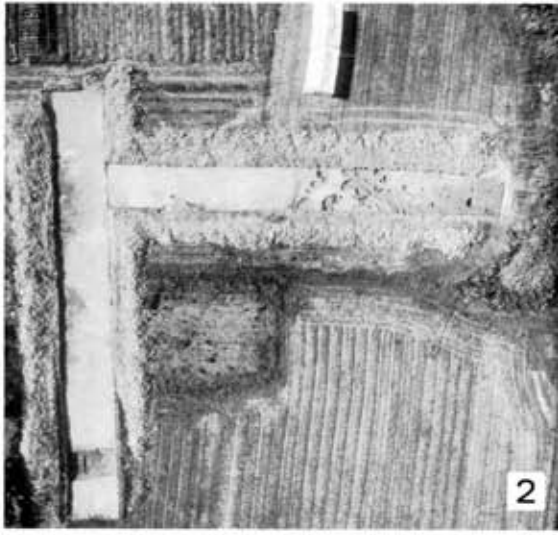
遺跡の概要

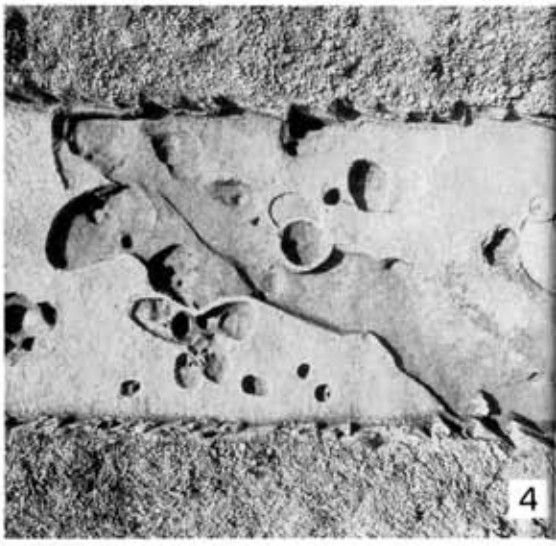
図45　江口四本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

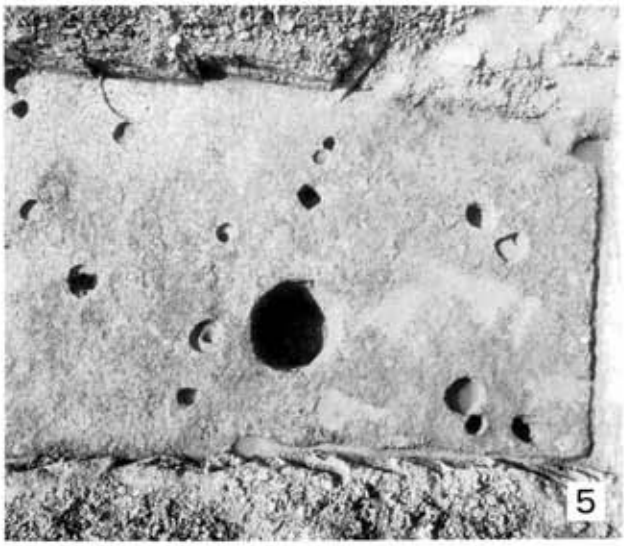
江口四本松遺跡は、筑後川水系の寒水川西岸にあたる標高４ｍに満たない低平な水田地帯に位置する遺跡である。現集落の東辺にあたり、その東を流れる寒水川まで約200ｍと近い。現況は削平されて殆ど平坦であるが、旧地形は自然堤防の微高地であったと推定される。調査区の北方約100ｍには「大屋敷」と俗称される70×100ｍの近世の環濠住居跡があり、その中に「山伏塚」といわれる小塚がある。工事の際に立会調査した結果、盛土上の近世墓であった。既に改葬されたあとで、おそらく「大屋敷」に関係するものであろう。

今回の調査区では、弥生時代～中世の井戸１基、溝２条、その他土坑および小穴多数が検出された。ＳＥ001井戸は素掘りの円形井戸である。径1.2ｍ、深さ0.8ｍで、時期は弥生中期である。３条の溝のうちＳＤ003溝は西北から東南に流れ、幅約1.4ｍ、深さ0.2～0.3ｍと比較的浅い弥生中期のものである。またＳＤ022溝は発掘区南端を東西に走る大規模な溝で、幅3.2ｍ・深さ0.75ｍ。埋土中から古墳時代の土師器が１点出土したが、調査が一部分のため正確な時期や全体の規模は不明である。土坑は円形もしくは不整楕円形が多く、大部分は残りが浅い。ＳＫ016土坑は1.9×0.8ｍ、深さ0.3ｍの隅丸長方形に近い掘形で、土坑墓の可能性があるが、他の土坑はいずれも埋土中から殆ど土器が出土せず、時期・性格がはっきりしない。これらの遺構は主に調査区の東側に偏っており、西方の現集落との間に僅かな凹地帯が存在する。

今回の調査区は弥生時代～中世の集落の一部と思われるが、その範囲は狭く少なくとも集落の中心部からかなりはずれている感が強い。







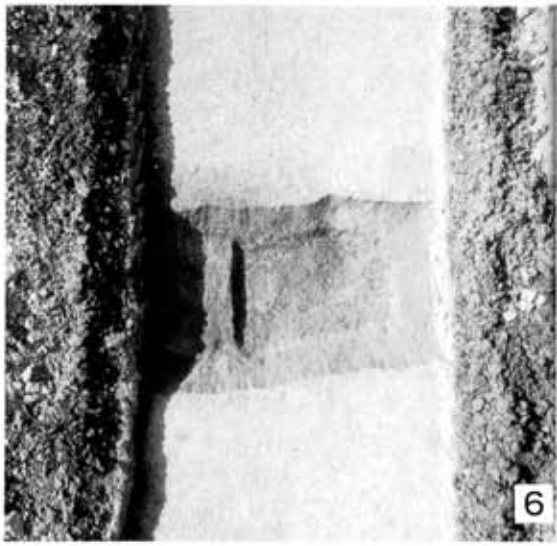


図46　1．江口四本松遺跡全景（南から）
2．調査区全景
3．調査区東西水路部
4．SD003溝周辺
5．SE001井戸周辺
6．SD002溝

3．中津隈四本松遺跡（略号：ＮＴＹ）

遺跡の所在地

三養基郡北茂安町大字中津隈字四本松

調査主体者

北茂安町教育委員会

調査期間

昭和61年７月

調査面積

300㎡

遺跡の概要

図47　中津隈四本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

中津隈四本松遺跡は、北茂安町大字中津隈字四本松に位置する。三根町の田島一本松遺跡[註]と町境を接し、本来、同一の遺跡とすべきものである。筑後川水系の寒水川右岸にあたる標高３～４ｍの低平な水田地帯に立地する。本来は僅かな微高地であったかと思われるが、寒水川の氾濫による土砂の堆積や耕作などによる平地化が進み、現況は比高差の殆どない平坦地である。周辺は、遺跡の存在が希薄な地域で、周知の遺跡としては僅かに東南方の寒水川自然堤防上に立地する中世の西寄遺跡・江口五本松遺跡などがあるに過ぎない。

掘削される水路予定部について調査を行った結果、弥生時代・中世の遺構・遺物を検出したが、遺構の密度はうすく、明確な遺構としては僅かに溝１条と土坑１基が検出されたにすぎない。また、遺物の出土も非常に少なかった。

ＳＤ001溝は、幅約１ｍ、深さ約0.2ｍの東西溝である。その南側には直線に掘られた現水路があり三根町との町境をなしているが、本来、この水路が地割りをなしていたのではないかと推定される。この溝の埋没時期は中世と考えられる。

ＳＫ002土坑は、径約2.0ｍ、深さ約0.6ｍの土坑で、ＳＤ001溝によって切られている。その性格については不明であるが、時期は弥生時代中期初頭と考えられる。

本遺跡は、隣接する田島一本松遺跡と同様に遺構・遺物ともに非常に乏しく、近辺に集落の存在が予想されるものの、その主体部からは離れていると推測される。

註　本書Ｐ.54

図48

1．中津隈四本松遺跡調査区全景（西から）
2．調査区全景（東から）
3．SD003・004溝

4．田島一本松遺跡（略号：ＴＩＭ）

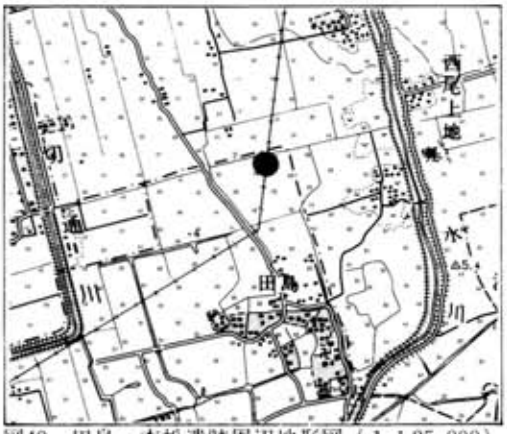


図49　田島一本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

遺跡の所在地

三養基郡三根町大字西島字一本松

調査主体者

三根町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～８月

調査面積

400㎡

遺跡の概要

田島一本松遺跡[註1]は三根町大字西島字一本松に位置する。北茂安町の中津隈四本松遺跡[註2]と町境で接し、本来、同一のものとして把えるべき遺跡である。近辺にはこれまで周知の遺跡はなく、前年度の確認調査で小穴などが検出されて発見された。立地は標高約3.8ｍの低平な水田地帯で、筑後川水系の寒水川西岸にあたる。旧地形ではわずかな微高地部であった可能性はあるが、たび重なる洪水および削平などにより遺構面は殆ど平坦で、周辺と目立った差はない。

発掘調査の結果、土坑４基・溝２条が検出されたが、遺構の密度は極めてうすく、また出土遺物も少量である。ＳＫ001土坑は2.2×1.6ｍ、深さ0.45ｍの楕円形土坑である。弥生中期中頃の土器片が埋土中から出土したが、流れ込みの可能性もあって時期は特定できない。遺構の性格は不明である。土坑は他に３基（ＳＫ004～ＳＫ006土坑）あるが、削平されたこともあって残りが浅く、時期・性格などは不明である。溝２条のうち、ＳＤ002溝は幅0.5ｍ、深さ0.1ｍで東北－西南方向にはしり、またＳＤ003溝はほぼ南北に流れる幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの溝である。いずれも削平により浅く、２条とも埋土中から弥生中期中頃の土器片が出土したが、やはり時期ははっきりしない。

遺物は弥生中期中頃の土器片のほか、敲石１点、古墳時代前期の坩破片、および須恵器片が出土している。

本遺跡は、近辺に集落の存在が予想されるものの、これと接する中津隈四本松遺跡と合わせてみても遺構の密度および種類は限られており、せいぜい集落縁辺部の何らかの遺構群であって、その範囲も狭いと予想される。

註１　田平徳栄「田島一本松遺跡」『本分遺跡』三根町文化財調査報告書第４集　1987

註２　本書Ｐ.52

図50　1．田島一本松遺跡調査区全景（東から）
2．SK001土坑

5．船石遺跡（略号：ＦＮＩ）

遺跡の所在

三養基郡上峰村大字堤字一本谷

調査主体者

上峰村教育委員会

調査期間

昭和61年４月～11月

調査面積

6,500㎡

遺跡の概要

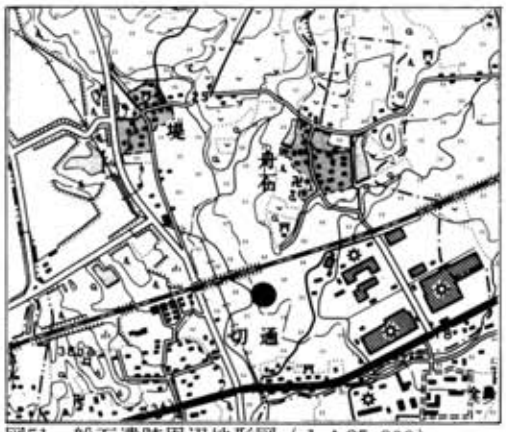


図51　船石遺跡周辺地形図（１：25,000）

船石遺跡は、上峰村北部、脊振山系から派生する標高15ｍ付近の段丘上に立地している。遺跡の北方には、昭和57年度調査された船石遺跡１区があり、支石墓・土器棺墓・古墳等が検出され、蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛など貴重な遺物が出土している。また、遺跡の東隣には、昭和60年度調査で土器棺墓530基・土坑墓49基・石棺墓３基などが検出された船石南遺跡がある。

調査は圃場整備事業に伴い、削平される部分の東側を２区、西側を３区、小排水路設置により削平される部分を４区・５区とした。

２区で検出された遺構は、竪穴住居跡32軒・掘立柱建物跡２棟などで、弥生時代中期から古墳時代のものである。出土遺物は、弥生時代中期から後期にかけての土器を主体として、石斧・石包丁などが多数出土した。

３区では、竪穴住居跡80軒・石棺墓１基・土器棺墓６基・溝１条などが検出され、出土遺物として弥生土器・土師器・須恵器・石斧・石包丁などが出土した。

４区は、竪穴住居跡８軒が検出された。５区については、遺構は検出されなかった。

今回の調査で、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡がほぼ全域にわたって調査され、特に竪穴住居跡は、狭い範囲で重なっており、集落内の社会状況の変化、集落の構成及びその変遷、また、船石南遺跡の墓地との関係について、当時の社会体制を検討するうえで貴重な資料である。今後の研究が期待されている。

註　七田忠昭『船石遺跡』上峰村教育委員会　1983

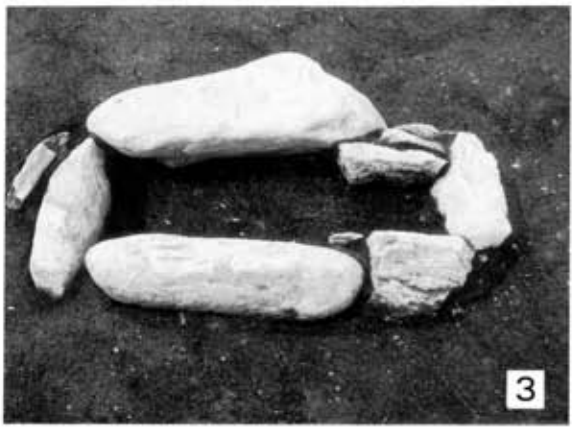


図52

1．船石遺跡２～４区全景
2．船石遺跡３区
3．２区SC220石棺墓
4．２区SH264竪穴住居跡
5．４区SH402・403・404竪穴住居跡

6．石動遺跡群

西石動A遺跡〔略号：ＮＩＮ(Ａ)〕…1
西石動C遺跡〔略号：ＮＩＮ(Ｃ)〕…2
下石動遺跡〔略号：ＳＩＮ〕……3
石動裏田遺跡〔略号：ＩＵＴ〕……4

遺跡の所在地

神埼郡東脊振村大字石動字西二本杉、
三本松、四本杉

調査主体者

東脊振村教育委員会

調査期間

昭和61年４月～昭和62年３月

調査面積

8,000㎡

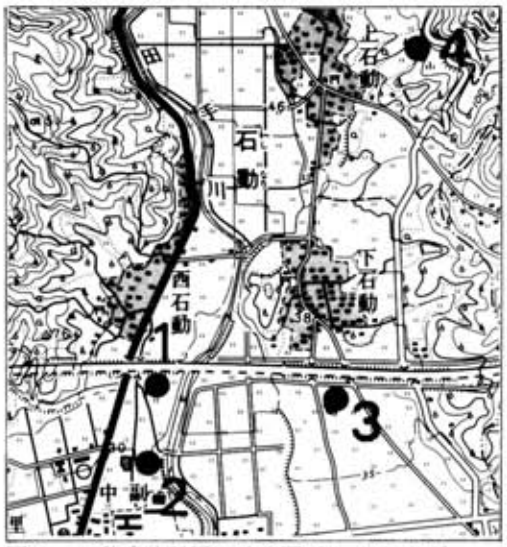


図53　石動遺跡群周辺地形図（１：25,000）

遺跡の概要

石動遺跡群は東脊振村の南部で脊振山地南麓に位置し、村内を流れる田手川によって形成された標高30～60ｍの河岸段丘上に広がる旧石器時代～近世に至る遺跡群である。この内、県営圃場整備に伴って西石動Ａ遺跡・西石動Ｃ遺跡・下石動遺跡を、村営圃場整備に伴って石動裏田遺跡を調査した。調査区は工事区の中の水路部と切土部の予定地を中心に設定した。

西石動Ａ遺跡（大字石動字西二本杉）

弥生時代前期～中期の竪穴住居跡16軒、土坑14基、土器棺墓12基、土坑墓13基、古墳時代中期～後期の竪穴住居跡19軒、溝１条、奈良・平安時代の掘立柱建物跡３棟、溝１条、鎌倉時代の掘立柱建物跡３棟、土坑３基、溝１条、土坑墓２基、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物を多数検出した包含層を２箇所、その他時期の不明な小穴多数を検出した。検出された遺構の密度は非常に高く、各時代の遺構が重なりあって検出された。弥生時代の遺構は北部と南部で多く検出されている。竪穴住居跡は円形で、直径５～８ｍ、壁高50㎝、主柱穴が５～６箇所あり比較的大きい。土坑は南部で部分的に集合して検出されたほかは、ほとんど散在して検出されている。南部で検出された墓地は前期後葉～末のグループと中期前葉のグループとに分けることができ、横断道での調査のさいに検出された墓地が前期末～中期初頭であることと考えあわせると、この付近でのこの時期の集落の変遷をつかむことができる。古墳時代の遺構は調査地区内の各所で検出されているが、とくに南部では密集しており重なりあっている遺構もある。竪穴住居跡は竈を持ち、主柱穴が４箇所のものがほとんどである。奈良・平安時代の遺構は北部と中部で多く検出されている。

西石動C遺跡（大字石動字西二本杉）

西石動A遺跡の南端から南に100mの小規模な遺跡で、古墳時代から中世にかけての遺物が出土したが、小穴が数箇所あっただけで明確な遺構は検出できなかった。

下石動遺跡（大字石動字三本松）

九州横断自動車道関係調査地区で検出されたSD226溝の南側の続き部分にあたる奈良～平安時代の溝を3条と、条里地割と方向が同じ中世～近世と考えられる溝を2条、近世～現代の滝を1条検出した。各溝とも出土遺物は少なく、埋土は微砂質、砂質もしくは砂土で、溝があった当時に水の流れがあったようである。これらの溝は集落の周りを画するような溝ではなく、灌漑に関係すると見ることができよう。

石動裏田遺跡（大字石動字四本杉）

調査地区は下石動地区の北方で脊振山地南麓に位置し、目達原段丘の北端にあたる。調査は工事によって破壊される古墳群5基のうち3基（ST001・ST002・ST003古墳）を今年度事業としておこなった。調査した古墳は3基ともに古墳時代後期の横穴式石室を内部主体としたものであったが、この3基はともに墳丘・周溝などの外部施設を大きく壊されていた。

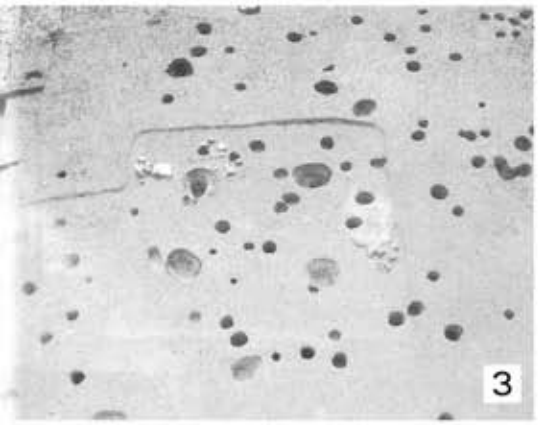
ST001古墳は直径10mの円墳で、横穴式石室は一般に見られる横穴式石室より小型である。石室の大きさは、石室全長6.0m、玄室長2.2m、玄室幅2.0m、玄室残高0.8mとなっている。石室は腰石のみを残して破壊されており、石室構造などは平面形を除いて不明である。出土遺物は前庭部から須恵器・土師器の破片が検出されている。

ST002古墳は石室周辺に若干の墳丘を残す直径約8mの円墳で、横穴式石室は一般に見られるものより小型である。石室の大きさは、石室全長4.2m、玄室長1.9m、玄室幅1.3m、玄室高1.3mとなっている。出土遺物としては、羨道部の床面から須恵器の無蓋高坏を破損された状態で、また玄室の床面からは鉄鏃を検出した。

ST003古墳も石室周辺に若干の墳丘を残す直径8mの円墳で、横穴式石室は玄室がほぼ正方形で羨道が玄室に比べて長く、石室全長4.8m、玄室長1.8m、玄室幅2.0m、玄室残高1.4m・羨道長3.0mとなっている。羨道部から、須恵器の提瓶や鉄鏃が検出された。

今回調査した3基の古墳は外部施設の残存状態は良くなかったが内部主体は比較的に残りが良く、石室構造を考える上では貴重な資料を呈示してくれた。

石動遺跡群調査の内、県営圃場整備に係る調査地区の西石動と下石動では前年度に引き続き九州横断自動車道関係調査地区の隣接部を調査しており、両方の調査成果はこの地区の遺跡を見る上でより重要になった。また、石動裏田遺跡は昭和62年度分の調査結果も興味深いものを見せている。



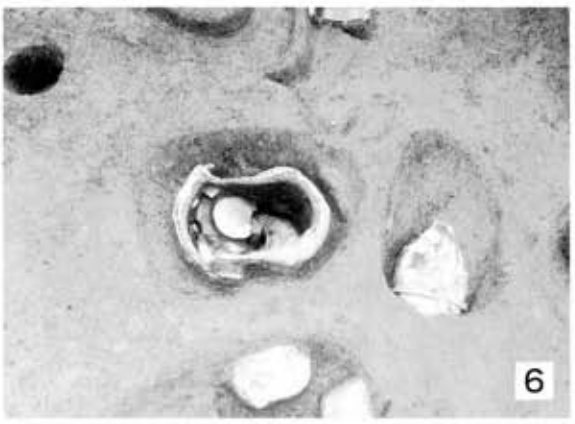


図54　1．西石動A遺跡4～7区全景（南から）
2．西石動A遺跡4区SH301竪穴住居跡
3．西石動A遺跡4区SH296竪穴住居跡
4．西石動A遺跡4区SP223土坑墓
5．西石動A遺跡6区弥生時代墓地
6．西石動A遺跡6区SJ336土器棺墓
7．西石動A遺跡6区SP342土坑墓

図55　1．石動裏田遺跡１区全景　　3．石動裏田遺跡ST001古墳
　　2．石動裏田遺跡ST001･002･003古墳　4．石動裏田遺跡ST003古墳

7．中園（なかぞの）遺跡（略号：ＮＺＯ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字志波屋

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～昭和62年３月

調査面積

2,700㎡

遺跡の概要

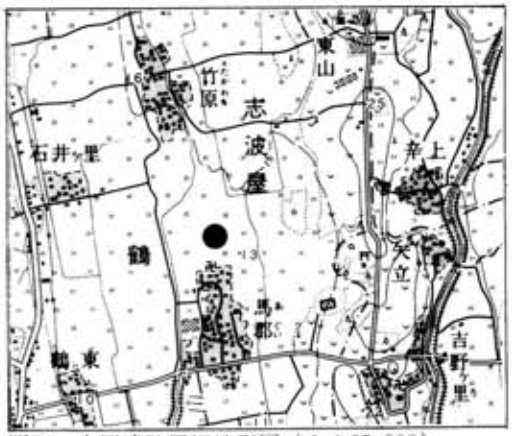


図56　中園遺跡周辺地形図（１：25,000）

中園遺跡は、神埼町東部、三本松川東岸に形成された標高約９～15ｍの低位段丘上に立地する。調査は、遺跡のほぼ中央部を南北に掘削される水路部分を対象に実施した。

遺跡は、古墳時代前期の竪穴住居跡７軒・奈良時代の掘立柱建物跡８棟＋α・柵列２列・土坑25基・井戸７基・溝19条・不明遺構１箇所がある。竪穴住居跡は、調査区南端部に集中して検出され、平面方形５軒・平面長方形２軒である。規模は１辺５ｍ前後である。内部施設としては、ＳＨ019竪穴住居跡よりベッド状遺構を検出した。出土遺物は、すべて古式土師器で、布留式甕・タタキを施す長胴甕・鼓形器台・高坏・鉢などがある。

奈良時代の掘立柱建物跡は、調査区が水路部分のため全体規模を知ることができる建物跡はない。１間分の柱穴列１箇所・１×２間１棟・２間以上×３間・３間以上×４間以上・３間×６間以上・２×２間の規模の建物跡である。その中で、総柱建物跡は３棟存在する。特にＳＢ067掘立柱建物跡は３間以上×４間以上の大規模な建物跡で、ＳＢ076掘立柱建物跡と主軸を合せ南北に並んでいる。更に、柱穴内より「厨鉢」とヘラ描きされた土器が出土しており、建物跡の機能を伺う上で注目される。柵列は、ＳＢ067掘立柱建物跡の南に東西方向に走っており、建物跡主軸方位と平行～直交する方位をもっている。この関係は、ＳＤ048・052溝のような大規模に掘削された溝も同様な位置関係が認められ、これらの主要な遺構は一定の範囲内に相互に関連した一連の施設を形成するものと考えられ、出土遺物の中で、墨書土器・ヘラ描土器・帯金具などが認められることもこの遺跡の性格を知る手掛りとなる。

このように、中園遺跡は古墳時代・奈良時代の遺跡で、特に奈良時代の遺構は、遺跡の南を東西に走る古代官道・「馬郡」地名の存在など、重要な施設の存在を伺わせる内容をもっており今後の詳細な調査が望まれる地区である。

註　緒方祐次郎・八尋実『的小渕遺跡12区・中園遺跡』神埼町文化財調査報告書第14集　神埼町教育委員会　1987

図57
1．中園遺跡調査区全景
2．SH022竪穴住居跡
3．SB049掘立柱建物跡
4．SB067掘立柱建物跡
5．SA061柵列

8．吉野ケ里遺跡（略号：ＹＮＧ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字鶴

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～11月

調査面積

5,000㎡

遺跡の概要

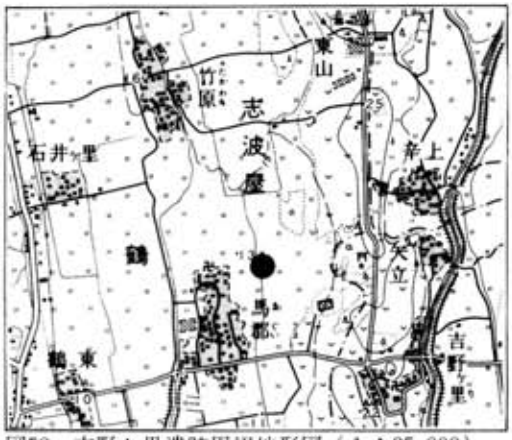


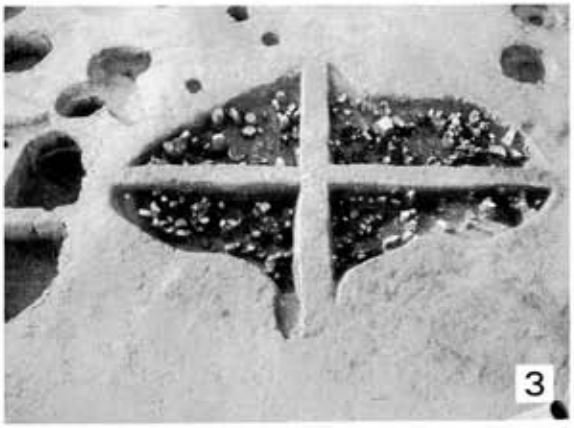
図58　吉野ケ里遺跡周辺地形図（１：25,000）

吉野ケ里遺跡は、馬郡集落と吉野ケ里丘陵の中央部に所在する。遺跡は、三本松川により形成された扇状地の東端の標高９～11ｍの水田部に立地する。周辺には、吉野ケ里遺跡群、馬郡遺跡、中園遺跡などの弥生時代～中世にかけての広汎な集落跡・墳墓跡が分布している。調査は、南側の１区と古代官道推定地周辺の２区とに分けて行った。

１区は官道推定地から南約130ｍの所に位置する。検出した遺構は、掘立柱建物跡17棟、土坑12基、溝33条、柵列１列などを確認した。奈良時代に入るものが大半を占め、調査区の中央に遺構が集中している。建物跡・土坑はＳＤ120溝以南では確認されず、集落の南限となる溝と考えられる。掘立柱建物跡は２×２間の総柱の倉庫跡と３×４間・３×５間など大型の住居跡からなり、建物方位に規則性が見られる。これらの建物跡に接して土坑があり、ＳＫ101土坑からはヘラ描き土器「石井」・「池」が出土した。また、ＳＤ120溝から墨書土器「城」、円面硯などが出土している。出土遺物は、須恵器・土師器の蓋・坏・皿・鉢・高坏・甕と輪羽口、銅滓などがある。

２区は官道推定地の北から南にかけて調査を行い、掘立柱建物跡２棟、土坑墓１基、溝７条、駅路跡と推定される古代道路跡１箇所などを検出した。掘立柱建物跡は２×３間、２×４間の総柱の建物跡で規則性を持っている。土坑墓は平面方形の素掘りで、室町時代の青磁香炉、漆器椀、銅銭の副葬品が出土した。道路跡は東西方向に走り、東は日吉神社北の切通しへ、西は馬郡集落の北側へ延びる。幅約８ｍで南・北に側溝を持っている。北側の溝は幅0.5～0.8ｍと浅く不明瞭である。

以上のように吉野ケ里遺跡は、奈良時代を主体とし官道の南北に規則性を持った掘立柱建物跡が存在している。また、ヘラ描き土器、墨書土器、硯、瓦など特殊な遺物の出土は、この地区に奈良時代の役所的な施設の存在が伺え、貴重な資料を得ることができた。



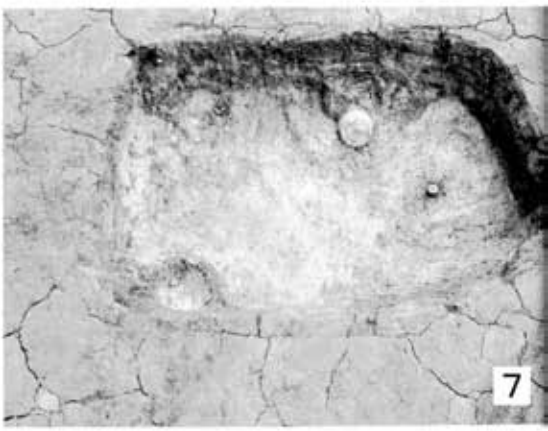


図59 1．吉野ヶ里遺跡1区全景(西から)
2．1区掘立柱建物跡
3．1区土坑
4．2区全景(西から)
5．2区掘立柱建物跡
6．2区道路跡
7．2区土坑墓

9．志波屋二ノ坪遺跡（略号：ＳＮＴ）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字志波屋

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～昭和62年３月

調査面積

7,000㎡

遺跡の概要

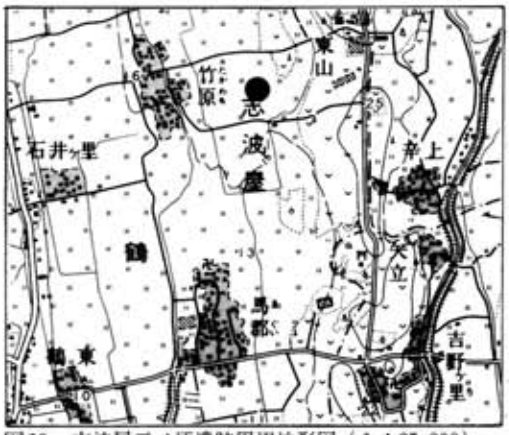


図60　志波屋二ノ坪遺跡周辺地形図（１：25,000）

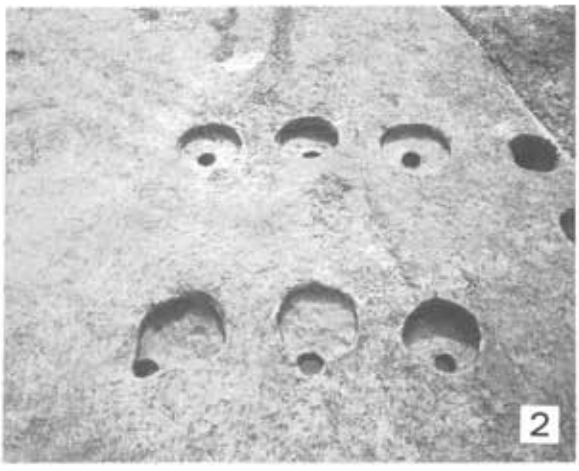
志波屋二ノ坪遺跡は、神埼町東部、三本松川東岸に形成された標高約15ｍの低位段丘上に立地する。中園遺跡の北に分布範囲をもち一部連続する。調査は、水路掘削部分を対象とし11区に分け実施した。

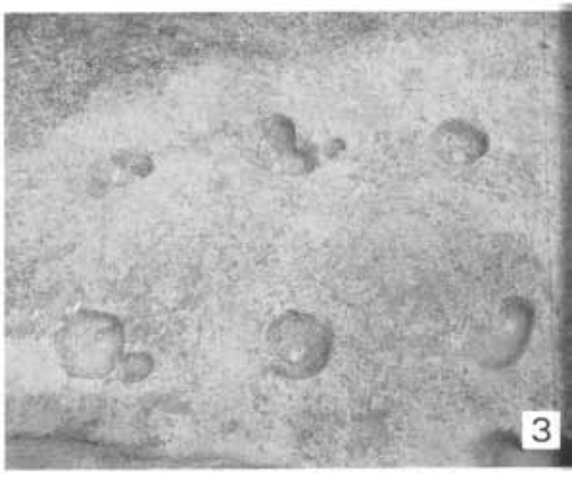
遺跡は、古墳時代後期の溝・井戸と奈良時代の掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝がある。奈良時代の遺構が主体を占めており、掘立柱建物跡は、遺跡のほぼ中央部に位置し中園遺跡と連続する位置関係にある調査区である３区より大型の柱穴が多数検出されたが、調査区幅が狭いため全体規模は不明である。しかし他の建物跡の柱穴規模・形態と比較し非常に大型で密集度が高く、他の調査区の掘立柱建物跡とは様相が異なっている。３区の掘立柱建物跡群南端は、中園遺跡のＳＢ067掘立柱建物跡南で検出されたＳＡ061柵列の延長線上に位置し、これより南には遺構の拡がりは認められなかった。更に、北方の調査区である２区・４区・８区・９区では、明確な遺構は少なく、３区建物跡群は南北約110ｍの範囲を確定できる。土坑は、平面円形・楕円形・長方形などがあり、一部の土坑からは大量の須恵器・土師器の坏・蓋・鉢・皿・甕および鞴羽口が出土した。更に「神人」と書かれた墨書土器・帯金具なども出土しており注目される。全体の調査区では１区・３区・５区に遺構が集中し、これより北部の調査区では非常に少なくなってくる。

以上のように志波屋二ノ坪遺跡は、３区を中心とした大規模な掘立柱建物跡の存在が確認され、１区・４区及び周辺の中園遺跡・志波屋三ノ坪甲遺跡・吉野ケ里遺跡・志波屋四ノ坪遺跡を含めた遺跡群を形成する馬郡・竹原地区一帯の遺構の拡がりの中で検討されなければならないが、非常に重要な地区であることが理解される。

図61

1．志波屋二ノ坪遺跡全景
2．1区掘立柱建物跡
3．1区掘立柱建物跡
4．3区掘立柱建物跡
5．4区溝





10. 的小渕遺跡12区（略号：ＩＷＯ－12）

遺跡の所在地

神埼郡神埼町大字的

調査主体者

神埼町教育委員会

調査期間

昭和61年４月～５月

調査面積

1,500㎡

遺跡の概要

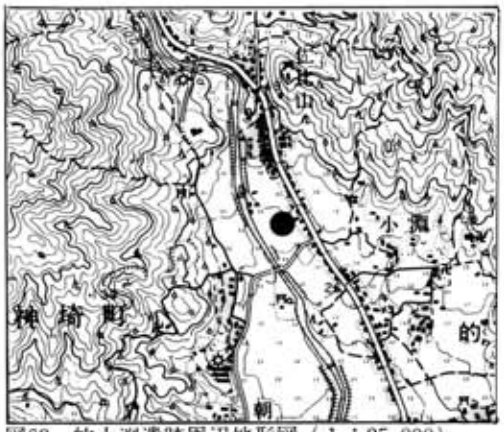


図62　的小渕遺跡周辺地形図（１：25,000）

的小渕遺跡12区は、城原川の東岸で、脊振山系南麓に派生する標高約31ｍの段丘上に立地している。神埼町北部に所在する的遺跡群の１つであり、旧石器時代～中・近世に及ぶ広汎な集落跡・墳墓跡で、総面積136,000㎡に及んでいる。周辺には志波屋六本松遺跡・船塚遺跡・的五本黒木遺跡などが知られている。今回の調査区は、春工事対応工区内として昭和60年度調査地区に隣接し、工事で面削平を受ける1,500㎡について実施した。

調査の結果、鎌倉時代～室町時代にかけての土坑３基、土坑墓１基、溝10条、小穴を検出した。土坑は１辺２ｍ前後の方形のもので、埋土に炭・焼土を含み床面は踏み固まっている。土坑墓は1.5×1.1ｍの平面長方形のもので、土師器小皿、瓦器碗の副葬品がある。他の出土遺物には土師器坏・鉢・鍋と陶器壺、青磁皿・碗がある。

以上のように的小渕遺跡12区は、前年度調査を行い大型の建物群を検出した９区の北側にあたり、中世の集落遺跡を中心とした遺構が存在することがわかった。

註　緒方祐次郎・八尋実『的小渕遺跡12区・中園遺跡』神埼町文化財調査報告書第14集　神埼町教育委員会　1987

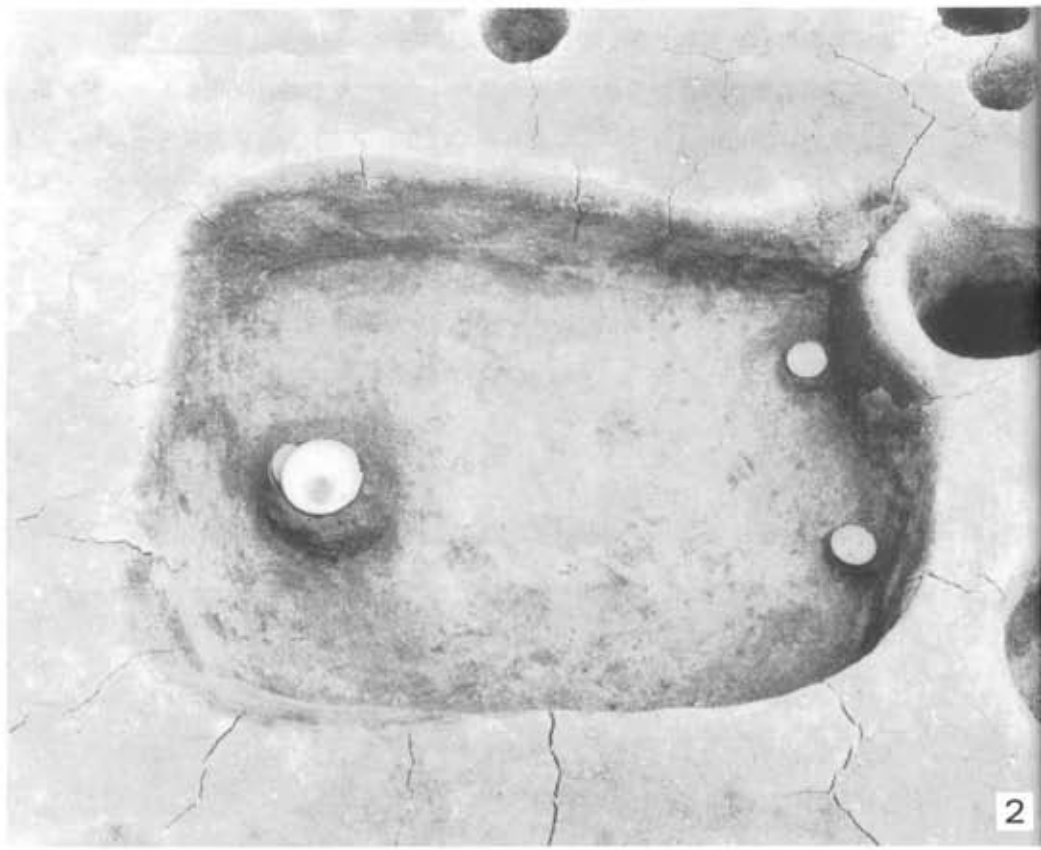


図63　1．的小測遺跡12区全景（西から）
1．SP1208土坑墓

11. 柴尾遺跡（略号：ＳＢＯ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字用作字五本松ほか

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～10月

調査面積

2,300㎡

遺跡の概要

図64　柴尾遺跡周辺地形図（１：25,000）

千代田町は、脊振山系に源を発する城原川・田手川の形成する厚い堆積層がおおう沖積平野に立地する。柴尾遺跡はその南部、城原川左岸の標高３～４ｍの微高地に位置している。遺跡の南側には柴尾橋下流遺跡[註1]、西方には川崎遺跡、北方には下直鳥貝塚など弥生時代～中世にかけてのさまざまな遺跡が点在している。

調査は柴尾集落周辺に大きく広がっている遺跡のうち、掘削を受ける水路部分について実施し、調査区は便宜的に昭和60年度に調査を行った柴尾集落南側地点[註2]をⅠ区、昭和61年度調査を行った柴尾集落西側をⅡ区、北側部分をⅢ区として行い、弥生時代中期～中世までの各時期の遺構・遺物を検出、採集した。

Ⅱ区からは、土坑・貯蔵穴10基、井戸７基、溝５条、不明遺構３基、その他大小の柱穴を検出した。調査区北側・南側は後世に造られたクリークにより削平・攪乱されており、遺構は中央部南側より集中して検出された。遺構の中心は中世で、古墳時代前期の遺構が混る。出土遺物は古式土師器、土師器、瓦器、青白磁の土器類の他、土坑埋土中より貝殻が出土した。

Ⅲ区からは、土坑・貯蔵穴25基、井戸５基、溝６条、不明遺構５基、その他大小の柱穴を検出した。調査区はクリークに隣接しており部分的に削平・攪乱されており中央部は大きく攪乱され、遺構は東西に集中している。遺構の中心は弥生時代後期～古墳時代前期で、中世の遺構が混る。出土遺物は、弥生土器（壺、甕、高坏、器台、土弾）、古式土師器、土師器、瓦器、青白磁碗、皿の土器類の他、石包丁、砥石、凹石、すり石の石器類、中世の木製櫛、曲げ物の容器（桶？）などが出土した。

以上のように柴尾遺跡は長い間営まれた集落跡であり、佐賀平野南部地域の古代史解明に貴重な資料を与えてくれた。

註１　福田義彦『柴尾橋下流遺跡』佐賀市文化財調査報告書第14集　佐賀市教育委員会　1982

註２　堤安信「Ｖ－７　柴尾遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書５』佐賀県文化財調査報告書第85集　佐賀県教育委員会　1987

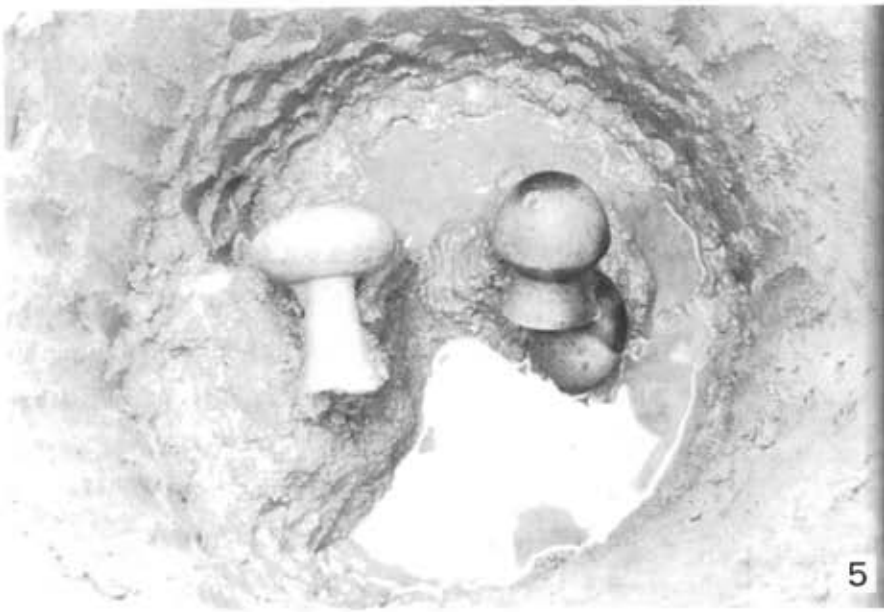


図65　1．柴尾遺跡II区全景（北から）
2．III区全景
3．II区中央部
4．II区SE009井戸
5．II区SK003土坑

12. 川崎遺跡（略号：KWS）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字余江字川一本松

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

昭和61年10月

調査面積

1,400㎡

遺跡の概要

図66　川崎遺跡周辺地形図（１：25,000）

千代田町は、脊振山系に源を発する城原川・田手川の形成する厚い堆積層がおおう沖積平野に位置する。川崎遺跡はその南部、城原川左岸の標高３～４ｍの微高地に位置している。遺跡は古くより知られており、南方には余り江西二本松遺跡[註1]、東には柴尾遺跡[註2]、北方には姉貝塚[註3]、姉遺跡が点在している。

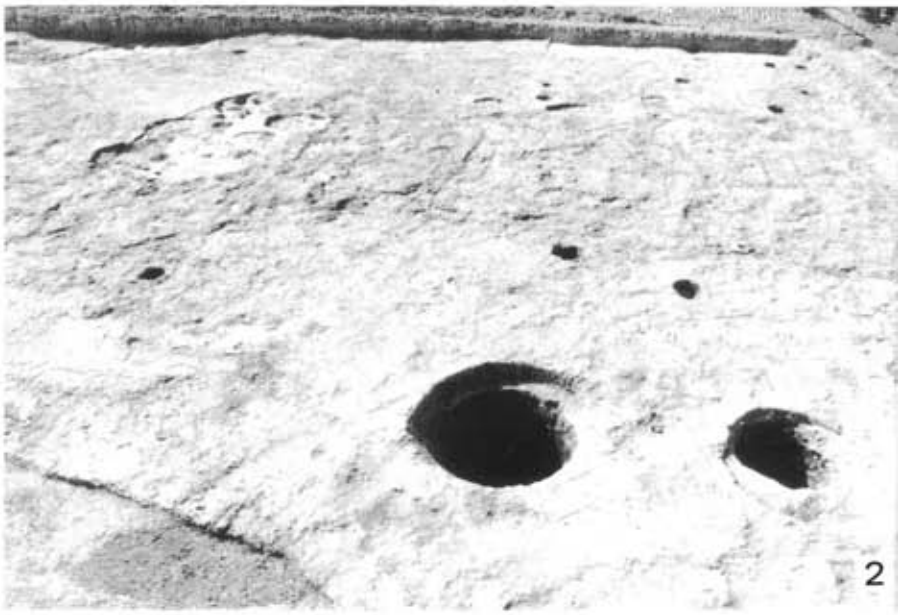
調査区は、川崎遺跡の東端に位置し遺構の数は極端に少ない。検出された遺構は、土坑１基、井戸１基、溝２条、その他不明遺構４基である。遺構の大半は北側へ集中し、土坑、井戸、大小の柱穴は北端に位置する。溝は東西に１条、北北東～南南西へ１条のびており規則性はない。また大小の柱穴も規則的な並びはなく不明である。出土遺物は、弥生時代中期～中世にかけての土器類が出土したが、弥生時代～古墳時代にかけての遺物は埋土中に中世の遺物と混って出土しているものが多く時期を決めるには不明な点が多く、全体的には中世の遺構が中心であるといってよい。

以上概略したように、今回は川崎遺跡の東端の一部を調査したに過ぎず、その全体を把握することができなかった。しかしながらこの遺跡の広がりは、確認調査、また周辺遺跡との関連によりある程度推定することができ、短い時期に営まれた遺跡である事が分り今後遺跡の全容を解明する一端となろう。

註１　昭和62年度農業基盤整備事業に伴い発見された12～13世紀を中心とする生活跡。昭和62年、千代田町教育委員会が発掘調査を行った。

註２　本書Ｐ.70

註３　堤安信『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第３集　千代田町教育委員会　1985



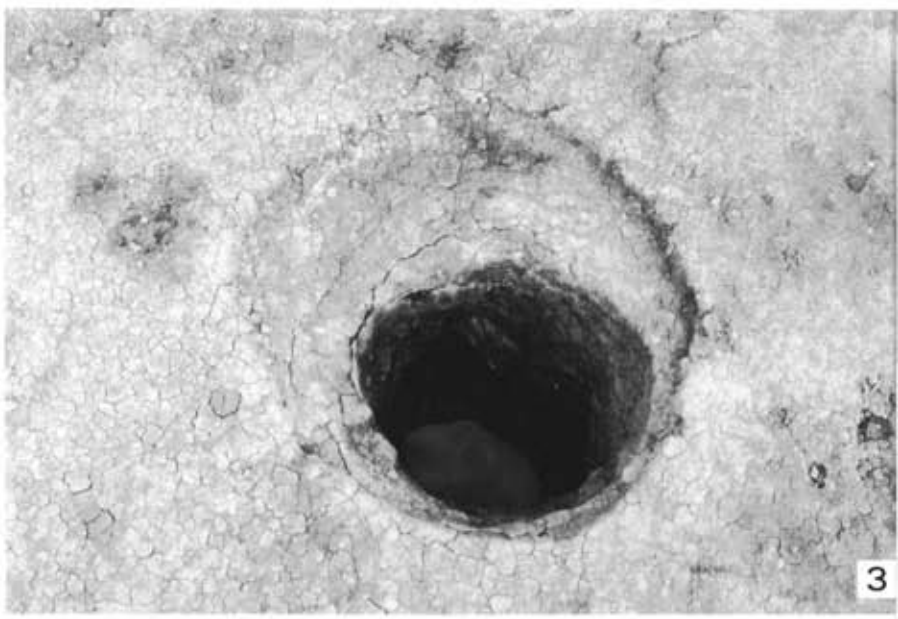


図67

1．川崎遺跡調査区全景
（北から）
2．調査区北側部
3．SE003井戸

13. 泉三本栗遺跡（略号：ＩＺＳ）

遺跡の所在地

佐賀市久保泉町大字下和泉字三本栗

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

昭和61年４月～９月

調査面積

3,600㎡

遺跡の概要

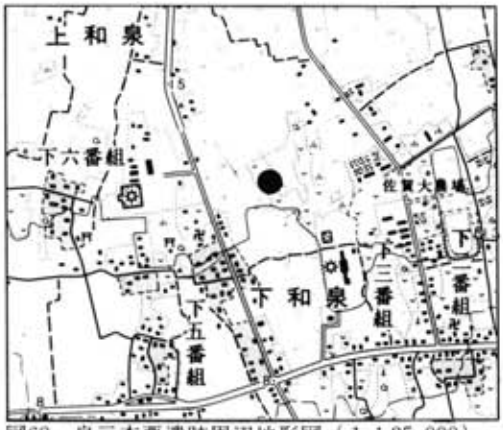


図68　泉三本栗遺跡周辺地形図（１：25,000）

泉三本栗遺跡は佐賀市久保泉町大字下和泉にあって、脊振山南麓部より南に広がる複合扇状地上に立地する。

今回の調査で住居跡７軒、掘立柱建物跡３棟、土坑墓１基や井戸、土坑、小穴、溝など多種多様の遺構を検出した。時期的には弥生時代・古墳時代・中世にわたっている。

弥生時代の主な遺構として住居跡を４軒検出し、内３軒が前期、１軒が中期のものと考えられる。

古墳時代の遺構としては住居跡・掘立柱建物跡・井戸という取合せで、生活をするとして最小限必要な施設ということができる。これらの住居は、周辺の保存部分においてもあと２～３軒程度しか存在しないものと考えられるが、そうなれば５～８軒程度の住居群が当時最小の集団単位となるのではないだろうか。

古墳時代以降数百年の空白があり、平安時代末期に土坑墓、鎌倉期に大型土坑が造られる。土坑墓については墓坑内より多数の土師器とともに銅鏡片、青磁器片、鉄器を検出した。銅鏡取上げ後その直下に薄板が鏡片状に残存しており、墓坑の木蓋の存在とともに鏡片を木蓋の上に置く葬送儀礼を思わせる様相がある。

鎌倉期のものとしては前述大型土坑があるが、これは掘方上面の面積が５～９㎡を測るもので、少なくとも佐賀市内では初現的なものである。性格については特定し難いが、規格性があることや湧水が多いことから、土取り・貯蔵穴的施設ではないようである。特徴を挙げると主軸は、当遺跡が所在する南北に長い低丘陵に直交し、掘方は多少の差こそあれ隅丸長方形を基調としている。また、埋土も淡黒褐色を呈し、遺物はすべてが土器又は陶磁器の細片であるなどである。

以上、調査の概略を箇条書き的に記述したが、詳細については今後周辺の発掘調査を待ち、資料収集後再検討を加えたい。

註　福田義彦『泉三本栗遺跡』佐賀市文化財調査報告書第18集　佐賀市教育委員会　1987

図69

1．泉三本栗遺跡A－Ⅰ区全景
2．A－Ⅱ区全景
3．SP001土坑墓
4．SP001土坑墓
　銅鏡片出土状況

14. 太田本村遺跡Ⅰ区（略号：OHM－Ⅰ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和61年４月～７月

調査面積

800㎡

遺跡の概要

図70　太田本村遺跡周辺地形図（１：25,000）

太田本村遺跡は、諸富町のほぼ中央に位置する太田地区を中心に広がる町内北部地域最大の遺跡である。遺跡の北部には、弥生時代終末の遺跡（太田本村遺跡Ⅱ区）が見られ、東部地区には近世（16世紀後半～18世紀）の墓地及び館跡が見られる。また周辺には、北西部に唐人廟遺跡・畑田遺跡、東部には上大津遺跡、南部には土師村中遺跡・小杭村中遺跡などが見られ、町内の埋蔵文化財集中地域となっている。

遺跡の所在する太田地区は、幕藩時代鍋島氏の五家老となった太田氏の居城「太田城」（近世の平城）が所在する地区で、環濠に囲まれた集落内には、太田氏の氏神を祭った「太田神社」・菩提寺「慈広寺」・密教祈祷所の「宝光院」などが現存するほか、東館・西館・東小路・西小路・北小路・構口・館橋・門前などの通称が遺存している。

調査は、「西館」の西側水田面で実施した。調査地区北・西側には、集落の環濠が廻り、南側は竹林となっている。調査区は、環濠北側から竹林に向って南北に設定した。調査の結果、北側から中央にかけて15世紀～16世紀後半の遺構が見られ、中央部から竹林部分では、古墳時代前期（５世紀）～後期の遺構が集中して見られた。検出した遺構は、溝５条・掘立柱建物跡２戸・井戸14基・土坑24基・土坑墓１基・柱穴多数、である。

北側部分に見られた16世紀後半の溝跡は、南北と東西に延びる溝がＴ字状にほぼ直交し、建物を区画するための溝と考えられ、太田城関係の遺構として注目される。溝内より明朝染付け・白磁・青磁・古唐津などが多数出土した。また調査区南側竹林部分の土坑では、６世紀後半の須恵器と共に大型動物の大腿骨・ミニチュア土器（壺・支脚・鉢）・土製品（勾玉・鏡・人形）が一括で多数出土し古墳時代の祭を考える上で注目される。この他竹林部分では、犬の埋葬が確認された。

註　本書Ｐ.122

図71

1．太田本村遺跡Ⅰ区竹林部
2．遺物出土状況
3．犬の埋葬

15. 畑田（はたけだ）遺跡（略号：ＨＫＤ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂

調査主体者

諸富町教育委員会

調査期間

昭和61年８月～11月

調査面積

2,200㎡

遺跡の概要

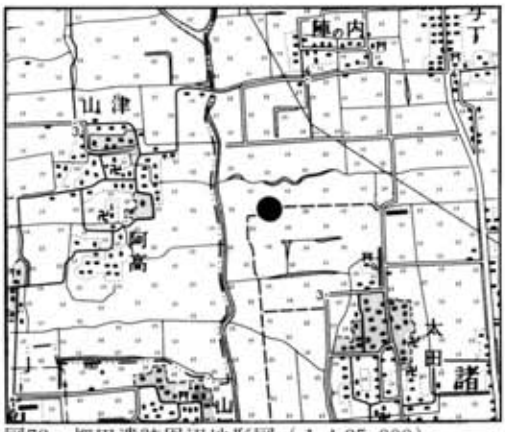


図72　畑田遺跡周辺地形図（１：25,000）

畑田遺跡は、諸富町のほぼ中央を南北に流れる新川東岸の水田面に立地し、標高2.8～2.5ｍと大変低い地域であるが、沖積平野上の微高地で周辺には唐人廟遺跡・太田本村遺跡などが見られる。これらの微高地は、筑後川及びその支流ぞいに多く見られ、当初は、砂洲などから自然堤防上に発達したものと考えられる。遺跡の北限は、陣内地区と太田地区の地区境クリークと考えられるが、クリーク北側には唐人廟遺跡が立地する。調査は、このクリークから200ｍ南へ行った地点で東西約275ｍ・幅８ｍの調査区を設定し実施した。

調査の結果、弥生時代後期終末・古墳時代前期（４世紀～５世紀）～後期（６世紀～７世紀初頭）・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の溝・建物跡・井戸・土坑・柱穴等を多数確認した。遺構は、各時代ごとにほぼ同じ地域に集中して見られる。調査区西端は沼状に落ち込み、４層からなる遺物包含層が見られる。この落ち込みから東へ100ｍ付近までに遺構が集中して見られ、徐々にレベルが下がりながら遺構は減少する。各時代の遺構からは弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器（青磁・白磁）・獣骨・自然遺物等が多数出土した。

特に注目される遺構として、遺跡西付近に見られる土坑が挙げられる。長径2.0ｍ、幅1.0ｍの楕円形の土坑で中央付近に馬の頭蓋骨が見られた。頭蓋骨の脊椎部と先端部に大小の石を置き、人為的な配置が窺える。出土土器が少ないため時期的に不明瞭な点が多いが、奈良時代以降と考えられる。

この他、遺跡西側の溝より円面硯が出土している。円面硯は、これまで県内３遺跡で発見されているが、いずれも国府・郡衙などの中央と関係の深い遺跡で発見されており、町内に大津が設置されていた可能性が更に高くなり注目される。

図73　1．畑田遺跡調査区全景
　　2．中央部建物跡・溝

16. 池上二本松遺跡（略号：ＩＮＭ）

遺跡の所在地

佐賀郡大和町大字池上字二本松

調査主体者

大和町教育委員会

調査期間

昭和61年４月～９月

調査面積

2,200㎡

遺跡の概要

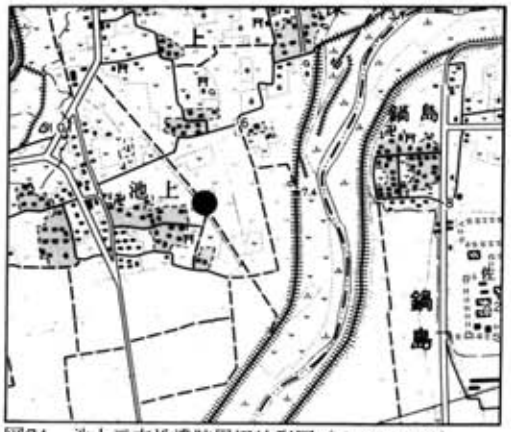


図74　池上二本松遺跡周辺地形図（１：25,000）

池上二本松遺跡は、大和町の南西部、嘉瀬川と東平川に挟まれた標高６～７ｍの畑地および水田に位置する。周辺には弥生時代の生活跡・洗場跡等が検出された久留間遺跡[註1]や久留間カミ塚遺跡[註2]。弥生時代～古墳時代にかけての住居跡と中世の井戸を検出した楢田三本松遺跡や楢田遺跡などがある。古墳時代になると町内に６基ある前方後円墳のうち２基が池上二本松遺跡の周辺にある。１つは全長35ｍの風楽寺前方後円墳、現在は墓地として利用されている。もう１つは、道善寺前方後円墳、全長40ｍを測る。現在町の史跡指定を受けている。事前の確認調査の結果、池上二本松遺跡では弥生時代の土器棺墓群の存在が予測された。

発掘調査の結果、弥生時代の土器棺墓５基・住居跡１軒、古墳時代の住居跡２軒・井戸11基・土坑・小穴群などが検出された。土器棺墓は５基とも合口式で土器棺の埋葬角度はほぼ水平である。弥生時代の住居跡は3.3×4.8ｍで柱穴が２つ、また床面直上から弥生時代中期の甕の口縁と底部が出土した。古墳時代の住居跡は3.3×4.6ｍで柱穴が４つ検出された。もう１つの住居跡は半分以上が調査区外のため計測ができなかった。同じく井戸については、大きな井戸で直径４ｍ前後、小さいもので１ｍ前後である。深さも0.8～1.2ｍ位である。その中でＳＥ306井戸からは曲物が出土した。土坑は多数検出したが、その中でＳＫ209土坑は下場ラインが長方形を呈し、長さ1.37ｍ、幅0.57ｍ、深さ0.64ｍである。このように確認調査の結果では土器棺墓群が予想されていたが、その他にも住居跡や井戸・土坑などが検出された。池上二本松遺跡は墓地だけにとどまらず、生活跡を含めた複合遺跡であり、弥生時代から古墳時代にかけての池上地区の歴史の解明に重要な資料となる。

註１　七田忠志・松尾禎作「久留間遺跡調査概報」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第10輯』佐賀県教育委員会　1951

註２　西田和己ほか『久留間カミ塚遺跡Ａ地点・Ｂ地点』佐賀県文化財調査報告書第63集・第64集　佐賀県教育委員会　1982

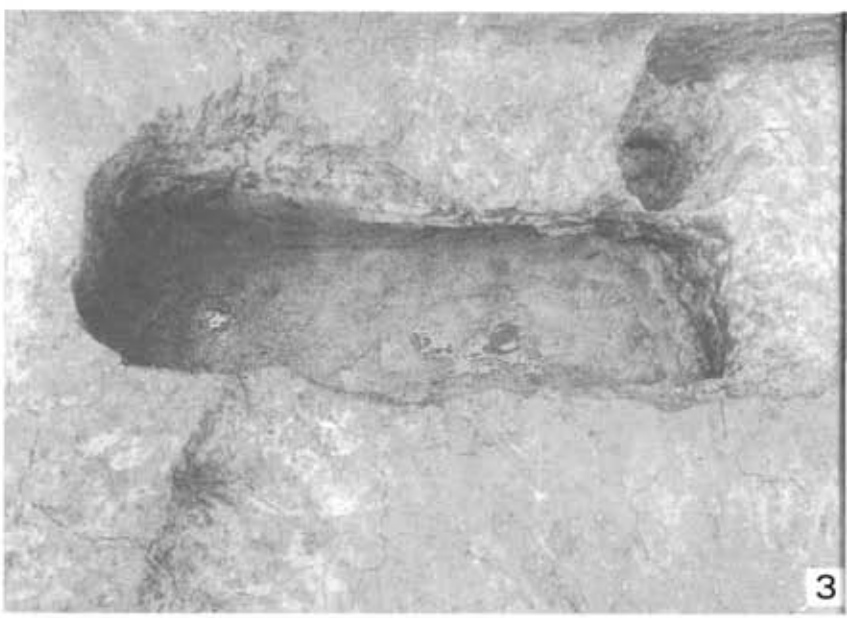


図75

1．池上二本松遺跡
SE305・306井戸
2．SJ18土器棺墓
3．SK209土坑

17. みやこ遺跡（略号：ＭＹＫ）

所在地

武雄市橘町大字大日字郷ノ木

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和61年８月～９月

調査面積

900㎡

遺跡の概要

図76　みやこ遺跡周辺地形図（１：25,000）

みやこ遺跡は潮見山の東側で、六角川の右岸にあり、標高約７ｍの水田及び畑地に存在する。六角川の河川改修工事に先立つ調査では舶載鏡片２面や鉄製の剣・刀などが出土しており[註1]、北隣の茂手遺跡では有鉤銅釧が出土している[註2]。

調査は河川改修の区割に連続させ、11区とした。水路予定地でＬ字形の区割である。河川改修関係のⅢ区東側に位置するため、石棺などの墓地が検出される可能性があった。

調査の結果、弥生時代～中世の集落跡が検出された。遺構は東西水路敷に密集しており、土坑・柱穴を主体としていた。

弥生時代の遺構は土坑を主体としており、土器のほかに石鏃・石斧・石包丁・砥石などが出土した。また、この時代の所産かと考えられるものとして、茂手遺跡・小野原遺跡[註3]で検出したのと同様の礎板及び組合せ横木を検出した。

中世の遺構は土坑・溝及び柱穴で、遺物の出土は少ない。また、遺物のなかには黒色土器や土師器の高台付小皿なども出土しており、平安時代まで遡るものも存在するようである。

このようにみやこ遺跡11区では、土坑及び柱穴を主体とした集落跡を検出したが、調査区は水路予定地で細長い範囲のため、遺構の性格について明確な判断を下すことに問題が残り、また、遺物の整理もほとんど終わっていない。今後、河川改修関係の結果をもとに遺跡の性格などを考慮していきたい。

註１　原田保則編『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集（上巻）　武雄市教育委員会　1986

註２　原田保則編『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集（下巻）　武雄市教育委員会　1986

註３　原田保則『小野原遺跡』武雄市文化財調査報告書第17集　武雄市教育委員会　1987

図77　1．みやこ遺跡11区東西水路（東から）
　　2．11区南北水路（南から）
　　3．P1柱穴

18. 茂手(もて)遺跡（略号：MOD）

所在地

武雄市橘町大字片白字茂手

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和61年９月

調査面積

500㎡

遺跡の概要

図78　茂手遺跡周辺地形図（１：25,000）

茂手遺跡は、六角川の右岸に位置する。現況は標高6.5～７ｍの水田及び畑地である。六角川ぞいに連綿とつづく遺跡群の１つである。南にみやこ・小野原遺跡、対岸に納手遺跡が所在する。昭和53年～59年まで、河川改修工事に伴う発掘調査が行われており、弥生時代から近世までの生活跡が確認されている[註1]。調査は、六角川沿いの水路敷を対象とし、以前の調査区がＸⅠ区まであったので当調査区を12区として実施した。

検出した遺構は、掘立柱建物跡１棟・溝５条その他柱穴である。掘立柱建物跡は、１間×１間で、３つの柱穴には柱痕が残存していた。またＰ35・43でも組合せ横木が出土している。溝では、ＳＤ1204溝（幅0.9～1.3m、深さ0.15m）の覆土より、大量の弥生終末～古式土師器の小片が出土した。他の溝からは、覆土から若干の陶磁器・弥生土器が出土した。

遺物は、前述の溝から出土したものが大半であり壺・甕・高坏・鉢・器台であり、その他に若干の陶磁器片が出土した。

以前の調査で、茂手遺跡からは掘立柱建物跡や有鉤銅釧・鉄鏃が発見されており、今回の調査も、期待は大きかった。調査の結果[註2]、茂手遺跡の中心は、河川改修工事区内にあったと推定され、今回の調査区は、遺跡東端部と考えられる。

註１　Ｐ.82の註２に同じ

註２　Ｐ.82の註３に同じ

図79　茂手遺跡12区（東から）

19. 小野原遺跡（略号：ＯＮＢ）

所在地

武雄市橘町大字大日字小野原

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和61年６月～８月

調査面積

1,400㎡

遺跡の概要

図80　小野原遺跡周辺地形図（１：25,000）

小野原遺跡は、六角川によって開析された南北に長い平野の中央部に立地する。現況は、標高６～７ｍで水田及び畑地である。六角川左岸の低湿地に、南北に長い遺跡である。六角川沿いには、みやこ・茂手の遺跡群が連綿と続き、西に潮見古墳、東におつぼ山神籠石など、当遺跡の周辺には多くの遺跡が存在する。

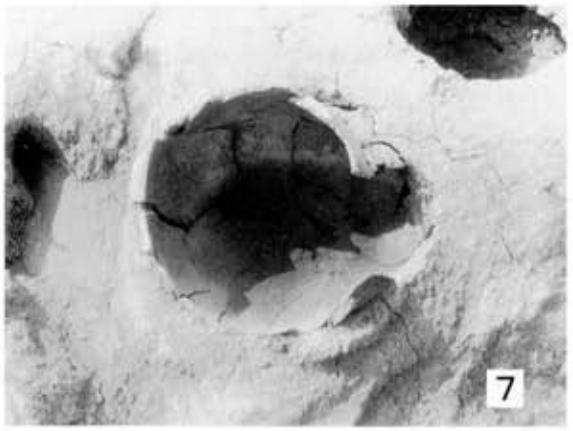
調査は、水路敷となる部分（延長213ｍ）を、西から１～３区と区割して、行った。その結果、掘立柱建物跡６棟、土坑14基、土器棺墓１基、井戸１基などが検出された。また１区の多くの柱穴からは、礎板・組合せ横木といった基礎構造物が出土した。掘立柱建物跡は、１間×１間５棟、１間×２間１棟である。遺構は大半が弥生時代のものであるが、井戸からは、輸入青磁碗が出土した。遺物は、弥生土器の甕・壺・高坏など、石鏃・紡錘車・凹石などの他、滑石製模造品が出土した。

今回の調査区は、水路敷に限られたものであったが、１・２区はみやこ遺跡の東部、３区は小野原遺跡の西北部と考えられる。調査区東側の集落が、小野原遺跡の中心と考えられ、また基盤整備の対象外となっているので、今後十分に保存していきたい。

註　原田保則『小野原遺跡』武雄市文化財調査報告書第17集　武雄市教育委員会　1987

図81　小野原遺跡１区Ｐ９柱穴

図82　1．小野原遺跡１区全景（東から）
2．２区全景（西から）
3．３区南北水路全景（北から）
4．３区東西水路全景（東から）
5．１区Ｐ１柱穴
6．１区Ｐ14柱穴
7．２区SJ212土器棺墓



20. 北田遺跡（略号：ＫＴＤ）

所在地

武雄市東川登町大字袴野字北田

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和61年10月～11月

調査面積

700㎡

遺跡の概要

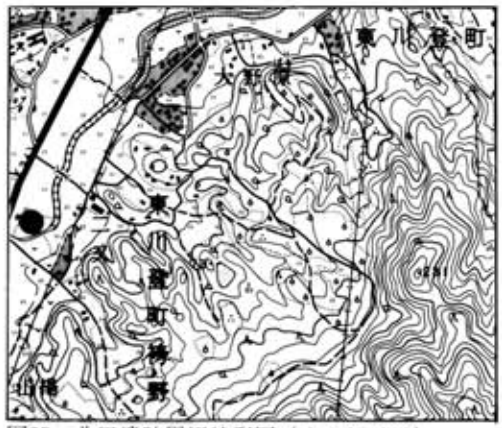


図83　北田遺跡周辺地形図（１：25,000）

北田遺跡[註1]は、六角川と国道34号線が交わる越川橋の東に位置する。現況は、標高24ｍ前後の畑地である。確認調査では、周辺の水田部から遺構・遺物の発見はなかった。

東川登町において、六角川によって開析された谷平野部には、近世以降の集落址が連綿とつながる。周辺の遺跡としては、中世の館跡とされる古館遺跡、寺跡と伝わる吉祥寺遺跡がそれぞれ当遺跡の西および南に所在する。その他、縄文時代の遺跡とされる山揚遺跡が存在するが、当町では縄文時代以後の遺跡が欠落し、中世に再びあらわれる[註2]。

調査は、水路敷及び削平される部分を対象として行い、掘立柱建物跡２棟・土坑１基・集石遺構１基・溝２条・不明遺構５基その他柱穴が検出された。掘立柱建物跡は、２棟ともに１間×１間で調査区北東側で検出された。集石遺構は、皿状に掘りこんだ中に人頭大の栗石が不規則に積まれたものであり、集石中より滑石鍋・須恵質片口・青磁碗が出土した。遺物は、土師器・須恵器・須恵質土器・陶器・磁器・滑石製品等で、特に滑石鍋の破片が多い。

当遺跡は、小柱穴を主体とした遺構であり、建物跡は僅かに確認されたのみであるが、生活址であることは疑いない。その時期は、出土した遺物から室町時代を中心とした年代が考えられる。今回の調査は、当町における初めてのものであった。これからの調査の進展によって、更に資料の蓄積が望まれるところである。

註１　原田保則『小野原遺跡』武雄市文化財調査報告書第17集　武雄市教育委員会　1987

註２　多々良友博編『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』佐賀県教育委員会　1981

21. 古館遺跡射手塚（略号：ＦＩＴ）

所在地

武雄市東川登町大字袴野字大園

調査主体者

武雄市教育委員会

調査期間

昭和61年11月

調査面積

100㎡

遺跡の概要

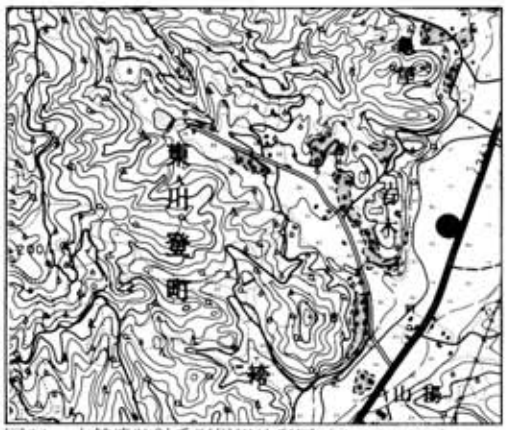


図84　古館遺跡射手塚周辺地形図（１：25,000）

古館遺跡射手塚は、国道34号線と六角川が交差する越川橋より南へ300ｍ下った地点で、国道の西側、標高25.6ｍの水田中に位置する。小字名は大園といい、塚の周辺には小柱穴が昭和60年の確認調査時に検出されている。これは、北にある古館遺跡と同性格（中世館跡）と考えられたため、この地点までを古館遺跡の範囲とした。射手塚は削平されるため、簡単な調査を実施することにした。

塚は平面が楕円形を呈し、南北約５ｍ、東西約４ｍ、高さ約1.2ｍを測る。中位から上は小栗石積みとなっており、東半には宝篋印塔・五輪塔の各部が乱積している。これらの石製塔婆は塚築造後の所産と考えられる。また、これらに混じって陶磁器が若干出土している。

主体部は盛土除去後、北端部で土坑墓を検出した。土坑墓は平面長方形で、長さ1.2ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.15ｍを測る。主軸はほぼ磁北で、幅もやや広いため、頭位は北と考えられる。また、床面には砂利が全面に敷かれていた。副葬品として墓坑の北西端より輸入青磁碗１が出土した。このほか、墓坑の周辺で比較的大型の宝塔一式が出土した。

射手塚の名称は“やぶさめ”で落馬あるいは射損じた者が切腹し、葬られたと伝えられ、古館遺跡射手塚の場合、長崎街道の直線道路を利用して“やぶさめ”が実施されていたことが窺われる。市内ではこのほか武雄神社の参道に射手塚があり、今でも10月23日の武雄供日に“やぶさめ”が実施されている。

古館遺跡射手塚は出土した青磁碗の年代より鎌倉時代後半頃の築造と考えられる。

図85　1．北田遺跡全景
　　2．北田遺跡
　　SX106集石遺構

3．古館遺跡射手塚全景
4．古館遺跡射手塚近景

22. 吉村遺跡（略号：ＹＳＭ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字廿治字吉村

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～８月

調査面積

700㎡

遺跡の概要

図86　吉村遺跡周辺地形図（１：25,000）

吉村遺跡は、杵島平野の中央部、標高２ｍ前後の低平な水田部に立地する。本遺跡の西側一帯は杵島山の東麓にあたり、妻山遺跡、湯崎東遺跡、前方後円墳を含む湯崎古墳群など、弥生～古墳時代の重要な遺跡が多く散布している。吉村集落の周辺では陶磁器類、瓦質・土師質の土器類が出土することから、以前より中近世の集落跡として知られていた。

調査は集落の北側を東西にはしる水路を挟んで実施した。遺構が検出されたのは水路南側の調査地区（約180㎡）であるが土坑２・溝１・不明遺構１とその数は少ない。ＳＫ001土坑は調査区の東北隅にあり、中からは多数の陶磁器・瓦質・土師質の日常雑器、石臼などが出土した。ＳＤ002溝は南北に走る幅約1.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍの細い溝で、陶磁器・瓦質土器などが出土している。ＳＫ003井戸は直径1.0ｍの平面円形の単掘りの井戸で、深さ約0.5ｍで青色粘土に

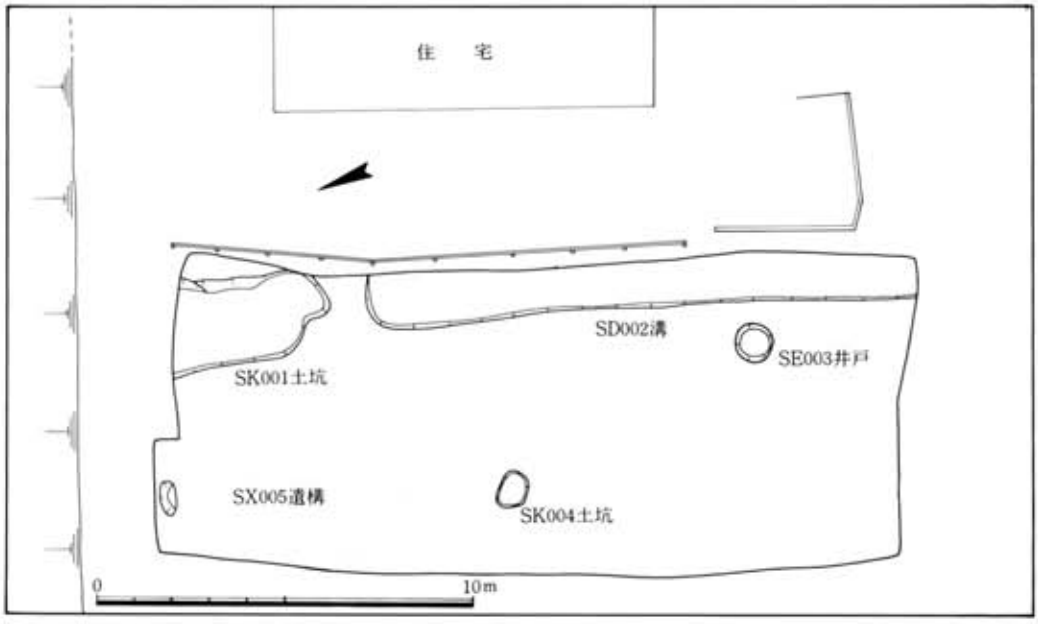
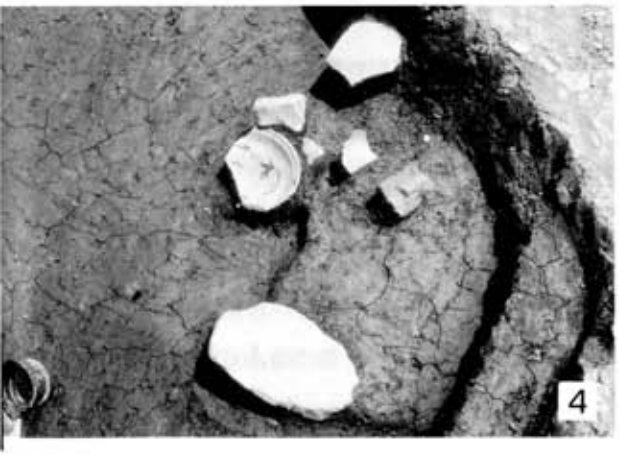


図87　吉村遺跡南側調査区遺構配置図　（１：200）

図88
1．吉村遺跡全景(南から)
2．調査区全景(南から)
3．SD002溝

図89

1．SK001土坑
2～5．SK001土坑遺物出土状況
6．SK003土坑



達する。ＳＫ004土坑は長径1.0ｍ、短径0.8ｍである。ＳＸ005遺構は陶磁器が一括して出土した性格不明の遺構で、ＳＫ001土坑の西側約３ｍにある。出土陶磁器はＳＫ001土坑出土遺物と接合するものがある。

出土遺物の大半はＳＫ001土坑出土のもので、その大部分は伊万里焼・唐津焼の肥前陶磁器である。その他に、中国製・朝鮮製陶磁器、瓦質・土師質土器などがみられる。石製品としては石臼などがある。

陶器（図90～93－１～42）はいずれも唐津焼である。

１～７は碗。１はゴケ底に近い高台をもち、口縁部に鉄釉の口錆を施す。２は腰部の鋭い作行、内外面鉄釉で暗赤褐色を呈すことから天目型の碗と推測される。３は内外面に銅緑釉をかけ、見込みを蛇ノ目状に剝ぎとる。胎土は緻密な精土を使用。４は内外面に淡黄色の釉を施すが、高台周辺及びその内側には暗褐色の鉄錆をかけ分けている。５は深みのある器形で、高台周辺を除いて内外面に黒色の鉄釉を施す。６も深みのある器形であるが、釉の色調は白濁した赤味を呈す。７は皿の可能性が強い。京焼風の卵黄色の釉を施し、見込みに鉄絵山水文、高台内側に判読不可能な刻印がある。

８～15は皿。８は見込みに鉄釉で文様を描く。９は糸切り底をもつ特徴のある皿で、暗褐色を呈する鉄釉を内面と外面の口縁部周辺にだけかける。外面は、体部から底部の広範囲が無釉である。10は内外面オリーブ色の釉の上に乳褐色に発色した釉を流しかけている。見込みには砂目と考えられる痕跡が３箇所にある。完形で口径10.9㎝を測る。11は口縁部がわずかに肥厚し、内側に口錆をめぐらす。釉は灰白色を呈し、高台は三日月高台に近い。胎土目である。12は淡灰白色の釉を見込みの部分のみ蛇ノ目状に剝ぎとり、体部内面に緑色の銅釉を施す。高台周辺は無釉である。胎土には緻密な精土を使用している。13は輪花状の口縁部をもつ。茶褐色の鉄釉を内外面に施すが、見込みは蛇ノ目状に剝ぎとっている。14は器壁の薄い鋭い作りで、内外面全体に灰褐色の釉をかける。13・14ともに胎土は灰色であるが、硬質で磁器にちかい。15は内面が銅緑釉で、見込みを蛇ノ目状に剝ぎとっている。外面は淡灰色釉で、高台内側は無釉である。

16は小型壺である。茶入れとして使用したものであろうか。形態は下膨れの水指しを想わせる。外面に暗緑色の釉、内面体部に灰緑色の釉をかけ分ける。

17・21は香炉・火入れである。17は口径6.7㎝と小型で、体部外面に鉄絵草花文を描き京焼風に仕上げている。21は銅緑釉を用いた刷毛目唐津で、内面及び高台周辺は無釉である。

18は体部から口縁部にかけて袋状に内弯する。見込み及び高台周辺は無釉、口縁周辺は鉄釉で茶褐色を呈す。用途については不明。

19の平底の外面は無釉で、糸切り痕が部分的に認められる。他の箇所は鉄釉で暗小豆色を呈す。見込みに花文状の陰刻を施している。用途については不明。

20は口縁部が直立する小型の鉢で、淡灰褐色の釉を厚くかけている。

22～27は大皿・鉢の類である。22は色調・胎土ともに15と同窯の製品と考えてよい程酷似しており、銅緑釉の見込みを蛇ノ目状に剝ぎとっている。23は絵唐津で、全体に赤味を帯びた釉調に葦と推測される草花文を描く。24は見込み周辺の２条の沈線間に象嵌文を施す三島唐津である。25は淡緑灰色の落ち着いた釉調で、内面に草花文を描く。高台は三日月高台にちかい。26は脚付の鉢であるが、脚は鉢部と別個体である。鉢部は黄褐色の釉で底部はゴケ底風、脚部は削り出し高台の皿を逆にしたもので、見込み周辺は無釉、他の部分は鉄釉で黒褐色を呈す。ともに胎土は緻密な精土を使用している。27は口径35.4㎝の大鉢で、白化粧の刷毛目を施した上に、銅釉と鉄釉を使用した二彩唐津。砂目である。

28・29・31・41・42は甕。28は内面に同心円文の叩き痕をもち、内外面に飴釉を施す。Ｔ字形にちかい口縁上面は釉を剝ぎとる。29も28と同様に口縁上面の釉を剝ぎとる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。31は平底で、体部内面に同心円文、外面はヨコナデで叩きの痕跡を丁寧に消す。41は体部内外面ともに格子目の叩きが残り、体部上位には２条の突帯文を貼付する。Ｔ字形の口縁は内側に突出し、丸味をもつ。42は無頸の甕で外側に折れる口縁部から直接体部へとつづく。釉は口縁部でなく内外面ともに体部から底部に釉す。鉄釉と推測されるが発色が悪い。叩き痕は丁寧にナデ消してある。

30は内面に同心円文をもつ壺。飴釉であろうか、全体にムラが多く色調も白味を帯びる。内面は無釉である。

40は体部と頸部の一部だけであるが、内面に同心円文状の叩き痕をもつ瓶。体部外面には数条の沈線がめぐる。

32・33は片口。32は口縁部がＴ字形で、体部は直線的。鉄釉で内外面ともに暗小豆色を呈する。調整は内外面ともにヨコナデ。33は丸縁の口縁部に内弯する体部がつく。鉄釉で内外面ともに茶褐色であるが、口縁上端は釉を剝ぎとっている。胎土は極めて硬質である。

34～39は擂鉢。点数が少ない割には口縁形態は多様である。共通点は施釉範囲が口縁部周辺に限られること、37を除いて擂目上端が口縁部下の調整でナデ消されていないことなどである。37は僅かであるが、ヨコナデ調整と重なっている擂目上端部分がある。底部には38の平底と39の削り出し高台とがあり、38は糸切り離しのままである。39は後世の貼り付け高台のタイプではなく、通有の鉢・皿の高台と同様のものであることは注目される。

磁器（図94～97－43～77）のうち、43～73はいわゆる伊万里焼、74～76は中国製、77は高麗青磁である。以下この順で説明する。

伊万里焼の種類は染付（43～60）、色絵素地（61・62）、鉄釉地（63・64）、色絵（65）、白磁（66～70）、青磁（71～73）などである。器種は碗、ぐい呑、皿、瓶、仏餉具、蓋、鉢などがみられる。

43～47・52・53は染付碗。43～45は口径9～10cmの丸形碗で、山水文を描く。43・45は高台裏に太明年製の銘がある。46は43～45に比べて口縁部の開きが大きい。いずれも釉は灰色をおび、呉須の色調も暗い。47は体部外面にヘラ彫による竪縞を施した鏑手碗である。52は破片であるが雲龍見込荒磯文。呉須、磁胎ともに灰色をおびる。53は口径14.8cmと碗にしては比較的大型で、扇文を内面に花文を内外面に配している。

48・49はぐい呑。48は端反りの口縁下にコンニャク印判で亀甲文を配している。器壁の薄い丁寧な作行である。49は丸形で外面草文である。

50は仏餉具。数点出土しているが、いずれも脚裾部周辺は無釉。磁胎及び釉の色調は灰色をおび、坏部外面に文様を描いた呉須も暗い。

54・55は瓶。54は草花文を描く。酸化炎のためか呉須、上釉ともに黒色味をおびる。55は長頸瓶で、釉、呉須ともによく発色している。

51・56～60は皿。51・56は高台径が小さいという古い要素をもつ。とくに51はそれが顕著で、内面全体に草花文を描き、青味の強い上釉をかける。57・58はともに口径14cm弱、高台径8.2cmと、口径に比べて高台径の割合が大きい。57の磁胎が灰色をおび、黒色味の強い呉須で内面全体に文様を描く特徴は、嬉野町不動山3号窯跡の製品に酷似する。58は見込みに五弁花文、裏文様には唐草文を描いている。呉須はよく発色しているが、釉ムラが目立つ。59は皿というより鉢と呼称する方が適切かもしれない。見込みを蛇ノ目状に剝ぎとり、内面体部全体に唐草文を淡青色に発色した呉須で描く。畳付の部分は釉を粗く削りとっている。60は高台の復元径が16cmの大皿である。

61の蓋と62の碗は色絵素地と考えられる。61の蓋はつまみの周囲に呉須で草花文を描き、花の部分は色絵付のためにあけてある。62の碗は口縁部内外面、見込み、高台との境周辺に呉須描きの数条の圏線がめぐる。全体に器壁が薄く鋭い作行である。

63の外面は鉄釉で褐色であるが、内面は黄釉と推測される釉薬をかけた後、さらに別種の釉をかけ分けたものか、その部分のみ淡灰緑色をなす。64は高台を除く内外面に化粧土を刷毛塗りし、その後で内面と口縁外面だけに淡灰緑色の釉をかけている。

65は色絵の八角鉢。蛇ノ目に釉を剝ぎとった見込み部分を利用して緑で波文を描き、その周囲三方に黄、赤の二色で花文を配す。呉須は使用していない。裏文様はみられない。上釉は透明な白さでなく、乳白色にちかい。磁胎は軟質である。

66～70は白磁。66は皿か。見込みを蛇ノ目状に剝ぎとり、高台周辺も無釉で全体的に極めて粗雑である。

67は丸形、68は口縁端反りの碗である。いずれも器壁の薄い鋭い作行で、白磁の釉調も優れたものである。

69の小皿は貼り付けで無釉の高台という特徴をもつ。口縁部が輪花状の型押しのベニ皿であ

る。

70のぐい呑は口径6.2cmを測る。端反りの形態は染付の48に酷似する。釉は少し青味をおびている。

71～73は青磁。71は小型の鉢で、磁胎は灰色、青磁釉は淡緑色を呈する。高台畳付は褐色で、鉄足を意識している。

72は型打の丸皿で、見込み一杯に草花文を刻む。磁胎は灰色で、青磁釉は淡青灰色である。高台内側は無釉。中国製の可能性が強い。

73は口縁部輪花の鉢で、復元口径は22.2cmである。見込みを蛇ノ目状に剝ぎ取った後で、二重の波文を刻む。磁胎は白色で、青磁釉は淡緑灰色を呈する。高台を幅広く削り出し、畳付の釉を剝ぎとっている。

74～76は中国製磁器である。74は口禿の白磁か。底部は無釉である。75は青花の皿で、ゴケ底の周囲だけ無釉。76は龍泉窯系青磁碗で、蓮弁文は僅かに鎬を有する。この他に、見込みに「金玉満堂」らしき印や草花文などを刻印する青磁がみられる。

77は高麗青磁で、内外面に丸形の連続文や花弁文の象嵌がみられる。

陶磁器以外の土器（図96・98・99－78～88）のうち、78は土師質の小皿である。糸切りの平底から口縁部まで内弯しながら立ち上がる。口縁部、体部はともにヨコナデで、法量は口径6.3cm、器高2.2cmである。

79・80は瓦質の擂鉢。79は口縁上端が凹む。内面はナデの後で交錯する二重の擂目を施す。擂目は10本で1単位か。80は横方向のハケメの後、荒い擂目を施す。外面の調整はヘラ状工具によるナデである。

81・82は瓦質の羽釜。いずれも球形の体部に直立する短い口縁部がつき、その直下には対の把手を有する。底部と体部の境には強い稜が入る。81は口縁部と鍔部との間に暗文風の三角文を施す。82は口縁下に花文の刻印を施す。

83は瓦質の土鍋と考えられる。破片のため把手は1個しか確認できない。口縁直下の把手上面には2個の小孔を外から内へ穿つ。内外面ナデで、外面には煤が付着している。

84・87は大型の瓦質鉢。84で口径48cm、器高11.2cm、87で口径32.4cm、器高21.2cmを測る。84は体部上位に二方もしくは三方の把手がつく。内面の一部に煤が付着している。

85は火鉢の可能性もあるが、器壁の薄いことから瓦質の焙烙と推測される。特に、底部の作りは薄い。口縁部周辺はヨコナデ、他の部分はナデであるが、部分的にハケメが残る。口径41cmを測る。

86は瓦質の火鉢。口縁下に3条の沈線をめぐらせ、その上に巴文、下に菊花文の刻印を3個1組で上下交互に押す。厚手の口縁径38.7cmである。

88は瓦質の風炉。体部には2箇所に逆ハート形の小孔を穿つ。底部には径4.8cmの脚が3箇

所に付く。脚の中央部分は、径1.2cmの穴が貫通しているため中空となっている。全体にハケメ調整であるが、口縁部と腰部周辺は縦方向、体部外面は横方向、底部は内外面ともに渦巻き状のハケメである。口径36.0cm、器高32.3cmを測る。

以上が吉村遺跡の出土遺物の概要である。遺物の中心をなすのは17世紀後半～18世紀前半の唐津焼・伊万里焼の肥前陶磁器である。この中で気になるのは49のぐい呑で、新しい要素をもっているようであるが、これを混入とみなせれば下限を18世紀前半頃として大過あるまい。

吉村遺跡の性格は、今回の発掘調査が水路の一部分のみと限られた範囲であったため明らかにできなかった。ただＳＫ001土坑出土の遺物には日常容器の他に、茶陶、風炉、茶臼と推測される小型の石臼など一連の茶道具と看做されるものが多いという事実に注意しておきたい。

註　遺物の検討にあたり、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏より多くの御教示を賜った。

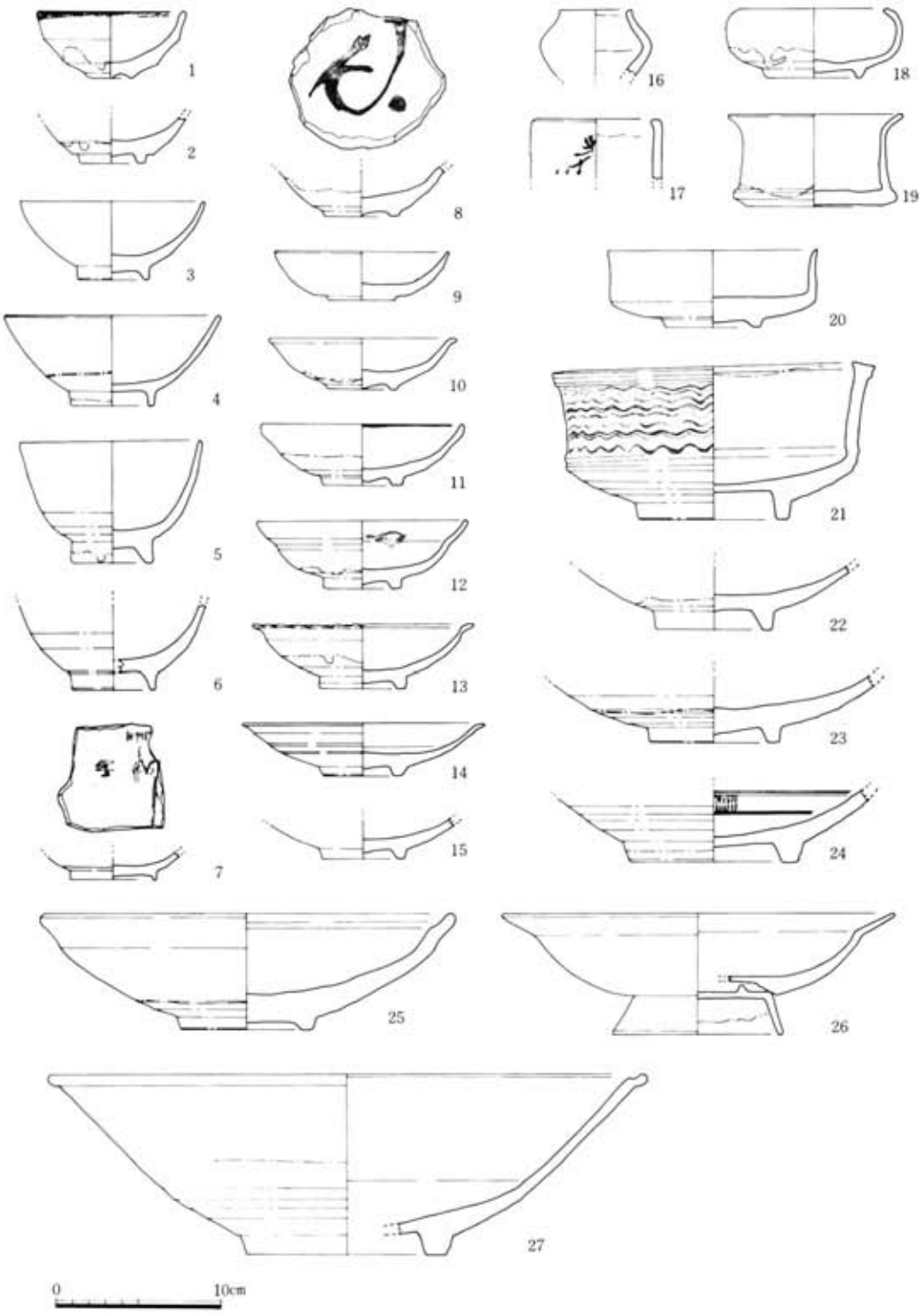
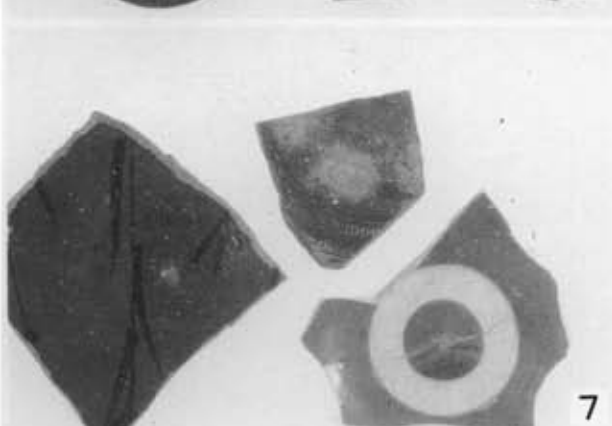


図90　古村遺跡出土遺物実測図(1)



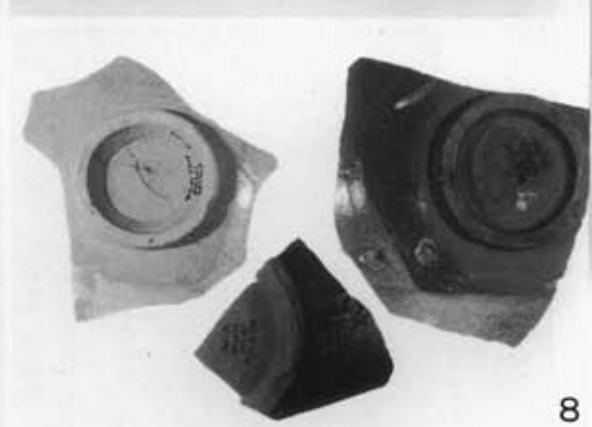


図91　吉村遺跡出土遺物(1)

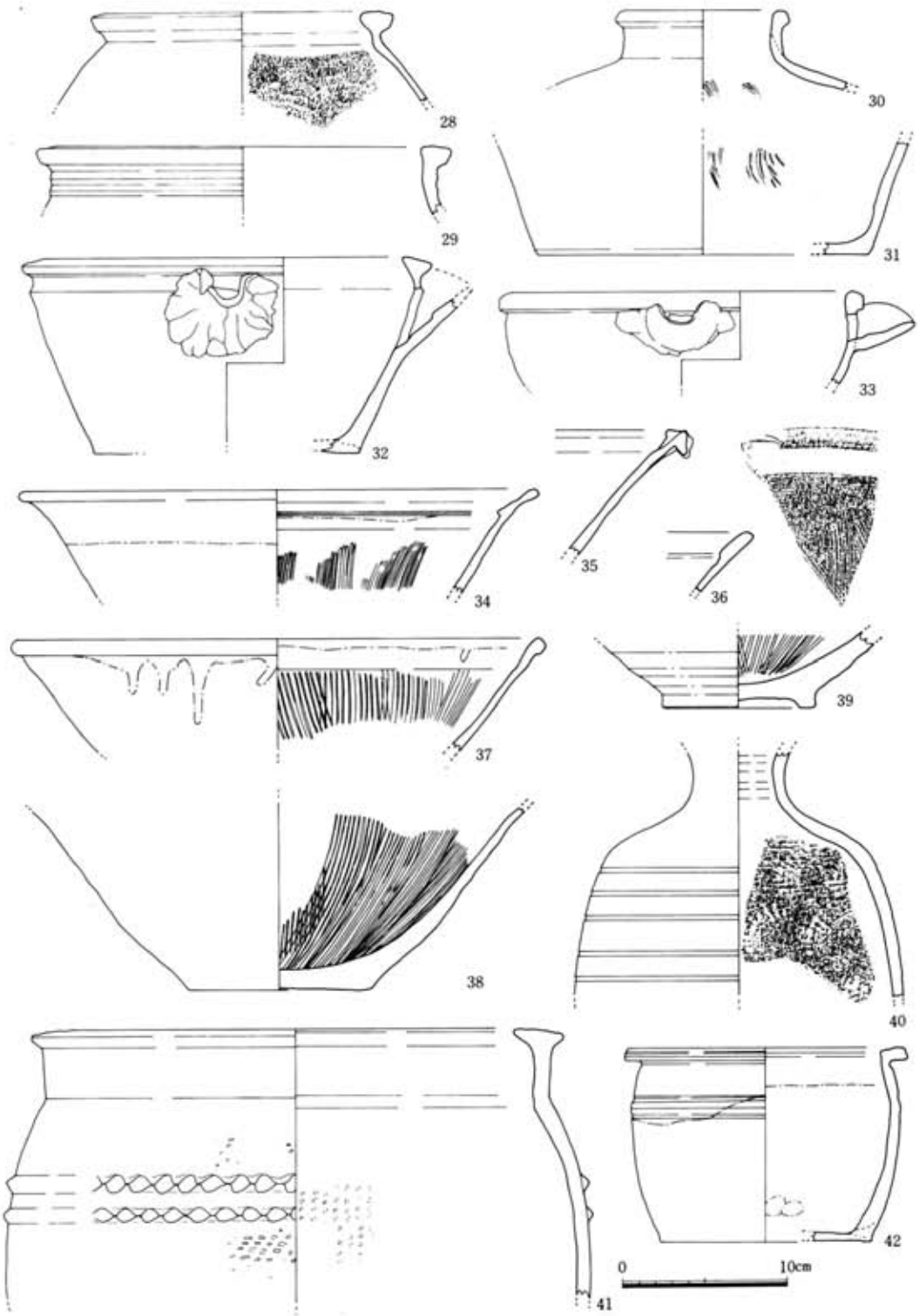


図92　吉村遺跡出土遺物実測図(2)

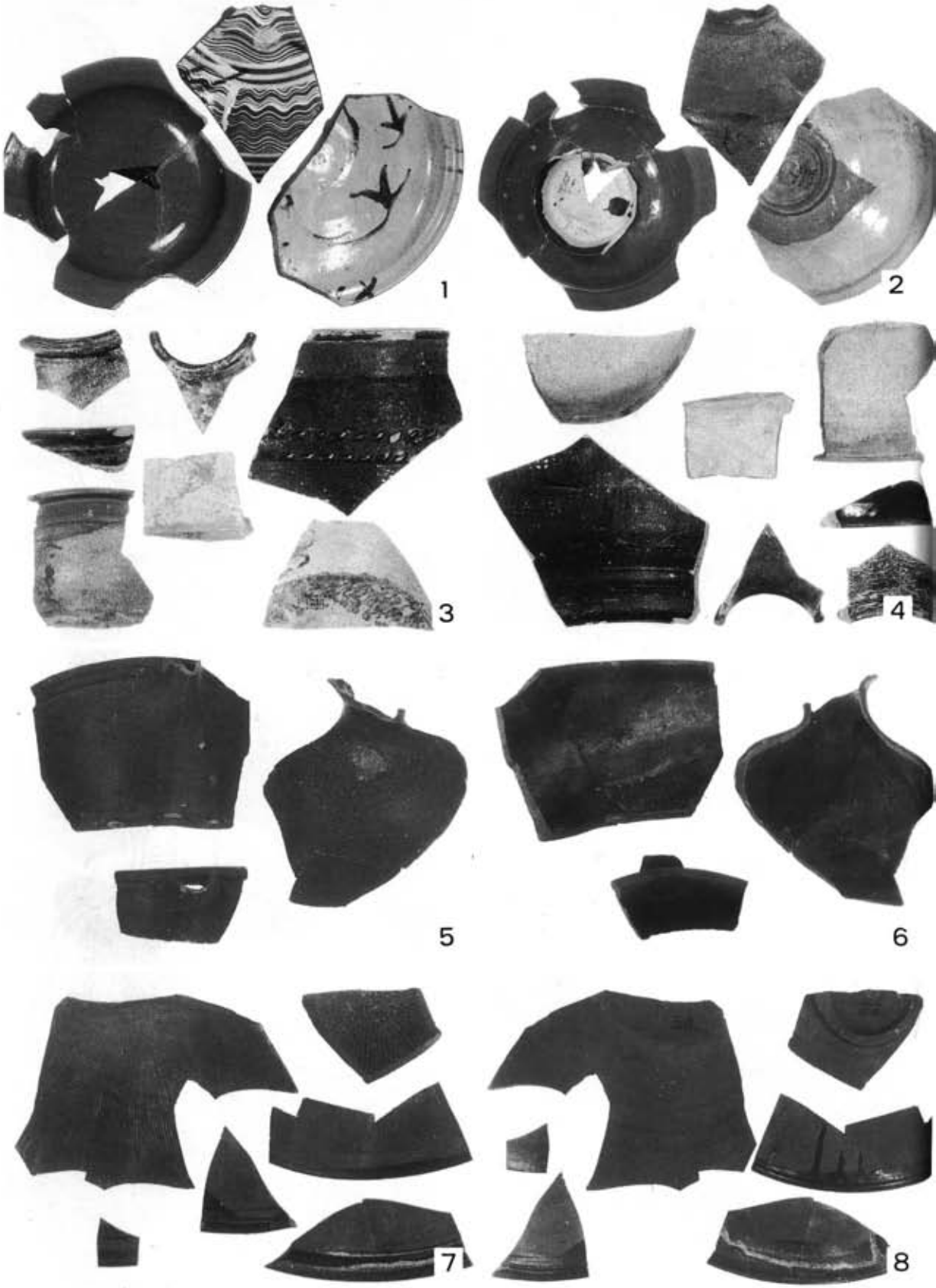


図93　吉村遺跡出土遺物(2)

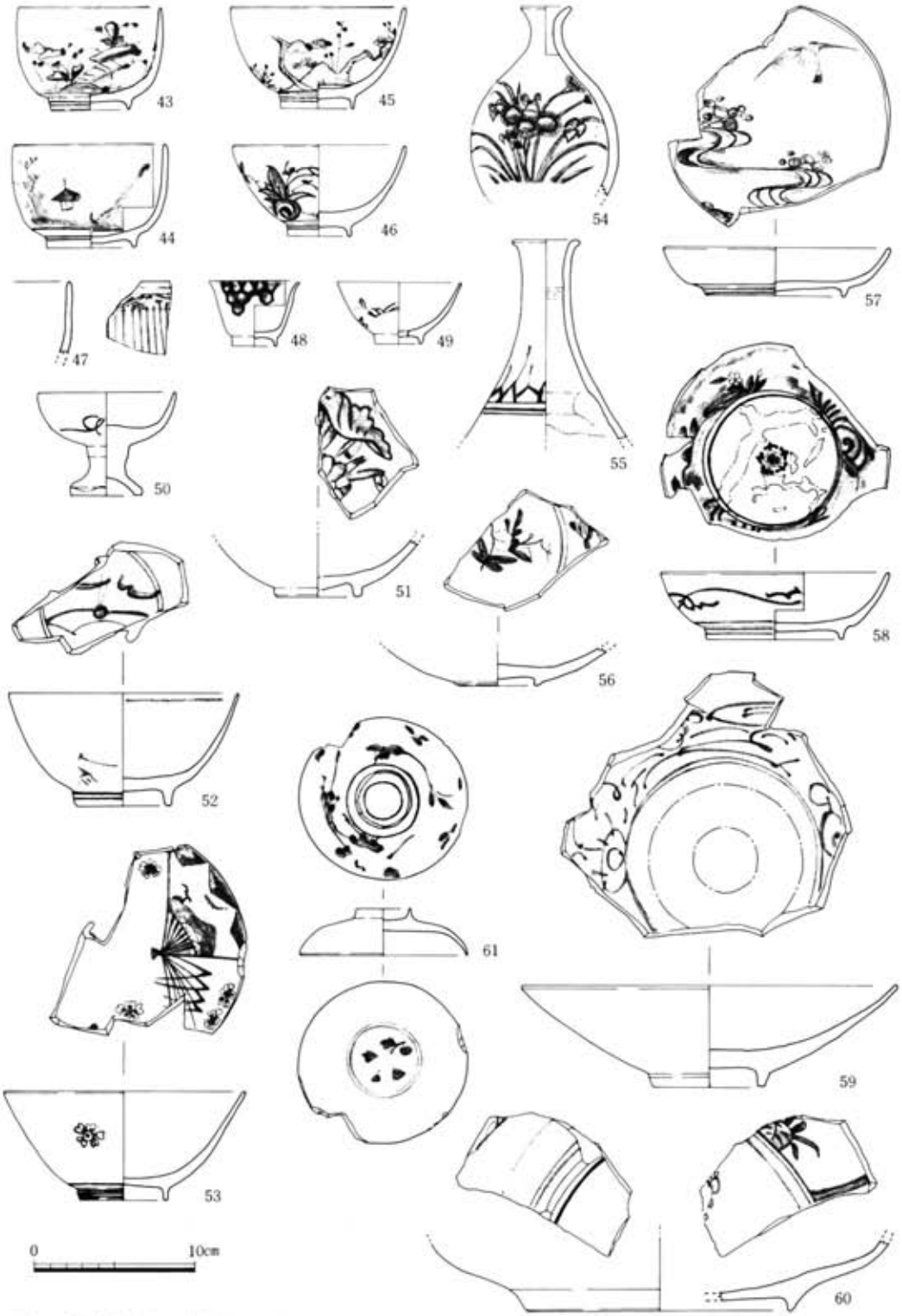


図94　吉村遺跡出土遺物実測図(3)

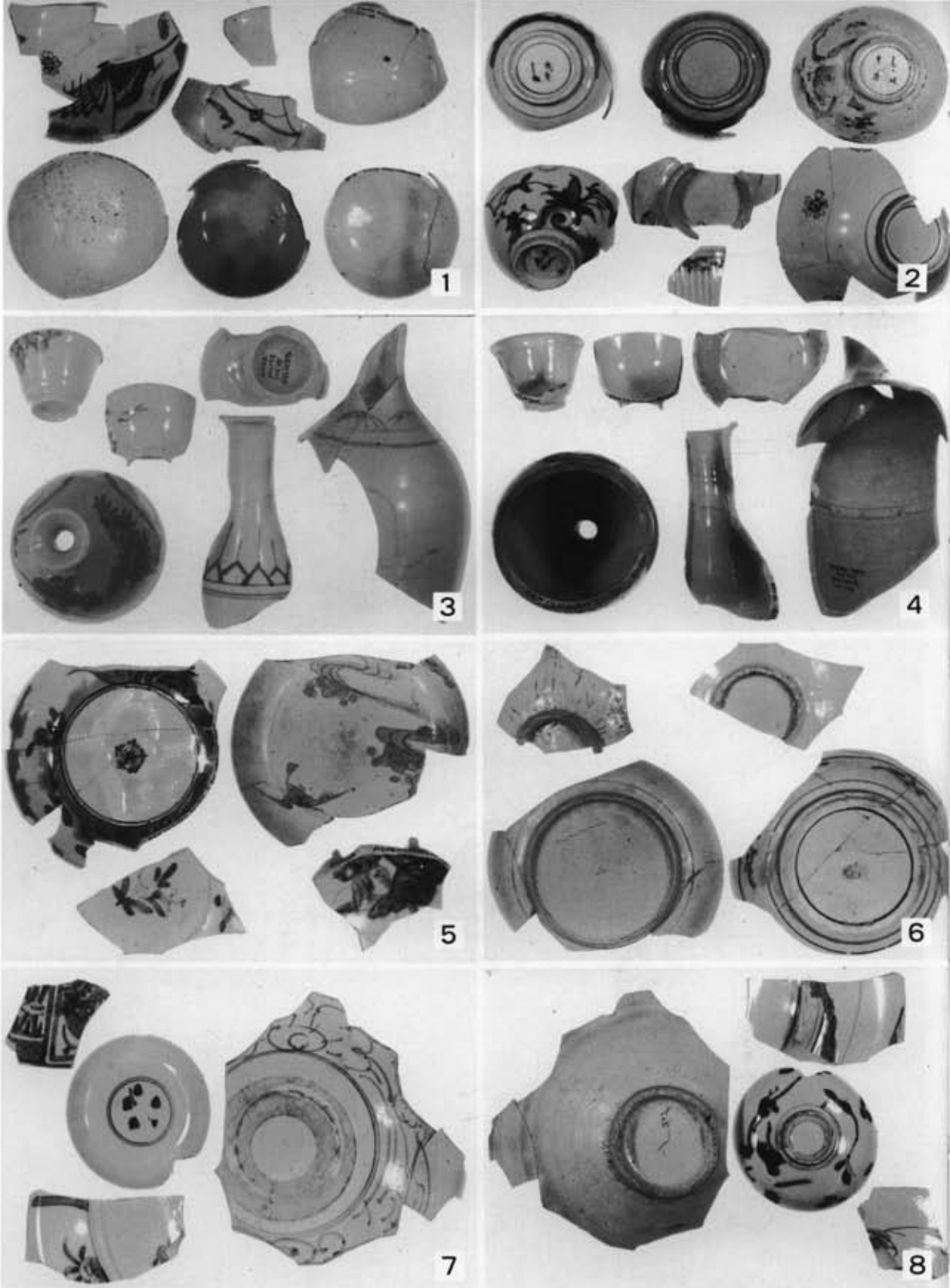


図95　吉村遺跡出土遺物(3)

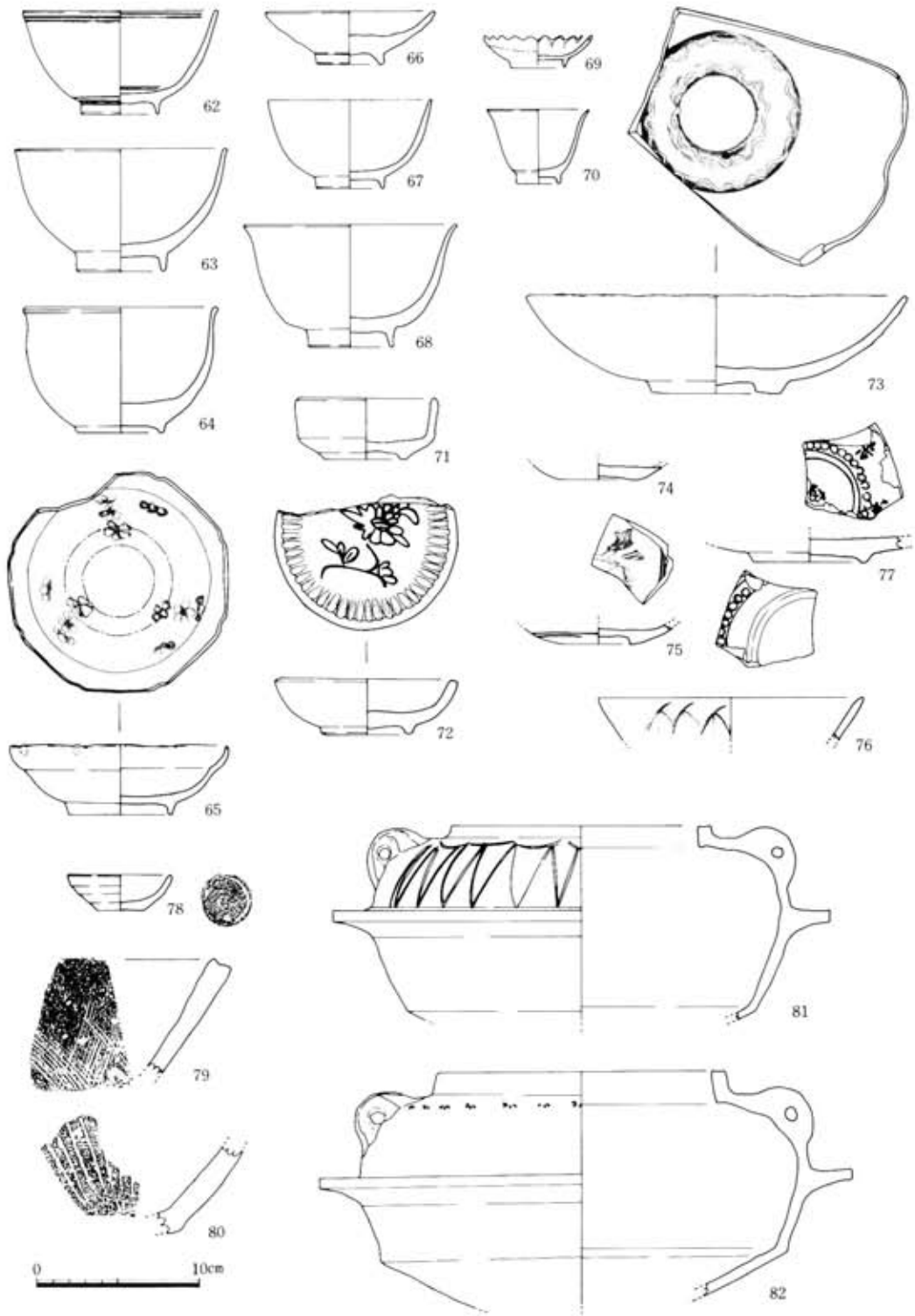


図96　吉村遺跡出土遺物実測図(4)

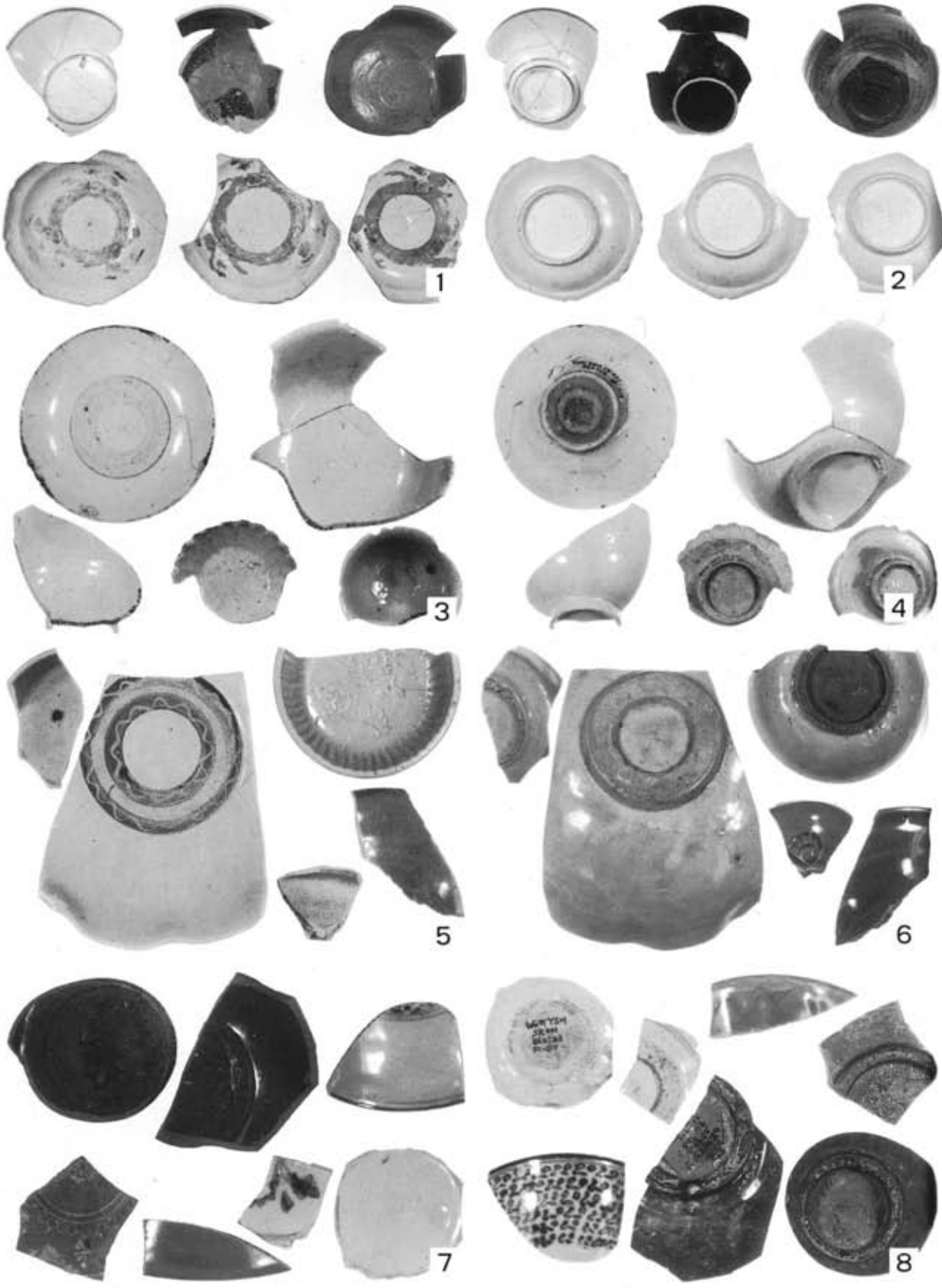


図97　吉村遺跡出土遺物(4)

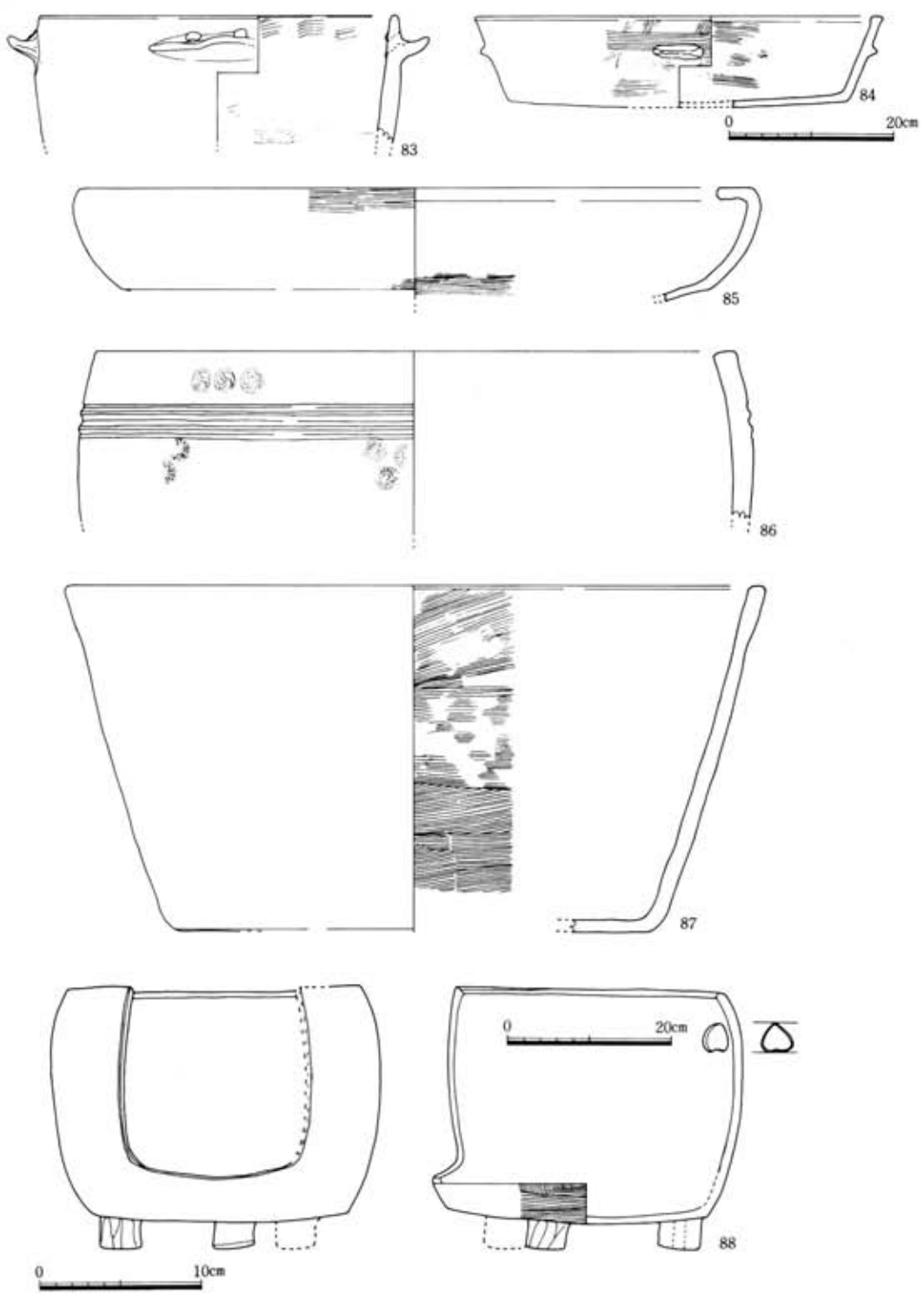


図98　吉村遺跡出土遺物実測図(5)

1

2

3

4

5

6

7

8

図99　吉村遺跡出土遺物(5)

23. 隆城跡（略号：ＴＡＫ）

遺跡の所在地

杵島郡白石町大字堤字堤

調査主体者

白石町教育委員会

調査期間

昭和61年７月～８月

調査面積

4,000㎡

遺跡の概要

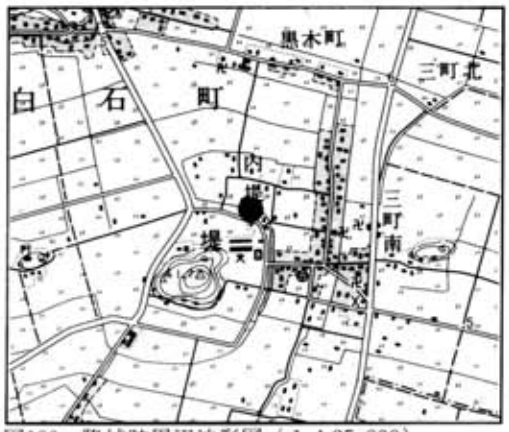


図100　隆城跡周辺地形図（１：25,000）

杵島山の東麓部に広がる平野部には独立した小丘が点在する。隆城はそのうちの一つ、標高42ｍ程の丘の上の小城で別名「須古城」、「高城」とも呼ばれている。

隆城に居を構えたのは平井氏である。平井経治は天文年間に須古城を本拠とし、東西に近接する小（雄）島、杵島の両支城には弟たちを配置し、周辺の地形とあわせて堅固な城となした。城の東側は三十間堀、南側は二重の外堀、西側は百町牟田といわれる泥田が広がっており、その難攻不落さは、龍造寺隆信の須古城攻めが４回目でやっと成功した（天正二年）ということからも窺える。

今回の調査は城跡（現在の須古小学校）北側の外堀跡の地割りと推測される水田地帯と、その北側に沿って走る土塁状の高まり部分について実施した。

水田部は東西約160ｍ、南北約25ｍを測る。中央部分を中心に幅２ｍ、南北長15ｍの試掘坑４本を設けた。その結果、現在の耕作土下0.7～0.8ｍに幅約4.0ｍ、深さ約0.5ｍの溝が水田の長軸と同様に東西方向に走ることを確認した。溝からは木材片が出土したのみで、土器などの遺物は発見されなかった。

土塁状の高まりは幅約９ｍで、南北両側は小排水路によって画されている。２箇所の試掘坑の所見では、耕作土と地山の黄褐色土との間に凸レンズ状に暗黒褐色土が存在することが判明した。暗黒褐色土は厚さ約0.2ｍで南側部分の堆積状況から判断すると人工的な盛り土の可能性が強い。北側部分については上作物の関係で確認不可能であった。

結局、調査の結果、現在の水田下に幅約４ｍの溝が東西方向に走ること、土塁状の高まりは人工的なものの可能性が強いことが確認されたが、溝と土塁状の高まりとは約20ｍの距離があるため、相互の関係は把握できなかった。また、溝と隆城跡との関係、現在の水田の区画と外堀の地割りとの関係も明らかにできなかった。

図101 1．隆城跡遠景
2．調査区遠景（本丸跡から）
3．調査区全景（東から）
4．第5・第6試掘坑（東から）
5．第5試掘坑（南から）
6．第7試掘坑（南から）
7．第2試掘坑（南から）
8．第2試掘坑溝

24. 辻遺跡（略号：ＴＪＩ）

遺跡の所在地

藤津郡嬉野町大字岩屋川内字辻

調査主体者

嬉野町教育委員会

調査期間

昭和61年６月～７月

調査面積

700㎡

遺跡の概要

図102　辻遺跡周辺地形図（１：25,000）

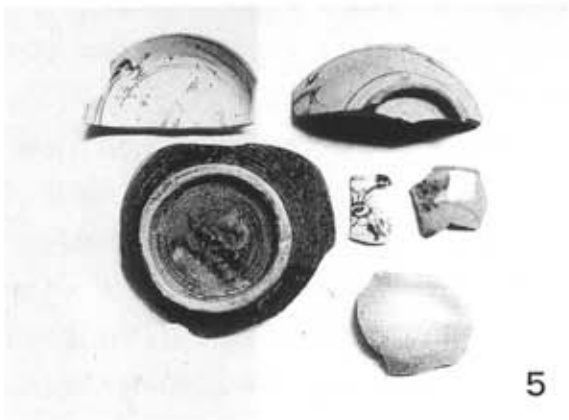
辻遺跡は嬉野川南岸にあたる丘陵端上に位置する。周辺では旧石器～縄文時代の遺跡が点在するが、弥生時代以降の遺跡は殆ど確認されておらず、山がちなこの地域の開発が谷筋の僅かな可耕地に限られていたことを示唆している。

調査の結果、近世中頃の屋敷と思われる遺構を検出した他、原位置を離れた縄文時代の遺物を少量得た。

遺構は掘立柱建物跡４棟・石組遺構１基・溝１条である。ＳＢ001建物跡は母屋と見られる建物跡で４×４間と想定される。間仕切の柱列が認められるが構造は不明である。また、これと重複して時期の異なる建物の存在も考えられる。ＳＢ002建物跡はＳＢ001建物跡の西側に南面をそろえて並ぶ。２×１間でやや小規模である。ＳＢ003建物跡は東西２間まで確認できるが、ＳＢ001建物跡の北側張出し部の可能性もある。ＳＢ004建物跡はややこれらと離れた１×１間の建物跡で、中央に平石敷きで受熱で赤変した浅い土坑状の火床があり、炭がつまっていた。ＳＸ005遺構は性格不明の石組遺構で、平面3.1×1.5m、深さ0.5mの長方形土坑中の北寄りに、礫を南に面取りして２列に積んでいる。ＳＤ006溝は調査区東端にある幅0.5～1.2m、深さ0.3mの用水路と思われる溝である。

近世の遺物は陶磁器が大部分で、他に鉄釘２点、鉄砲玉と思われる鉛玉２点、滑石製管状石製品２点がある。陶磁器は皿・碗が殆どであるが大型甕・長頸瓶・擂鉢も１点ずつある。日常食器を主とするが、比較的良質で、町内の不動山窯・内野山窯・吉田皿山窯、武雄市小田志窯・弓野窯の製品と考えられる。

今回の調査で検出された遺構は近世中頃の屋敷跡と見られ、完結した調査としては県内で初例である。また、不動山窯系の陶磁器は従来、地元周辺では殆ど出土例のなかったものである。窯業地としての特殊条件の中で、一般生活において陶磁器製品がどのような流通、使用状況にあったかを示す好資料であり、窯跡の調査と対比させて陶磁器生産全体を考えるべき問題を提起したと言えよう。



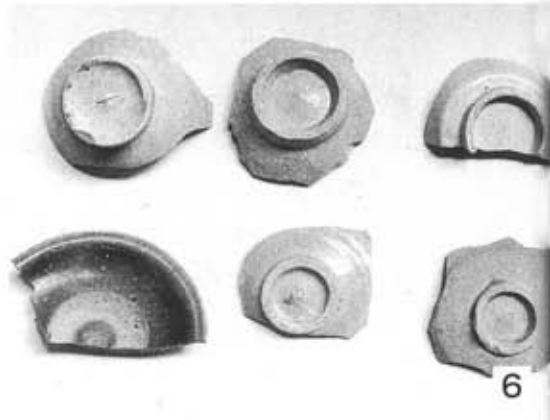


図103

1．辻遺跡SB001・002建物跡（東から）
2．SB004建物跡（西から）
3．SB001建物跡出土陶磁器
4．SB001建物跡北側出土陶磁器
5．SB004建物跡出土陶磁器
6．SD006溝出土陶磁器
7．染付瓶
8．染付碗

25. 馬立場遺跡（略号：ＭＡＴ）

遺跡の所在地

伊万里市東山代町大字里字馬立場

調査主体者

伊万里市教育委員会

調査期間

昭和61年７月～８月

調査面積

700㎡

遺跡の概要

図104　馬立場遺跡周辺地形図（１：25,000）

馬立場遺跡は、伊万里市の中心街の西方５㎞、東山代町字馬立場に所在している。遺跡の立地する市域の西部地域は、200ｍ前後の低平な丘陵地域とその崖下面に小河川により浸食形成された小扇状地形を中心とする緩傾斜地域とに区分され、南に位置する烏帽子岳から北方の伊万里湾に向って、低平な丘陵地形が発達している。遺跡はそうした丘陵の先端部をかすめて東流する黒川により形成された小扇状地形の扇頂付近標高22ｍの水田面に立地する。

周辺は、市内でも遺跡の多い地域であり、丘陵地帯を中心に分布しており、南東には旧石器時代から縄文時代晩期までの遺物を層位的に出土した白蛇山岩陰遺跡（県史跡）や弥生時代後期の小貝塚である岩戸山貝塚などが所在している。その他、古代～近世に亘る遺跡が点在している。

調査は、工事で削平される水田面の部分について行った。その結果、弥生時代後期末～古墳時代、平安～鎌倉時代にかけての遺物を含む土層が堆積した範囲を検出したが、明確な遺構は検出されなかった。出土遺物は、弥生後期末～古墳時代初頭にかけての土器が最も多く、その他、須恵器、青磁器、白磁器、石鍋などが出土している。また、希有な遺物として双鳥唐草文銅鏡が一面出土している。

馬立場遺跡は、遺物包含層を中心とする小規模な遺跡であるが、全体で数千点にもおよぶ弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器片の他、平安期と推定される双鳥唐草文鏡や鎌倉時代の石鍋や輸入陶磁器を検出した。特に３世紀末から４世紀前半にかけての土器類のまとまった出土資料は当伊万里地域では最初であり、伊万里地域の歴史的変遷を考える上で重要な資料となるものである。

註　盛峰雄『馬立場遺跡』伊万里市文化財調査報告書第21集　伊万里市教育委員会　1987

図105
1．馬立場遺跡調査区全景（南から）
2．遺物出土状況
3．双鳥唐草文鏡

26. 稗田遺跡（略号：ＨＥＤ）

遺跡の所在地

東松浦郡北波多村大字稗田字稗田

調査主体者

北波多村教育委員会

調査期間

昭和61年５月～６月

調査面積

400㎡

遺跡の概要

図106　稗田遺跡周辺地形図（１：25,000）

稗田遺跡は、岸岳から北西に延びる標高約５～10ｍの低丘陵上に位置している。

遺跡の西側を松浦川支流の徳須恵川が流れているが、流域には弥生時代以降の遺跡が濃密に分布している。なかでも細形銅矛の出土で著名な徳須恵遺跡[註1]や墨書土器・石製巡方が出土した座主遺跡[註2]は注目される。

調査の結果、弥生時代と中世の遺物包含層が確認されたが、遺構は検出されなかった。

中世の遺物は、土器（土師器坏・皿・把釜、瓦器碗、瓦質土器火鉢・擂鉢、須恵質土器片口）、陶磁器（青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、褐釉陶器耳壺・鉢）、滑石製石鍋、瓦、が出土した。青磁は龍泉窯系・同安窯系のもので、白磁は玉縁口縁と口禿のものが多い。13世紀前後を中心とするものであろう。

弥生時代の遺物は少量であるが、土器（甕・壺・高坏・鉢）と石器類（扁平片刃石斧、凹石、磨石、砥石、黒曜石石鏃・削器・剝片、安山岩剝片）が出土した。土器は中期前葉のものが主体を占める。

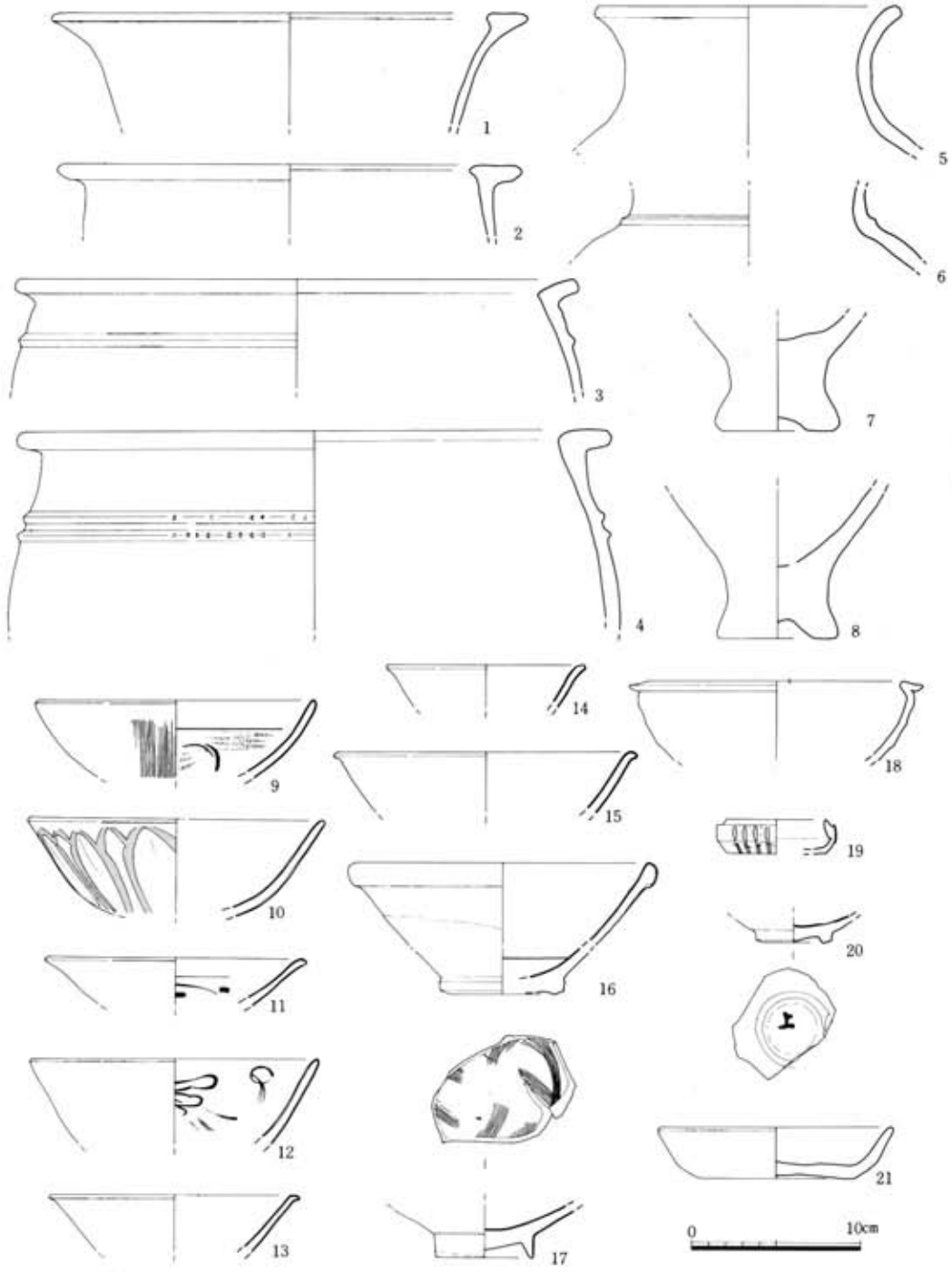
今回の調査地点は遺跡の縁辺部であり、主体部は稗田集落のある丘陵上に広がることが推測されるが、出土した遺物によって遺跡の内容の一端が明らかになった。

稗田遺跡を含む稗田地区一帯は、上松浦党の宗主である波多氏の城下にあたり、調査地点も「門ノ前」という通称名で呼ばれている[註3]。今回の調査ではこれに直接関連するような遺構・遺物は検出されなかったが、中世の東松浦地方を考える上で欠くことのできない重要な地域である。

註１　吉村茂三郎「徳須恵の甕棺地帯について」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯』　1940

註２　森田孝志『押川遺跡・座主遺跡・前田原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第60集　1981

註３　山崎猛夫「岸岳城――３――」『末盧国第21号』松浦史談会　1967



1～8：弥生土器
9～13：青磁　14～17・20：白磁　18：褐釉陶器
19：青白磁　21：土師器

図107　稗田遺跡出土遺物実測図

27. 荒崎遺跡（略号：ＡＲＳ）

遺跡の所在地

東松浦郡肥前町大字納所字荒崎・富貴坂

調査主体者

肥前町教育委員会

調査期間

昭和61年８月～９月

調査面積

1,700㎡

遺跡の概要

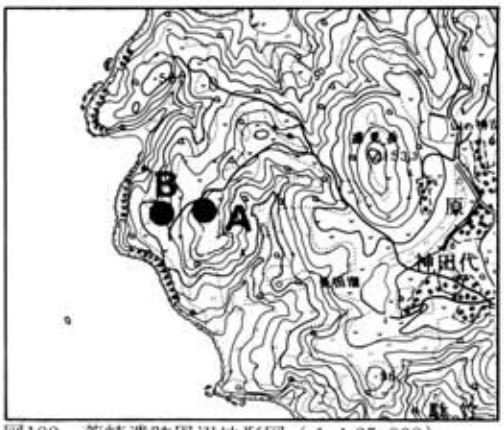


図108　荒崎遺跡周辺地形図（１：25,000）

荒崎遺跡[註]は、仮屋湾の湾入によって半島地形を成す肥前町西半部域、通称「入野半島」の北端部に位置している。調査は玄界灘に面した標高約50～90ｍの丘陵上、各々Ａ・Ｂとした２地点を対象とした。

入野半島周辺は旧石器～縄文時代の遺跡が密集しており、発掘調査の行われた遺跡も少なくない。なかでも旧石器時代の個体別資料多数を含む遺物が検出された磯道遺跡、縄文時代早期の遺構・遺物が検出された田尾遺跡、縄文時代晩期の遺構・遺物が検出されたコッポ遺跡は注目される。

荒崎遺跡も旧石器～縄文時代の遺跡として周知されていたが、今回の調査では縄文時代の遺物に混在して数点のナイフ形石器・台形石器が出土したに過ぎず、旧石器時代の包含層は確認されなかった。

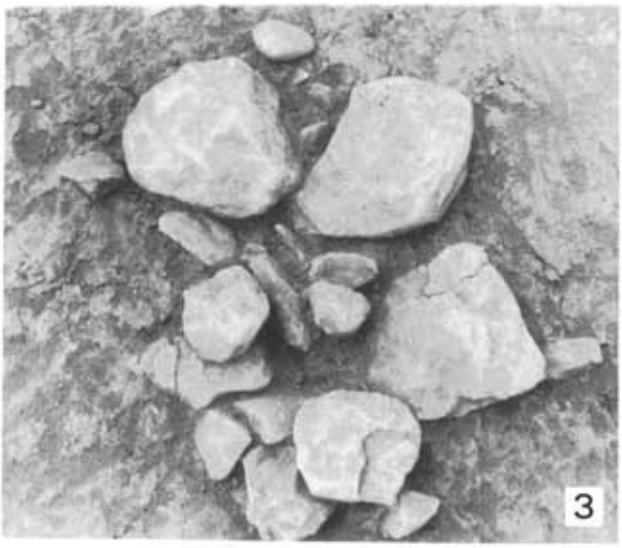
Ｂ地点では縄文時代を主とする遺物が少量出土したが、遺物包含層は認められず、時期不詳の遺構（集石１・土坑４・小穴５）を検出するに留まった。

Ａ地点では沢状の窪地に堆積した縄文時代の遺物包含層を確認し、集石１を検出した。

遺物は、石鏃・削器・磨石・敲石・砥石などの石器類が殆どで、土器は少量が出土したのみである。土器は細片で遺存状態も悪いが、辛うじて文様の解るものは早期の押型文土器である。

Ａ地点で検出された集石は、九州地方において縄文時代早期に類例の多い「集石遺構」・「集石炉」・「石組炉」などと呼称される遺構の一種と考えられる。肥前町では初例であり、県内では中原町香田遺跡、神埼町志波屋六本松遺跡、同船塚遺跡、唐津市コクダシ遺跡、同中尾二ツ枝遺跡に次ぐ検出例である。

註　徳永貞紹『荒崎遺跡』肥前町文化財調査報告書第６集　肥前町教育委員会　1987



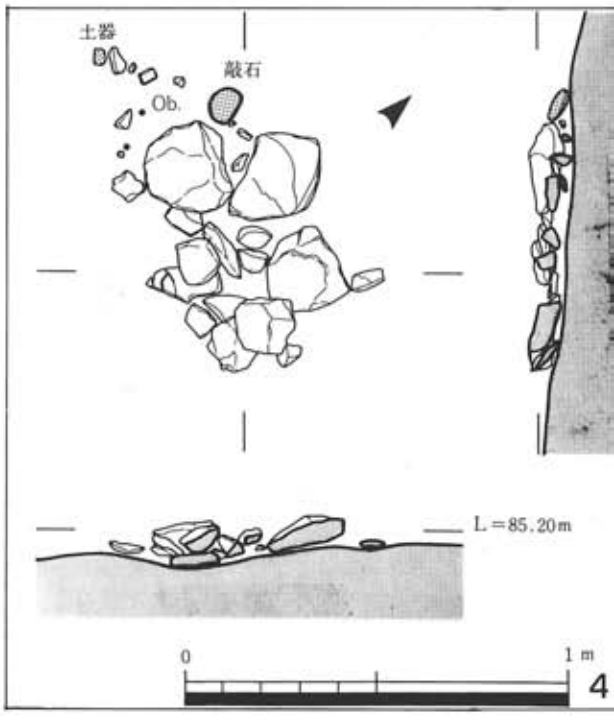


図109　1．荒崎遺跡A地点(南から)
2．荒崎遺跡B地点(東から)
3．A地点SX001集石
4．SX001集石実測図(1：20)

28. 吉野ケ里丘陵遺跡（略号：ＹＧＫ）

遺跡の所在地

神埼郡三田川町大字田手字三本杉

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和61年４月～５月

調査面積

800㎡

遺跡の概要

図110　吉野ケ里丘陵遺跡周辺地形図（１：25,000）

吉野ケ里丘陵遺跡は、脊振山南麓から佐賀平野に向かって細長くのびる洪積世低段丘の南端部に位置している。この標高20～30ｍの低丘陵は、従来から縄文時代～歴史時代に至る数多くの遺跡が密集していることで著名である。現在、同丘陵上では神埼工業団地の造成に伴う発掘調査が進行中で、900基にのぼる弥生時代の土器棺墓地や古代の官道跡が検出されているが、それらは本調査の発掘地点から北へ600～700ｍの近接したところにある。

調査の結果、弥生時代～奈良時代の遺構を検出した。主体は調査区の西側を中心とする弥生時代中期～後期の土器棺墓・溝などの一群である。検出した主な遺構は土器棺墓12・石蓋土坑墓１・竪穴住居跡１・溝７・土坑４・小穴多数、である。

土器棺墓は成人用５基、小児用７基の比率で、ほとんどが弥生時代中期後半頃のものである。墓地の主体は調査区外の西側にあると推測される。石蓋土坑墓も調査区西端部の土器棺墓の近くにある。

竪穴住居跡は平面が不整形な円形で、北側部分が未掘のため復元径5.5ｍ、壁の残存高６㎝である。中央には長さ0.9ｍ、深さ0.2ｍの土坑がある。

溝の中で注目されるのはＳＤ040溝である。この溝も調査区の西端にあるため全体の形状は不明であるが、検出できた約15ｍの部分から推測すると平面が円形に近い「環濠」的な溝になるものと考えられる。溝の中からは弥生時代中期～後期の壺・甕・器台・支脚などの大量の土器が出土している。それらの中には、１個体であるが外来系の甕もみられる。

土坑ではＳＫ030土坑が丹塗りの大型筒形器台を出土していることから弥生中期の祭祀遺構と推測される。ＳＫ021土坑は奈良時代の土坑で、須恵器、土師器の坏類を出土している。

以上のように、本調査では弥生時代～奈良時代の遺構を確認できたが、調査区域が限定されていたため、吉野ケ里丘陵遺跡の全体像を把握することは困難である。今回の調査区の周辺は昭和63年度に神埼工業団地造成に伴う発掘調査が実施される予定であり、その結果を待って検討を加えたい。

図111
1．吉野ヶ里丘陵遺跡
調査区全景（西から）
2．土器棺墓群周辺
3．SD040溝遺物出土状況

29. 杉籠（すぎごもり）遺跡（略号：SGR）

遺跡の所在地

神埼郡三田川町大字田手字杉籠

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和62年１月～２月

調査面積

720㎡

遺跡の概要

図112　杉籠遺跡周辺地形図（１：25,000）

杉籠遺跡は田手川の東岸―左岸の標高10ｍ前後の水田中に存在する。遺跡の南側に田手遺跡、田手川を挟んだ西側には吉野ケ里丘陵が横たわっている。水田は田手川の氾濫地帯であったため、遺跡内の耕作土下の包含層からは、弥生土器から中世の陶磁器、土師質・瓦質土器まで長期間にわたる遺物が混在して出土する。

調査は水路幅が８ｍであることから、８×90ｍの東西方向に長軸をもつ区域を設定した。遺構は調査区の中央部から西側に偏在し、多数の小穴群をはじめ溝・土坑などが検出された。

溝は４条で、いずれも南北方向に走っている。幅の狭いもので約0.6ｍ、広いもので約2.6ｍである。ＳＤ001溝は北側に向かってのびる平安時代の溝で幅1.8ｍである。溝内からは土師器碗、坏、甕、内面のみを燻した黒色土器碗、須恵器壺などが出土している。ＳＤ007溝は、調査区の中央部分に位置する。南側の幅の広い部分の埋土中から、弥生後期～終末の甕、支脚などが出土している。ただ、他の箇所からは、弥生中期の高坏や蓮弁文をもつ青磁碗、瓦質の鍋などが混在して出土しているので、部分的には後世の攪乱がひどいようである。ＳＤ008溝からは奈良～平安時代の須恵器坏、土師器碗、皿に混じって布目の平瓦も出土している。

遺跡の西側には土坑、小穴群が密集している。ＳＫ011土坑は平面不整形な長方形で深さ約0.2ｍを測る。坑内床面からは須恵器坏、土師器坏、皿、甕など多くの遺物が出土している。時期は奈良時代後半～平安時代前期の頃と考えられる。平面円形のＳＫ006土坑は径約1.4ｍで、坑内からは「かけや」状の木器が出土している。

以上のように、杉籠遺跡の主体をなすのは平安時代の遺構であるが、田手川の氾濫地帯に立地しているため、包含層からは弥生・古墳時代～中世の遺物が混在して出土している。それらの中で量的に多いのは、平安時代の土師器碗をはじめとして、古墳時代の須恵器坏身・坏蓋、瓦質の土鍋などの類である。弥生時代の遺物としては甕、高坏、袋状口縁壺、石包丁などが少量ながら認められる。

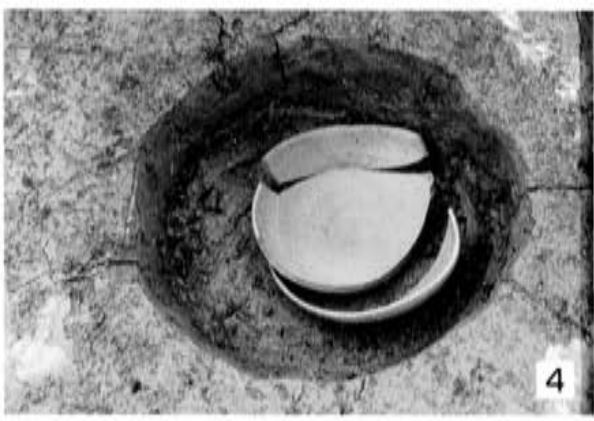


図113
1．杉籠遺跡調査区全景（東から）
2．調査区全景（西から）
3．SK009土坑
4．SK014土坑
須恵器出土状況
5．SK011土坑
土師器出土状況

30. 太田本村遺跡Ⅱ区（ＯＨＭ－Ⅱ）

遺跡の所在地

佐賀郡諸富町大字大堂

調査主体者

佐賀県教育委員会

調査期間

昭和61年９月～10月

調査面積

1,720㎡

遺跡の概要

図114　太田本村遺跡周辺地形図（１：25,000）

太田本村遺跡は筑後川の右岸、直線距離にして約２㎞の標高２ｍ前後の水田地帯に位置する。遺跡の東南には中世末の館跡と伝えられる太田城跡がある。また、本調査区の西側約100ｍの地点は諸富町教育委員会による調査が行われている（太田本村遺跡Ⅰ区）。

遺跡の基本的な層位は0.1ｍ程の耕作土の下に0.2～0.25ｍの黄褐色粘質土があり、その下に包含層である0.15～0.2ｍの黒褐色土がある。ただ、黒褐色土は調査区の北側から20ｍ程しか認められず、それより南側には遺物包含層は存在しない。

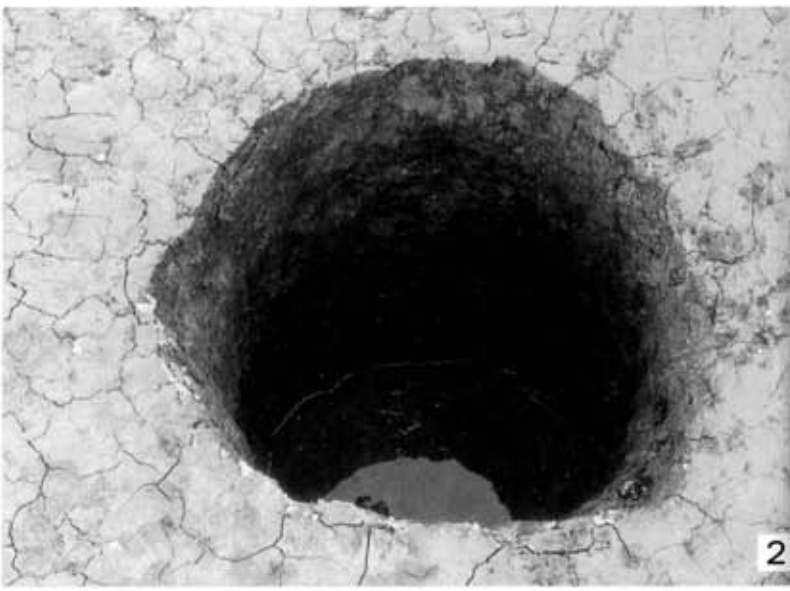
調査の結果、溝４、井戸２、土坑13、小穴などが調査区の北側から中央部分を中心として検出された。

溝のうちＳＤ005・006・020の３条は、北西―南東に主軸をもつ弥生時代終末～古墳時代前期のものである。これに対して、高台付の土師器碗が出土していることから時期的にも平安時代と下がる南西隅のＳＤ021溝は、南北方向に走っている。ＳＤ005溝とＳＤ006溝は平行し、かつ距離約3.0ｍと近接した位置関係にある。ＳＤ006溝で長さ約17.8ｍ、最大幅約3.6ｍ、深さ約0.3ｍである。ＳＤ020溝は長さ約20.4ｍを確認しており、東端は平面隅丸長方形の土坑となっている。土坑は約0.9ｍと深く、坑底付近からは肩部に櫛描波状文をもつ布留式の甕や木材などが出土した。

井戸は２基とも調査区の北西隅にある。いずれも平面円形の単掘りである。ＳＥ012井戸では、深さ0.5～0.9ｍの部分から古式土師器の壺、甕、小型丸底壺、高坏などが一括出土した。

遺物包含層からは弥生時代後期～古墳時代前期の大量の遺物が出土した。いずれも小破片であるが、なかには大型の器台で長方形の透し孔をもついわゆる鼓形の器台や、直立する口縁部をもつ高坏など東九州の影響を受けた土器も出土しており注目される。また、土師器では外来系と推測される長頸壺なども出土している。

註　本書Ｐ.76



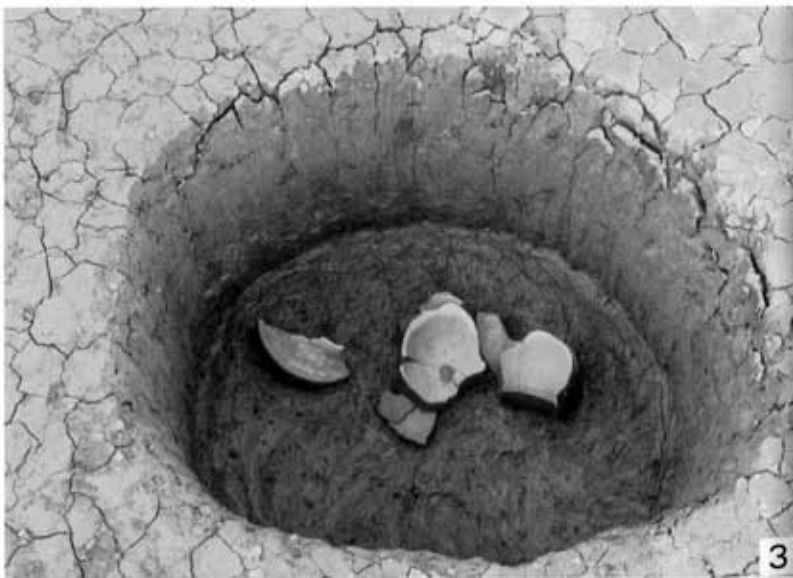


図115
1．太田本村遺跡Ⅱ区全景
2．SE011井戸
3．SE012井戸遺物出土状況

Ⅵ. 総　括

昭和61年度に実施した農業基盤整備事業に係る文化財調査のうち確認調査は、佐賀東部地区で鳥栖市・基山町・三根町・上峰村・神埼町・千代田町・東脊振村・脊振村の15地区、佐賀西部地区で佐賀市・富士町・諸富町・川副町・大和町・多久市の９地区、佐賀南部地区で武雄市・白石町・有明町・鹿島市・塩田町の11地区、佐賀北部地区で伊万里市・西有田町・相知町・北波多村の９地区、佐賀上場地区で唐津市・呼子町・鎮西町・玄海町の10地区である。この他、東脊振村西石動農道、三瀬村高瀬第二地区・七軒谷地区、佐賀市嘉瀬地区・城西第１・第２地区、小城町晴田中部地区・湯の谷農道、武雄市本部地区、鹿島市竹ノ木庭地区、塩田町後山地区・熊野地区、嬉野町下野地区、伊万里市腰岳農道、浜玉町南山上地区・大岩農道、七山村山口地区、厳木町浦川内農道、唐津市重河内地区、肥前町影地区・仁田野尾地区・高尾地区・入野地区・八久保農道・高尾農道・曲川農道・古田山農道・牛浦農道、玄海町値賀川内地区・有浦下地区、鎮西町菖蒲地区・打上地区・赤木第３地区・風呂尾呂農道・笠山農道・串の元農道については踏査を行った。また白石町については埋没条里確認調査を実施した。その他、筑後川下流用水事業に係る文化財確認調査は三田川町・諸富町について行った。

発掘調査は、佐賀東部地区14遺跡、佐賀西部地区４遺跡、佐賀南部地区９遺跡、佐賀北部地区２遺跡、佐賀上場地区１遺跡について実施した。以下、確認調査については地区ごとに、発掘調査については時代ごとにまとめる。

文化財確認調査

佐賀東部地区　北茂安町北茂安中部地区、神埼町右原・石井ケ里地区、千代田町直鳥地区・下板地区、東脊振村石動工区で遺跡の存在が確認された。北茂安中部地区では弥生時代・中世の集落跡（江口二本松遺跡）が確認された。右原・石井ケ里地区で古代官道と考えられる遺構面（鶴前田遺跡）が検出された他、古墳時代～中世の遺物と竪穴住居跡・溝・小穴などの遺構が検出され、該期の集落跡と考えられる。直鳥地区では直鳥城跡の範囲で中世の遺構・遺物が検出され、別の地点でも新たに中世の遺物包含層（直鳥四本松遺跡）が確認された。下板地区では藤木西分遺跡で弥生時代～中世の集落跡が確認された。石動工区では弥生時代～中世の集落跡である下石動遺跡の広がりが確認された。

佐賀西部地区　佐賀市久保泉東部地区、諸富町諸富第３・第６工区、大和町川上南部第１・第２地区、多久市多久東部地区で遺跡の存在が確認された。久保泉東部地区では弥生時代～中世の遺物と井戸・溝・土坑が検出された（上和泉遺跡）。諸富第３工区では３地点で弥生時代後期～中世の遺構・遺物が検出された（太田本村遺跡ほか）。諸富第６工区では６地点で弥生時代後期～近世の遺構・遺物が検出された（三重本村遺跡ほか）。川上南部第１地区では弥生時代の土器棺墓・土坑・小穴群を確認した。川上南部第２地区では奈良～平安時代の集落跡を

確認した。多久市多久東部地区では4地点で縄文時代後期初頭の遺物包含層、古墳時代前期の集落跡、中世の小穴群を確認した（上田町遺跡ほか）。

佐賀南部地区　武雄市川登地区・橘地区、鹿島市中村地区で遺跡の存在が確認された。川登地区では甕屋A窯跡群の広がりが確認された。橘地区では小野原遺跡、みやこ遺跡、玉江遺跡、北上野遺跡で弥生時代～中世の集落跡が確認された。中村地区では狭い範囲で土坑・溝と土師器・青磁が検出され、中世の小規模な生活遺跡（国広遺跡）と考えられる。

佐賀北部地区　伊万里市大里地区、相知町伊岐佐地区で遺跡の存在が確認された。大里地区では西尾遺跡で掘立柱建物跡と思われる小穴群と明代染付片などが検出され、弥生時代～中世の集落跡と考えられる。伊岐佐地区では弥生時代の土器棺墓1基が検出され、墓域の広がりが予想される。

佐賀上場地区　唐津市山道工区・朝月幹線水路・和多田団地、呼子町殿ノ浦工区で遺跡の存在が確認された。山道工区では縄文時代の土坑と遺物包含層が確認された（草履作遺跡）。朝月幹線水路では十蓮Ⅱ遺跡で旧石器～縄文時代の遺物包含層が確認された。和多田団地では古墳1基と近世墓地が確認され、中世墓地が存在する可能性もある。殿ノ浦工区では弥生時代の遺構・遺物が3地点で検出された他、古墳2基（松尾田古墳群）と文禄・慶長期の陣跡関連遺構が2地点で確認された。

筑後川下流用水事業　諸富町小杭工区で遺跡の存在が確認された。溝、土坑などの遺構が検出され、弥生時代後期～中世の集落跡と考えられる（小杭村中遺跡）。

発掘調査

旧石器時代～縄文時代

旧石器時代では、荒崎遺跡でナイフ形石器が数点出土したが、遺物包含層は認められなかった。縄文時代の調査としては、荒崎遺跡で早期の集石が、立花遺跡で晩期前半の土坑が検出された。立花遺跡出土土器は、当地域の編年に有効な資料となろう。

弥生時代

弥生時代の調査は本年度も多く、特に県東部地域における資料の充実は著しい。船石遺跡では中～後期の大規模な集落跡が調査され、隣接する船石南遺跡の墓地との関連で注目される。泉三本栗遺跡では前～中期の竪穴住居跡などが調査されたが、前期前半の住居跡は佐賀平野における稀少な検出例として特筆される。この他、西石動A遺跡・池上二本松遺跡・小野原遺跡・太田本村遺跡・吉野ケ里丘陵遺跡などで集落跡・墓地の調査が行われた。

古墳時代

古墳時代の調査としては、石動裏田遺跡で後期群集墳の一部が調査された他は、いずれも集落跡の調査である。船石遺跡・西石動A遺跡・中園遺跡・泉三本栗遺跡で竪穴住居跡などが検出されている。中園遺跡・畑田遺跡・馬立場遺跡では古式土師器の良好な資料が出土しており、

なかでも馬立場遺跡出土土器は伊万里湾岸地域で初めてのまとまった資料として興味深い。

古代（奈良時代～平安時代）

神埼町の馬郡・竹原地区遺跡群（中園遺跡・吉野ケ里遺跡・志波屋二ノ坪遺跡）で奈良時代の道路跡・掘立柱建物跡・井戸などの多数の遺構と遺物が検出された。遺物の中には墨書・刻書土器多数や帯金具が含まれている。隣接する吉野ケ里丘陵では工業団地造成に伴う調査で同時代の大規模な掘立柱建物跡群などが検出されており、地区一帯が奈良時代の官衙的性格の強い遺跡群であることが明らかになってきた。この他、西石動A遺跡では竪穴住居跡を主とする集落跡の一部が調査されている。

中世（鎌倉時代～室町時代）

中世の調査としては、集落跡の調査例が多いが、西石動A遺跡・的小渕遺跡では鎌倉時代の土坑墓が、古館遺跡射手塚では土坑を埋葬主体とする塚が調査されており、該期の墓葬に関する情報が蓄積されつつある。

近世（安土・桃山時代～江戸時代）

吉村遺跡では集落の縁辺と思われる部分が調査され、17世紀後半～18世紀前半の一括廃棄と見られる陶磁器・土器・石臼が出土した。消費地における陶磁器の在り方を知り得る貴重な資料である。辻遺跡では近世中頃の掘立柱建物跡群などが検出された。当時の屋敷地のほぼ全体像を把握し得る県内では初めての調査例で、出土した陶磁器には同じ町内の不動山窯跡の製品が含まれており、陶磁器流通に関する新たな知見を得ることができた。また太田本村遺跡では16世紀後半の濠を伴う生活跡が検出され、近世太田氏の居城である太田城との関連が考えられる。

佐賀県文化財調査報告書第90集

佐賀県農業基盤整備事業に
係る文化財調査報告書6

発行　昭和63年3月31日
佐賀県教育委員会
佐賀市城内1-1-59

印刷　大成写真製版所
佐賀市巨勢町牛島
TEL0952-23-1846